禪學講話

明治
39 6 20
內交

序

我親愛なる青年諸士、卿等それ燥急に失せずや、燥急は決して大事を成す所以にあらず、却て卿等が頭腦を燒爛せんのみ。如ず心を平かにし氣を輕くして以て大いに養ふ所あらんには。卿等それ妄動に失せずや、妄動は活動と同じからず、活動は規律あり目的ある運動なり、妄動は然らず、却て卿等が目的を疝礙し卿等を忙殺するに了らん。如ず心を靜かにし體を胖かにして以て深く脩むる所あらんには。

ウイルリアム、ロバアトソン云はずや、

人類の至切なる要求は幸福を希ふにあらずして、平和

を渇望するにあり。人心の眞に雄偉剛强なる所以は其平靜なるにあり。平靜は煩惱と相容れず、勞作、苦力、煩擾を解脫し、慾望なく、悔恨なく、悲痛なき心狀なり。『凡て勞れたる者、重きを負へる者は吾に來れ、吾、汝等を息ません』といへるは實にこゝにあり。

休養なる哉、休養なる哉、卿等は休養を要す、是れ卿等が活動の淵源なればなり。今や社會は益々複雜を極め、人事は愈々繁劇を加ふ、是に於て乎休養の要愈々益々大ならんとす。

卿等それ氣を輕くし體を裕にし心を靜かにし智を明かならしめんと欲せば禪を學ぶに如くはなし。禪は卿等が過敏なる神經を靜め、卿等が充血せる頭腦を涼くし、卿等

が昂進せる感情を制し、卿等が卑俗なる慾火を鎭め、卿等が夢想せる空望を散し、卿等が理性を明確ならしめ、卿等が大圓鏡智をして宇宙を照さしめん。卿等それ禪を學ばんか、涼風忽ち卿等が懷ろより生じ、明月は卿等が胸中に昇り、百華は卿等が想念を織り、山水は卿等が心意を描きて、壺中の乾坤は卿等の逍遙するに一任すべし。

惟ふに卿等の敵は感情の盲動なり、惡魔は此中に伏在す。休養とは他なし、盲目なる感情をして心內の平和を攪亂せしめざるにあり。既に盲目なる感情の妄動するなくんば卿等が思想は其中正を失ふことなし。圓月老師が中正銘の序に云く

正也者遵道而不邪、中也者適道而不偏、適故能通、遵

故不失、不失者微乎理而正也、能通者精乎事而中也、中正也者道之大本也已、予所居皆以中正扁焉、庶幾乎道也不可須臾離也之訓也

と其銘にいふ、

執中乎性、以行厥正、惟道之盛、天錫爾慶、遵之以正、恒而毋病、行正乎躬、以執厥中、惟道之通、天錫爾豐、適之以中、變而無窮、中兮弗過、正兮不頗云々

於戲、中正なる哉。佛は之を中道と稱し、儒は之を中庸と名づく、萬學の至理こゝに攝すべく、萬敎の大本こゝに在りて存す。

禪の要は唯卿等の一心をして其中正を守らしむるにあり。我親愛なる青年諸士、徒らに燥急なる勿れ、徒らに妄動

する勿れ、靜思せよ、休養せよ。龍湫の謂ふことを見ずや、

人間萬事不如休、馳逐東西到白頭、息影山牕閑坐睡、
自然無喜亦無憂、
人間萬事不如休、交友多同風馬牛、歸去來兮何處是、
白雲影裏一林丘、
人間萬事不如休、此句能醫我百憂、勝彼神仙眞秘訣、
永言畢世銘心頭、

明治卅九年五月廿九日

忽滑谷快天識

注意九則

一、本論は明治三十九年三月廿七日より同四月六日に發る迄十日間、佐賀縣曹洞宗教友會員の需めに應じて講述したる禪學十回講義の原稿なり。

二、本論は教友會員の編纂に係ると雖も誤植脱字等一切の責任は講述者之を負ふ。

三、本論は普通傍聽者の爲めに講述したるものなれば通俗を旨とし多くの例話を挿入せり。

四、本論の證文には多く修證義を引用せり、這は曹洞宗信者の爲めにした る講演なるが故なり。

五、本論は主として修證義により曹洞宗の教理を解説したりと雖も、曹洞宗の教理と禪門一般の教理と二途あるにあらず。

六、本論の解説は講演者が所信の儘を縷述したるものにして必ずしも舊説と一致せず。

七、本論は大體に於て講演者の著『禪學批判論』と同じ、然れども彼此繁簡出入あり、讀者二書を併せ見れば著者の意見を知るに足らん。

八、多少學識ある讀者は本論の第一章及び第十章を熟讀せば禪の何たると著者の意の何れにあるとを知らん、必ずしも全篇を通讀するを要せず。

九、若し夫れ其人にありては本篇の如きは無用の冗談のみ、謂ふことを見ずや。

『人、有字の書を讀むことを解して無字の書を讀むことを解せず。二有絃の琴を彈ずることを知て、無絃の琴を彈ずることを知らず。述用を以てして神用を以てせず。何を以て琴書の趣を得ん。』

禪學講話

目要

第一章　人生の謎……第一頁

人生の謎—青年男女の厭世—善惡一心、禍福不二—人生の苦悶は夢中の苦悶の如し—夢中の精神狀態—入道の初門—無常觀—無常變遷は活動なり生命なり—空觀—一九の辭世—鐵牛の偈—祖元の偈—宇宙は一大神靈なり—吾人は運命の支配者なり—クセノフハヂスの名言—神は吾人が精神の影像なり—佛道と人道の合一—物外和尚の句—平常心是道—フラアの語—ホイチヤーの語—法眼和尚圓通和尚の逸事—一切法皆是佛法—天桂和尚の語—夢窓國師の語—生死即涅槃—大綱和尚の瓢簞の讖—禪の安心は氣輕く中心空しきにあり—大岡忠相の逸事—阿三婆の辭世—良寛和尚の辭世—エピクロスの名言

第二章　形骸と精神の歸一——身心

不二論……第一九頁

身心不二の一元論——身心別體の惑——色心不二——心理的證明——パウル、ブレクジッヒの思惟中樞說——生理的證明——假死と眞死の別——妖怪譚の原因——身體の健否と思想の關係——ヴントの變說——カント等の變說——精神病學的證明——催眠術的證明——環溪禪師の幽靈退治——犯罪學的證明——精神なき身體なく身體なき精神なし——個體的靈魂說——唯物の病弊——唯心の病弊——ラトーンの僻見——基督敎の陋見——見神の實驗——實驗とは何ぞや——大惠和尙の偶——正身端坐——身體の脩養は精神の脩養に必要なり——ラスキンの知言——賴山陽の豪放及び孝心——荻野獨園の逸事

第三章　宇宙と生物の歸一——依正

不二論……第四〇

宇宙の雄大——宇宙は大なるにも限りなく小なるにも限りなし——世界は重重に重疊す——萬有は一々皆一宇宙なり——萬有は皆身心の二を具ふ——萬物有心の事實——精神とは自發的活動に外ならず——萬象は皆生物なり——宇宙の靈智——卵細胞——人類は宇宙の靈智を享けて生る——宇宙調和の德——人類は宇宙調和の德を享けて生る——進化論者の僻見——天道即人道——永嘉大師の語——宇宙の默示——澤水和尙の歌——シエクスピヤの名言——萬物は宇宙の銳なり——ゲーテの語——法隷和尙の語——汎神敎——超絕神敎——惟一神敎の弱點——天地同根萬物一體——白隱禪師と原宿の商人

第四章　天道と人道の歸一——生佛

不二論……第五七頁

衆生と佛陀——歷史的佛陀——衆聖點記——釋尊の降誕年代及び入滅年代——釋尊說法の梗概——四諦——八正道——三學——白樂天と道林禪師——無我論——無靈魂論——無神論——無始無終——因果律——小野蘭山の逸話——圓通和尙の逸話——

無我中に於て眞我を示す—實在的の佛陀—金剛經の證文—華嚴經の證文—佛は常恒なり遍在なり唯一なり自存なり清淨なり自在なり—フラアの語—永嘉大師の語—實在的の佛と歴史的佛との關係—佛と一切生物の關係—陸象山の名言—芭蕉の金言—天人合一の妙境—芭蕉の終焉

第五章　天國と人世の歸一—淨穢不二論……第七六頁

眞善美の合一—厭世主義の不合理—幸福なる所以の要件は苦痛ある所以なり—苦樂は一心にあり—塙保巳一の觀月—鳥の見方—蟲の見方—猿澤の池の古歌—老死を苦とする妄執—無繩自縛—佛智慧によりて佛土淨なりと見る—回教の天國—希臘人の地獄—天國と地獄とは精神の苦樂を具體的に示したるなり—佛經の極樂—唐僧元曉の話—圓覺經の證文—彌勒發問經—フレデリック大王と其侍童—マホメットの寛大—基督の德化王孫賈の母—北條時宗と佛光國師—矢部定謙の逸事—大鹽平八郎の性急

本莊宗資の謹厚—道元禪師、風外和尚の潔白—十事の心得、座右銘

第六章　社會と個人との歸一—自他不二論……第八九頁

自己と他人とは同一存在の分身なり—身體上よりの觀察—子體は親體の再現なり—アリストトルの謬見—人類は一個の「我」の再現分身なり—連續律—萬物の生成は一も連續律に由らざるなし—生物は一株の大樹の如し—精神の方面より觀察す—吾人の智識は祖先已來經驗の結果なり—吾人の心狀態は他人の心狀態と離れて成立する能はず—平生の生活上より觀察す—自利は利他となり利他は自利となる—人間の二性情—個人的性情—社會的性情—自己中心說の妄—道德心の萠芽—戀愛神聖論の妄—個人的性情のみなれば人世は沙漠の如し—社會的性情は人世を美化し善化す—資財の利は增加を生せず—精神の利は增加を生ず—自利は自己に害を及ぼす—歴山大王の死—豐臣氏の滅亡—ナポレオンの死—車善七の忠

孝と德川家康の大度

第七章　理性と道德の歸一——悲智

不二論……第一一八頁

慈悲と智慧——田子方と老馬——眞理は圓の如し——慈悲は理性を要す——三種の迷ひあり第一に世相の迷ひ第二に自我の迷ひ第三に因果の迷ひ——因果論——善因善果惡因惡果——三種の因果——第一物理的因果——第二精神的因果——第三道德的因果——ソクラテスの例——ジオンフスの例——快川和尙の例——善行は長へに天下を益す——善人は萬代の師表となる——惡人は之に反す——善惡の行爲は行爲者が其善たり惡たることを意識せざれば道德的判斷を下す能はず——愚人あり父を殺す例——慈善家の例——人あり誤りて其母に毒を侑めたる例——三時業——順現報受——順次生受——順後次受——ラスキンの名言——三世因果の妄說——德川綱吉の迷信——モンテスキューの陰德——正智を眼とし慈悲を足とせよ

第八章　理想と實行との歸一——修證

不二論……第一三八頁

修證の意義——修の始めなし證の終りなし——無限の進趣——人間の一生は大なる石造の高樓を築くが如し——人生の目的は如何——生物の進步に三段の階級あり——第一無意識時代——第二意識的時代——第三目的を意識する時代——人間の進步にも三階級あり——宗敎は人生の目的を吾人に敎ふ——佛敎の說く所は人生の目的は悲智の向上にあり——理想實現——四弘誓願——佛法に奇特玄妙なし——黃蘗希運禪師の逸話——ロングフエローの詩——日日是好日——涅槃經の語——誌公の警句——身體の感覺を失ひたる精神病患者の例——古池眞傳

第九章　心操身行……第一五九頁

懺悔滅罪——罪惡は人の過失なり——人間に三種あり第一普通人民第二狂愚

人第三眞狂人—改過遷善すれば罪の根原を斷つ—人性惡ならば改過遷善は不可能なり—伊賀保鑛泉の譬喩—ロウウエルの知言—受戒入位—道德と宗敎—宗敎は道德の根柢なり—宗敎と道德とは併行す—宗敎は倫理と合一することなし—宗敎の根柢なき倫理は浮雲の如し—マホメットの例—ソクラテスの例—天桂和尙の例—發願利生—布施—誠拙和尙の例—スピノッアの語—布施は献身なり—愛語—久世大和守の例—利行—谷重三郎仇討の例—同事—同事は同情なり—四攝法は歷代天皇の心とし給ふ所なり—禪は靜寂飄逸にあらず—お察女の例—行持報恩—佛心を以て心とするこれ佛恩を報ずるなり—曾呂利新左衞門の譬喩—吾人の智德的活動は天地の鴻恩に報ずるなり

第十章　歸結……第一八一頁

生死は人類活動の最要件なり—人世は不如意なるを可とす意の如くならば宇宙の法則は亡びん—人生の苦悶は夢中の苦悶に同じ—萬象は假相の

み—宇宙は一大神靈なり—身心は不二なり—唯心唯物の弊—靈と肉とは一なり—精神の脩養には身體の脩養を要す—生物は小宇宙なり—萬有は一元に歸す—精神は自發的活動なり—宇宙に靈智あり—宇宙調和の德—天人合一—宇宙人生の目的は智德の向上にあり—汎神敎は最高の宗敎なり—釋尊は實在の權化なり—吾人は佛性を具す—無靈魂—實在の佛—眞善美—天國も地獄も一心にあり—人類は一我の分身なり—生物の根本は無機物なり—自他は不二なり—智悲の合一—善因善果惡因惡果—無限の進趣向上—宗敎は道德の根柢たり—報恩

目次

禪學講話

忽滑谷快天述

第一章　人生の謎

曩昔エジプトの國にスフィンクスと名くる女面獅身の大怪物がありまして旅人に對して奇妙なる謎をかけ、其謎を解くこと能はざる者は皆慘殺したといふ話しがあります。想ふに宇宙は一大スフィンクスにして人生は其奇妙なる謎であります。されば吾人は生死の荒野を旅行する間に宇宙なる大怪物が吾人の眼前に呈露したる自然現象と稱する謎を解かねばならぬ、若し此謎を解きそこねたならば吾人は大怪物に食ひ殺されて憐れなる最後を遂げるのであります。例せば古へ天然痘の流行したる時、或基督教の牧師は以爲らく天然痘は神が人間の不信を罰する爲めに天より下したるものなれば、之を治療するは却て神意に背くが故に宜しく自然の趨勢に一任すべきでお

ると。是に於てか天然痘は愈々其猛威を逞うして猖獗を極め、無辜の人民は夥しく其害毒に斃れたのであります。これは基督教の牧師が闇愚にして天、然痘と稱する謎を解きそこねたから徒らに惨害を蒙つた次第であります。斯の如く自然現象と稱するものは一々吾人の面前に呈露されたる謎でありまして、天災地變と名づくる惨害は皆吾人が此謎を解く能はざる爲めに生じたる災禍であります。例せば電氣と稱する現象は無智なる小兒や、無學の人々に對しては危險千萬なるものであるけれども其法則を知り、其謎を解いた人には非常に便利なるものである。されば禍ひといふも幸ひといふも元來別物があるのではない、唯吾人が『自然』を使ひ得ると否とに因て二途を生ずるので、換言せば吾人が『自然』の謎を解き得ると否とによりて禍福途を異にするのであります。

かくして人生の問題もスフィンクスの一大謎でありまして之を解くことができない爲めに煩悶し懊惱して憐れなる最後を遂ぐる人が澤山ある。殊に近來青年未熟の男女が其分齊を省みず、青春の情に任せて其希望を遂げんとし、

其目的を達せんと苦慮焦心する結果、失[illegible]を悲觀し苦觀し、厭世の病に罹りて自殺を企つるものが少くない。這は青年の犯され易き憂鬱病にも因るのであるが畢竟は善惡一心、苦樂不二の理を悟らずしてスフィンクスの餌食となつたのであります。凡そ吾人の世に處するや、疑ひあり惑ひあり惱みあり悲みあり煩ひあり苦みありて容易に安心することはできぬ而して此等幾多の苦悶の因て來る本源を求むるに一心の迷ひに外ならぬ。吾人の見る所によれば人生の苦悶は猶ほ夢中の苦悶の如くである。吾人の夢には種々の種類があります。其重もなるものは第一觀念の再現、第二感覺の誤認であります。觀念の再現とは夢中にて死せる朋友に逢ふたり、萬里を隔てたる胡鄕に遊ぶ夢を見るやうなもので過去の觀念が夢中に再現するのである。次に感覺の誤認とは睡眠中兩脚の寒さを感じて河を渡る夢を見、咽喉の痛みを感じて食事の夢を見、枕より頭を落して高處より墜落したる夢を見るが如きであります。然り而して夢中の精神狀態に就て審かに觀察するに三種の特徴があります、即ち第一に時間空間の

混亂、第二に理性の喪失、第三に感情の旺盛であります。例せば夢中には幾十年前の出來事を目前に見たり、幾百里外の人と面會したり、甲地と思へば忽ち乙地となり、古への事と思へば忽ち今の事となりて時間空間の二つが全く混亂じて居ります。次に夢中には理性の働きは殆んど喪失して專ら感情的となり、喜怒哀樂の情のみ熾んにして、或は激怒して人を毆打し或は哀痛に堪へずして聲を放つて泣くことなどは何人も屢々實驗する所であります。而して吾人が人生の苦悶も亦夢中の精神狀態と同じく、理性は薄弱となり、感情のみ徒らに激昂して世事を一々念頭に介し、喜怒の情を發動するより生ずる。されば人生に苦悶する人は必ず過去の出來事を追懐して悔恨懊惱の涙を流し未來の出來事を夢想して憧憬欽羨の笑を漏し、理性の缺乏を來して專ら感情の奴隷となるが常であります。要するに夢中に於ける吾人の煩悶は其夢中の境たるを知らざるより起るが如く、吾人が人生の煩悶は人生の眞相を看破せざる迷執より起るのであります。果して然れば人生の眞相はそも如何でありませう。吾人は先づ入道の初門として

無常變遷の理を知らねばならぬ。されば修證義に

無常憑み難し、知らず露命、いかなる道の草にか落ちん、身、已に私に非ず命は光陰に移されて暫くも停め難し、紅顏のいづくへか去りにし、尋ねんとするに蹤跡なし

とありまして、天地間の萬象は皆悉く無常、即ち變遷不定なるを以て時々刻々新陳代謝して其生命を全うし其活動を現はしつゝある。若し天地間の萬有が一定不變であつて變化遷流のないものとすれば开は一切死物となり了りて活動も生命もないものとなる。故に人間も誕生したり、生長したり、老衰したり、死亡したりして變化遷流するので始めて活動あり生命あるものといはるゝ。若し始めより終に至るまで少しも變化がなく生長もせず、老衰もせず、石塊瓦片の如くならば人の人たる所以は全く消失してしまう。さすれば人生には老病あり、死滅ありて無常であればこそ人生の價値もあるなれ、老病もなく死滅もなき人生は全く無價値の存在、無活動無生命の存在であります。ラボックの語に

時は貨幣なりといへども、時は貨幣に勝れり、時は生命なり

とある如く、時々刻々の變遷は吾人の生命其物であるから光陰の惜むべきは生命の惜むべきが如くであります。かく無常といふことを觀念して、修證義に示せる如く

今生の我身、二つなし三つなし

と實際に感じたならば何人も眞面目になるでありませう。鳥の將に死んとする其聲や哀し、人の將に死んとする其言や善しとあるも此道理で、洵に無常憑み難しと觀する時は愈々終焉に際したる時の如く眞面目となりて道に入ることができるのであります。ポープの語にも

年々、歳々、歳は毎日何物かを吾等より盗み去る、而して遂に我等を全く盗み去るに至りて止む

とあります。實にポープの謂へる如く歳は毎日吾人の顔面より紅頰を盗み去りては其代りに皺皮を殘し、又綠髪を盗み去りては其代りに白髪を植ゑ、或は黑髪を盗み去りて其代りに何物も殘さぬこともある。故に吾人は歳の

爲めに全身を盗み去られざる間に努めて道を學ばねばならぬ。賴山陽は僅かに十三歳にして

十有三春秋、逝者已如水、天地無始終、人生有生死、安得類古人、千載列青史

と歌ふて其大志を現はしたといふてあります。されば「ティロル」も

急惰は世界最大の放蕩なり

と云ひ、高祖大師も

最勝の善身を徒らにして露命を無常の風に任すること勿れ

と戒められたのであります。「ルーテル」の語に

人心は猶ほ水車の石臼の如し、小麥を以て其下に置けば回り〳〵て之を挽く、然れども小麥を入れざれば回り〳〵て其自身を挽き壞るに至る

といふてある。如何にも其通りで吾人の心は水車にかけたる石臼の如くであるから事業なる小麥を與へて之を挽かしむれば粉を挽きて其功を全うする、然れども若し事業なる小麥を入れざれば回り〳〵て其れ自身を挽き破

るのである。故に吾人は常に事業を要します、若し一も事業なくして閑居する時は必ず不善をなして自ら傷ふるに至るのであります。

既に述べました如く一切の萬有は皆悉く無常にして變遷不定であるとすれば、覆載の間には一として定相のあるものはない、即ち一定した相狀を有するものはないのである。例せば同一の水にわりても氷ともなり蒸氣ともなり雨ともなり雪ともなり雹ともなり霧ともなり霞ともなり虹ともなり河ともなり海となり湖水ともなる。水には決して一定不變の相狀はない。されば水が流るゝも蒸發するも凝結するも皆水の假相にして眞相ではない、其眞相は不生不滅といふより外にはないのであります。單に水のみが左樣なのではない、岩石も强熱に逢へば溶解し、空氣も壓迫し冷却すれば水となり、大陽も熱を放散すれば地球の如くなり、地球も其熱を失へば月球の如き死體となりて人畜の生活に適せぬやうになるのである。さすれば大は蒼空の大陽より小は地上の微介孑蟲に至るまで皆悉く假相を現しつゝあるものといはねばならぬ。かく萬有は一定不變の形相なければ生に生の相なく滅に滅の相もなく有に有の相なく無に無の相もない、此を諸法皆空の理といふのであります。

かく空理に悟入すれば事物の假相に執着するの惑を除くことができます。例せば花は咲くも散るも假相であり、人は生るゝも死するも假相である。さるを咲ける花を散らすまじと思ひ、生れたる人を死なすまじと希ふは事物の假相に執着したる背理の迷情であります。斯かる背理の迷情を除けば吾人は無常遷流の人生に處して徒らに煩悶するやうなことはないのであります。滑稽文學の泰斗たる一九の辭世に

此世をばどりやお暇にせん香の
烟となりてはい左樣なら

とある。一九が歿しまして後門弟一同遺言によりて泣く〳〵師匠の遺骸を火葬に附したる所、火が棺中に入るや否や轟然一發、何物ともしらず爆發して棺を貫いて飛び揚つた。門弟一同は此物音に驚き念佛の聲も止み涙も乾き果て能く見れば花火の爆發したのでありました。これは一九が臨終の

時に何物ともいはずして大切な品であるから死骸と一所に火葬にして呉れといふて如何にも大切らしく懐ろに入れて死んだものがあつたが、それが、花火であつたのであります。一九はかくして膝栗毛式の往生を遂げたのであるが、實に人生の假相に執著せず愉快なる人物であります。鐵牛和尚は或僧の問に應じて一棒を與へたるに不幸にして其僧を打ち殺してしまうた其時和尚直ちに一偈を打して

紅葉落時山寂々、蘆花深處月團々、提起向上那一力、虚空碎爲七八片

といはれて即座に引導を渡されました。圓覺寺の祖元和尚も元兵の爲めに斬られんとした時、從容として偈を打し

乾坤無地卓孤節、喜得人空法亦空
珍重大元三尺劍、電光影裏斬春風

といはれた。これ皆空理に安住したる悟りであります。

さりとて禪は單に諸法皆空の理のみを談するのではない、宇宙は一大神靈の顯現にして吾人の遊戯すべき一大樂園であると信ずるのである。ルーテ

ルの語に

極樂なる語は全世界に適用すべし

とある如く吾人の宇宙は決して穢土だの、塵世だのといふて厭ふべき所ではない。否、吾人の樂むべき欣ふべき希望ある所は此宇宙其物であります。然るを吾人の愚蒙なる人生の外に淨土を求め、宇宙の外に天國を憧憬して不合理なる迷情を滿足せんとするは憐むべきであります。古語にも

人は皆自己の運星なり

とあり、ロンクフェローも

吾人は皆運命の建築家なり

といひました如く吾人の運命を支配するものは蒼空の星にあらず、上天の神にあらず、吾人自身である、人生をして地獄たらしむるも極樂たらしむるも吾人自身であるといふが禪の敎へであります。此理に達せざるが故に世人は往々造物主なるものを夢想して吾人は皆神命によりて左右せらるゝと盲信するのである。造物主畢竟何物ぞと討尋したならば直ちに开は吾人

が精神の産物であることが知れませう。何となれば世人は皆上帝とは人間の如きものと思ひ、人間の如くにして一種超絶せる存在と想ふて居る。而して上帝なる思想は信者が思想の深淺によりて高下の差別なるに徴しても吾人が心の産物たるを知るであらう。故にクセノファネスは

若し牛又は獅子が人間の如く手を有し、而して其手を以て畫くことを得、又、器物を作ることを得ば馬は馬の如くに、牛は牛の如くに神を畫くならん。

エティオピヤ人は其神を色黑く鼻平かなりと思ひ、トラケイ人は其神を碧眼赤髯なりと思へり。

と申しました。佛像に就て之を見るも暹羅の佛像は暹羅人の如く唇厚く色黑く作られ、安南人の佛像は安南人の如く温顏豐頰にして婦人の如く作られ、日本人の佛像は日本人の如き容貌に作られてある、されば西洋人が佛像を作つたならば赤髯鋭鼻の像を作るべきや疑を容れざる所である。されば上帝といひ造物主といふも畢竟は吾人が精神の影像であつて此宇宙と人生を捨て外に神も佛もあるではない。是を以て佛道といふも人道の外に

はなく、極樂といひ天國といふも此世の外にはないのであります。物外和尚が大黑天の贊に

足ることを知れば誰しも福の神

と、いひ、また同人の句に

極樂もこの通りなり盆の月

といふてある、實に其通りであります。此理によりて禪宗にては

平常心是道

と申して安心立命の道は平常心にあると示すのである。故に平常吾人の業務をとり、義務を果し、人道を踐み行く所に安心もあり解脫もあり極樂もあり佛道もあり菩提もあるのでござります。フラアの語に

今日最も卑近なる汝の義務を以て汝の宗教となすべし。

とありますがこれ亦名言と申して宜しい。宗教といひ、敬神といふは決して平常吾人の實踐する所と異りたる道ではない。されば**ホイチヤ**も

慈悲ある所には神の平和あり、互に親愛するは正しき禮拜なり、愛語は

祈禱なり、微笑は聖詩なり

と申して慈悲哀愍のある所に神は住み給ひ、同胞相愛し相憐むは敬神の最も深き所にして親愛の語を以て人と語るは神に祈禱すると同じく、互に微笑を漏して和樂するは聖詩を歌ふて神德を讃ずるのと同一である。昔し黄檗宗の高德法眼和尚が其道友たる圓通和尚と共に京都に住したる時、『一日法眼圓通に語りて曰く祇園に茶屋といふものあり、師兄かつて行きたるか。圓通いふ、未だ訪ひたることなし。法眼、さらば共に行きて見侍らんとて手を携へて祇園にゆき、軒高く門亦大なる家を見て、この處宜しかるべしと、つと入りて、我は攝州の法眼なり、おのれは紀州の圓通なり。主人は何と云ふやと、そのことく〳〵しきさまに、主人最と驚きながらも、かねて二人が知識の名を聞き及びしかば、之を一室に請し、家名などを述ぶ。法眼、女どもの立まはるを見て、主人は娘を多くもたれたりと見ゆ、この座に招かれよと云ふ。主人あやしみつゝも、之を呼びあつめ、法眼つく〳〵見て、さては好き育ちなり。親の身にしては、さぞうれしからむ。因緣にもなる

べきなれば、いざ、三歸を授けひ、いつれも合掌して我云ふことを唱へよとて、やがて高聲に之を授く。はや女だちには用はなし、立されよと、かくて法眼も還り去らんとするに主人これを止めて齋を供し、布施をも贈りければ法眼いとゝねもごろに回向して還りぬ』と近世禪林言行錄に載せてあります。然れば法眼や圓通の如き智識にありては佛祖の道場にありても酒肆娼房の中にありても等しく佛道を行ふに差別はない。法華經には治世產業皆佛道にあるざるなしと說かれ、金剛經には

一切法皆是佛法

と說かれ、天桂和尚は

大凡世間に實なるものは佛法に實ならざるなし、佛法に實ならざるものは世間にも亦實なることなし

といはれました。即ち平常心が直に佛道で、世間法即佛法、人道即佛道である。夢窻國師も

臨終の覺悟と申すも平常にかはらず……鬼が見え候とも驚かず、佛見え

給ふとも隨ひ喜ばず、只何の心もなく息の止るを善き往生とは申すなりと示されたのである。然れば娑婆即淨土、生死即涅槃と心得て一點の疑を容れず、假令惡魔出來るも驚かず恐れず、阿彌陀如來が來迎し給ふとも喜ばず、何の疑惑もなく洒々落々たるのが禪の安心である。大綱和尚は自ら瓢を畫きて之に題していふ

瓢や、瓢や、汝、眞桑瓜の位もなく、西瓜の暑を掃ふ德もなし。然れども氣も輕く、中空くして無欲なれば仙人も汝を友として酒を入れて腰に携へ、あるは駒を出して樂めり。汝は瓜の類に居て庖刀の難に逢はざるは智なり、鯰を押へて逃れしむるは仁なり、羽柴公の馬印となりて强敵をくだくは勇なり。汝性は善なりといふべし。歌

うかうかと暮すやうでも瓢たんのむねのわたりにしめくくりあり

此讃の中にて『氣輕く中空し』とあるは大いに味ふべき文字でありまして禪宗の安心は氣輕く中心空しきを要とするのである。大岡越前守が八代將軍の

前に召されて汝は何を以て天下の政道を正し江戸町奉行の職を全うするぞと問はれた時に一つの「起きあがり小法師」即ち紙製の達磨を出して將軍に示し、如何に此達磨を顚倒しても常に起きあがる如く政道に曲非なからしめんと言上し、且つ黃金一枚を紙製達磨の上に載せて其起きあがる能はざるを示して町奉行が賄賂に心を奪はるゝ時は政道正しきを失ふ旨を諷したといふ話しがありますが、洵に紙製の達磨は氣輕く中心空しければ如何に七顚八倒するも中正を失ふことはない。心が中正を失はざれば智仁勇の三德も自然と備はる道理であります。白隱禪師に參じて所得ありたる阿三といふ老婆は臨終の時に近親の人々が集りて辭世を殘さんことを請ひたるに言の葉の露も殘らぬ世の中に

如何なることをいふておかまし

といふて往生し、良寛和尚は其辭世の句に

かたみとて何殘すらん春は花
夏ほととぎす秋は紅葉

といはれた。これ等を氣輕く中心空しき善き安心と申すのでありませう。

エピクロスの語に

我に麵包と水とあらば幸福に於て天帝に讓らず

といふてある。これは哲學者の氣輕く中心空しき安心である。要は生死即涅槃の一條道を踐み、婆婆即淨土の一條道を行き、人道即佛道の一條道を進みて踐み誤らぬのが禪門の要術であります。是を以て修証義にも

生死の中に佛あれば生死なし、生死即ち涅槃と心得て生死として厭ふべきもなく涅槃として欣ふべきもなし、是時初めて生死を離るゝ分なり

と示されたのであります

遊武夷山　圓月

群峰突々沒煙鬟、天柱獨拔青天外、手援鐵索登僊棧、眼眩股戰心將退、
仙翁縱叟上上頭、別有世界窮幽深、下視下方如按圖、九曲縈帶溪流
天下洞天三十六、何緣縮在我雙目、白石堅々草茸々、物々無不仙種族、
向使秦皇曾一來、徐生不可尋蓬萊、吾家萬里青海外、到此鄉念消如灰

第二章　形骸と精神の歸一——身心不二論

上述の如く禪門の要道は單純なる一條道で、人道即佛道、生死即涅槃、婆婆即淨土、煩惱即菩提、何事も唯一條道を行くのであります。此一條道のことを高祖大師は一法究盡といはれ、維摩經には不二法門といひ、哲學者は一元論といふのである。依てこれより七個の不二法門を開いて禪の大要を講述しやうと思ひます。

先づ第一に身心不二とは吾人の身體と精神とは同一物の二方面である、即ち身體なき精神なく、精神なき身體なしとの理であります。然るに身體と精神とは獨立したる二個の存在の如く思ふのが世人の常習でありまして、吾人が祖先以來思想習慣の惰力によりて身心の二つを別に見る惡癖を生じ容易に拔くべからざる惑ひであります。人類學者の說によれば人類が地球上に始めて發生して以來今日迄大約二十五萬年を閱したと申しますが吾人人間は此廿五萬年の長春秋を透して今日に至るまで身心別體の惑ひに染

み奇妙なる妖怪譚を喜んで荒唐不稽なる幻覺に惱まされつゝあるは憐れむべきの至りであります。通佛敎にては色心不二と申しますが、色とは礙性あるもの、即ち空間を塡塞する物質を指し、心とは慮知念覺ある精神を指すのである。故に色心不二とは物質と精神と同一體なるを申したので今茲に謂ふ所の身心不二と同說でありまする。吾人は此身心不二の理を諸方面より論證して見やうと思ふ、併し可及的常識にて理解し得べき證據によりて說くつもりであります。

先づ生理及び心理の上から觀察しまするに、吾人に精神的活動のあるは大腦の灰白層に生理的活動のある時のみで、此外に精神の起る場合は斷じてありませぬ。次に感覺に就て見るも聽覺の中樞は大腦の側面に發見せられ、視覺の中樞は後頭葉に發見せられ、嗅覺中樞も大腦の側面にあるものゝ如く、壓覺の中樞は正中回轉にありとは學者の確定したる所である。概して感覺中樞は後部に位置し、運動中樞は前部に存在するとも疑ふべからざる所である。且つ感覺の連合ありて觀念の生ずる如く、腦の各中樞にも纖維

の聯結するありて其共動の可能なるを示して居ります。パウル、フレクジッヒといふ人は腦に四個の思惟中樞ありて、吾人は能く事物を思惟する由を論じたと申しますがこれは未だ遽かに信ずることはできませぬ。併し言語を發動する中樞は大腦にありて其部位の損傷は失語症と名づくる腦病を生ずるのである。西洋の或る腦病患者はタンといふ一語のみをいひ、他には少しも言語を發することができなかつた。此に類する多くの失語症の患者を解剖したる結果腦の或點に軟化を發見し、それより言語中樞の存在は多くの異說あるに拘はらず學者の信ずる所となつたのである。更に理解し易き感情に就て之を見るに恐怖の情起りたる時は動悸を發し、戰慄を生じ、冷汗を洗し、顏面蒼白を呈し、全身立毛する。これは外部に現れたる身體の狀態にして之れを吾人が內觀したる時恐怖の情といふのである。動悸もなく、戰慄もなく、立毛もなくして恐怖することは決して不可能であります。之と同じく悲哀の情が起りたる時には血行は緩慢となり、顏面は蒼白を呈し、眼瞼は垂れ下り、頭首は前に垂れ、下顎は垂下し、涙を催ほし嗚咽する

のである。これは身體に現れたる外部の狀態にして之を內觀したる時は悲哀の情といふのであります。

かくして身體を離れたる精神はなく精神なき身體はないから身體の一部たる感覺機官に刺激を與ふれば直ちに感覺なる精神狀態を生ずる、例せば眼球を閉ぢて指を以て之を壓する時は一種の光を見、また電氣を眼に通ずる時は光線を見、發熱の爲めに音響を聞き、また藥材を服用したる爲め音響を聞くが如きは何人も經驗する所であります。

更に男子の去勢したる場合に就て觀察するに睪丸を抉出せられたる男子にありては全く生殖の精慾缺乏するを見る、然れば睪丸は生殖的情慾に大關係あること明白である。且つ去勢の後は男子の皮膚及び筋肉は柔かなること女子の如く、音聲は其調子を高め、全身女性的徴候を呈すると同時に精神に於ても婦女の如く怯懦となり、忍耐力減少し、遠謀深慮なきに至るを見る。これ精神と身體との同一なる明證であります。

然るに世人は往々身體と精神とを峻別して精神は身體と獨立して存在する

が如く思惟して居る。例せば斬罪に處せらるべき囚徒があつて愈々處刑すると申渡されて刑場に引出され、斬首人は刀をとりて刀背を以て囚徒の首を打ち、同時に血液と同温の水を其頸に注ぎて恰も出血したる如く感せしめたるに囚徒は人事不省に打斃れて死したりといふ話がある。此實例を見て世人は以爲らく、當該囚徒の身體には何等の異狀もない、然れども精神が身體を離れたるが故に其儘死したるのである。故に精神は身體の主となつて獨立して存在すと。這は大なる誤解であります。何となれば囚徒が刑場に臨みたる時には恐怖の情を發して其身體には心臟の動悸も高く、顏色は土の如くなつて居ります、而して斬首人の一擊に逢ふた瞬間に心臟麻痺を起して一時假死の狀態に陷つたのであります、假死の狀態の時に醫治を加ふれば甦る者であるが其儘に捨置けば、眞死となるのである。故に此場合に於ても身心の二つは同一と見るより外はない。世間に一旦死亡したる人が甦つた例は澤山ありますが皆假死より甦つたので眞死より甦つたといふは決してないのである。然るを愚俗の人々は假死より復活した人が假死中に

何物かを見たといふやうな話しをすると、それに尾鰭を附けて彼の人は地獄へ行つて還つて來たといふやうな妖怪談を搆成し、言ひ傳へ語り傳へて荒唐不稽の迷信に雷同するのであります。若し世に復活したる人があるならば其人は決して眞死に陷つた人ではないから假令死後のことなどを說くとも毫も信ずるに足らぬ。所謂妄談夢說であります。

次に古今の學者に就て之を觀察するに健全なる身體の人には健全なる人生觀あり、不健全なる身體の人には不健全なる人生觀あり、嚴肅に身體を保ちたる人には嚴肅なる倫理主義あり、放蕩に身體を持ち崩したる人には放蕩なる倫理主義あり、同一の人にありても壯年の才氣橫溢せる時の學說と老年の精神萎縮せる時の學說とは同じからず、例せば碩學ヴントが其著『人類の心理を論じ併せて諸動物の心理に及ぶ』と題したる書に於て始めには一元論的立脚地に立ち、後には全く二元論に豹變したるが如き、またカント、フィルヒョー、デュボア、レイモン等が老後に變說したるが如きは著しきものである。近きは我國に於て淸澤滿之師、高山林次郎氏等が肺病に罹りて以

來思想の一變せるが如きは讀者の熟知せらるゝ所であらう。

復次に精神病患者に就て觀察するに或患者は從弟が常に其身を追逐して負債の返濟を請求するを見、或裁縫師は死せる愛兒が常に眼前に現はるゝを見、或患者は神が患者に命じて勞働者を救濟せよと命ずる聲を聞き、或患者は其母親が血痕斑々たる衣を著け面色蒼白となりて窓懸の布に現はれたるを見、或患者は自己の思想を盡く空中の聲より聞きました。斯の如き精神病患者は醫師が研究の結果皆腦髓及び神經に異狀あるを認めたのであります。

復次に催眠術に就て觀察するに術者が被術者の手に赤インキを塗りて汝の手は火傷せりと告げたるに被術者は非常に疼痛を感じ、更に同一のことを數回反覆したるに遂には被術者の手に水腫狀のものを生じたといふ。これ蓋し火傷の實感を起さんには實際身體に損傷なくんば不可能なるを示すものといふべく、恰も一狂人が天より火の玉の降るを見、火の玉の當りたる所は皮膚に赤色を呈したると一般であります。また術者が被術者を押すが如き擧動をなせば實際には押さゞるも被術者は倒るべし。這は押されだり

との觀念を生ずるには身體其物が押されたると同一となるを要する明證であります。また被術者が悲哀の觀念を與へらるれば號泣し落涙して身體上に其情を現はすが如きも身心一如の理に外ならぬのである。

環溪禪師が巡敎の途次に幽靈の出るといふ家に邂逅した。其家の主人夫婦は其娘を虐待して死に至らしめたるが毎夜死せる娘が三更の深夜に髪を振り亂して幽靈となつて現はれるので夫婦共アリ〳〵と恐ろしき娘のすがたを見るといふ。依て禪師は其幽靈を退治せんとて娘の墳墓に坐具を敷きて終夜坐禪したるに其夜より幽靈は全く跡を潛めて現はれず、夫婦は快く安眠することができた。そこで引續き一週間禪師は墳墓に坐禪して夜を徹したるに幽靈は全く出なくなつてしまうたといふ話しがある。思ふに幽靈は當該夫婦が精神より生じたる幻覺にして禪師の法力は彼等に充分の安心を與へたるによりて彼等は精神の平靜を恢復したのであります。嗚呼、世に恐るべきものは鬼神にあらず、惡魔にあらず、一心の迷ひであります。

復次に犯罪人に就て觀察するにロンブロゾーの如きは先天的犯罪人には頭

蓋、顏面、五官器等に異常あり隨ひ而して感覺、精神機能にも必ず異常があるといふて居ります。先天的犯罪人の特徴として前頭小、眼窩大、顏骨突出、下顎突出、鼻孔の翼狀、狐的顎骨の附加等を擧げてありますがこれは遽かに信ずることはできませぬ。併し犯罪人は身體にも精神にも異常のあることは何人も疑はざる所である。例せば多くの犯罪人は痛覺遲鈍にして通常人の忍ぶ能はざる部分に文身を施すが如き、虛榮心に富みて罪過の重大を誇るが如き、道義、慈悲の情操は一部若しくは全部缺損せるが如き遠謀深慮なきが如き、皆犯罪人が一種の狂愚なるを示すのであります。

以上の觀察によりて明かなる如く身心の二は元來同一の存在でありまして之を時間的に內觀すれば精神といひ、空間的に外觀すれば身體といふのみである。故に古人の譬喩の如く同一の圈を內より見れば凹形にして外より見れば凸形なるが如くであります。凹形も凸形も圈を離れてあるのではない、それと等しく精神なき身體はなく、身體なき精神はないのであります。故に經に

色若離心々數法、如草木瓦石、若心々數法、離色則無依止處、

とありまして色とは物質的の存在を指し、心々數法とは精神を指したので物質に精神がなければ草木瓦石の如くになり、精神が物質に依らざれば依止する處がない、要するに物質も精神も同一物の兩面であるといふのであります。

身心不二の一元論を信ぜざる人士は吾人の身體の外に精神ありと妄想し、精神の依處として靈魂と稱するものを假立して妖怪談を以て前後を糊塗し、神秘主義を唱へ、迷妄に迷妄を累ねて愚俗の凡情に迎合せんとする。これ寧ろ憐むべきであります。身心不二の理に達せざる時は二種の病弊を生ずる。即ち第一には唯物の病弊、第二には唯心の病弊であります。唯物主義の病弊は宇宙には物質のみで精神はなしと獨斷し、人間を以て快樂のみを追求する動物と誤認し、專ら自利主義を主張して世道人心に害を及ぼすに至る、這は膚淺なる哲學者及び輕佻なる文學者に見る所の惡弊であります。次に、唯心主義の病弊は宇宙には精神のみありと速斷して物質の客觀的存在を

否定し、客觀的眞理の存在を疑ひ其極遂に暗黑なる懷疑に陷るを常とする。是の如きは決して温健中正の思想ではない。昔しプラトーンは靈と肉とを峻別して肉體を以て精神の墳墓と稱し、其師ソクラテスが毒を仰いで歿したるを評してソクラテスの靈が肉體の牢獄を脱したるものなりとしたるが如きは太甚しき僻見である。基督教に於ても靈と肉とを別に見る陋見を脱することのできぬのは氣の毒千萬の至りであります。

近來宗教に熱心なる人士が頻りに見神の實驗とか、見光明の經驗とか申して非常に有難さうに隨喜渴仰して居りますが、彼等の所謂佛の光明、神の默示などいふものは彼等自身の精神の影像に外ならぬのである。前にも申した通り吾人の精神が少しく病的となりて感情の激昂したる場合には多くの精神病患者に見る如く神の聲を明瞭に聞くこともあり、不思議のものを眼前に見ることもある。されど斯は病的幻覺なるを知らねばならぬ。見よ、見神の實驗家、見光明の信者は皆病中の人物なるを。抑も實驗なる語は如何なる意義を有するか、學術上實驗と稱するには同一の經驗を幾度も繰回

して自ら其誤謬なきを證し、且つ他人をして幾度も同一經驗を反覆せしむるも等しく同一結果に達するものでなくてはならぬ。然るに見神の實驗家又は見光明の信者が實驗したりと唱ふる所は彼等が神經過敏の狀態にある時偶々瞥見したる幻影にして彼等自身さへ同一の經驗を繰回すことはできぬのである。況や他人をして之れを經驗せしむるをや。是の如きは決して實驗として誇るべきことではない、寧ろ病的現象として自ら愧づべきである。吾人が平生の經驗には健康體にありてすら誤りに陷ることが多い、例せば吾人は砂漠にありては往々倒影と稱して人獸草木の倒まに映ずるを見、水中に直立せる竿を見ては其の屈曲せるを見、パノラマの繪を見ては實物と混淆する。されば パノラマの觀客は二間内外の距離にある繪畫を見るに望遠鏡を用ふる者さへあるに至る、以て吾人が經驗には過誤あるを證すべし、況や身體健康を失ひて覺官が其機能を全うする能はざる病中の實驗の如きは取るに足らずと評して不可なし。また百歩を讓りて彼等の實驗に誤りなしとするも病者の心狀を以て健康人の心狀を律することはできぬので

ある。

臨濟派の大德たる大惠和尚が一日某の家を訪ひたるに壁間に白骨を描きて

屍在這裡、其人何在、乃知一靈、不居皮袋

と題したるを見て、大惠のいふ、這個は是外道の見なりと、乃ち改めて

即此形骸、便是其人、一靈皮袋、皮袋一靈

と記された。却説、屍在這裡、其人何在とは屍は白骨となりて此所にあるが其人間は何處に居るかとの問ひで、乃知一靈、不居皮袋とは靈魂は皮袋なる身體中にあるものではない、人が死すれば靈魂は皮袋を出去つて死屍白骨のみ殘るといふたのであります。大惠和尚は其身心不二の法門に契はざるを見て之を外道の邪見なりと破して改めて即此形骸、便是其人、一靈皮袋、皮袋一靈と記して形骸が即ち其人で靈魂と身體とは二にして不二なる旨を示されたのであります。

是を以て禪門に於ては其身を正しくし以て其心を正うし、其身を安くして以て其心を安くし其身を靜かにして以て其心を靜かにし、其身を平かにし

て以て其心を平かにする爲めに正身端坐の坐禪を行ふのであります。其身行が麤動にして其心操のみ靜安なることは得て望むべからず、また其心情が動搖しつゝ其身行のみ靜謐なることは到底不可能であります。故に吾人が氣を輕くし心を空くし、情を平かにし意を安からしめんとすれば必ず其身を安靜にして其體を平安ならしめねばならぬ。精神の脩養には必ず身體の脩養を努めねばならぬのである。

かゝれば吾人が畜生の心を起せば吾人の身體にも畜生の慾を生し、餓鬼の心を起せば吾人の身體も餓鬼の苦みを受け、また吾人の身體を不潔に保てば精神も不潔となり、身體を清淨に保てば精神も清淨となる。吾人が一度大慈悲の心を起せば此身此儘一切衆生の父母となり、佛陀の心を以て心とすれば此身此儘佛と成るのであります。されば修證義にも

衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る、位大覺に同うし己る、眞に是れ諸佛の子なり

とありまして吾人が佛戒を受て佛の敎を其身心に體得すれば直ちに諸佛と

同じ位に入ると示されたのであります。ラスキンの語に

眞の敎育の目的は單に人をして正當の行を爲さしむるのみにあらず、正義を樂ましむるにあり。人をして單に謹勉ならしむるのみにあらず、謹勉を愛せしむるにあり。人をして單に博學ならしむるのみにあらず、知識を愛せしむるにあり。人をして單に潔白ならしむるのみにあらず、潔白を愛せしむるにあり。人をして單に正直ならしむるのみにあらず、正直を渴望し欽仰せしむるにあり

と申してありますが、是亦正義を行ふ身行と正義を愛する心操と一致せしむるに外ならぬのである。

『賴山陽が京都三本木の水西莊にて筆を驅りて何やら著述に餘念なき折から、書生の何某出來りて先生と呼ぶ、何か用かと振向けば日野大納言資愛殿よりお使で御座ります、明日都下の儒者文人等を集めて、聊か酒宴を催したければ先生にも御出席を願ふとのこと、難掌何某參りて申しまするとの聞て山陽ジロリと見やり、思召は有難う存じ奉れど參殿致し兼ると言へ、米搗

蟲見るやうに、御辭儀上手の奴原が定めて多く往くことであらう、私にはそんなことはできぬ、と獨言いふて再び顧みず素より狹き家の事、山陽が大きな聲にて斷りいふを洩れ聞きて雜掌の何某打腹立て歸りしが、日野大納言は公卿に似合ぬ奇人なり、偖は山陽左樣のことを言ひしか、面白い男、どうでも呼んで會ひたいものだ、と手を換へ品を換へ色々に言ふて招けど、山陽强情に斷りてなか〳〵往うとはせず』

『日野大納言が根氣よく招き呼ぶこと四度目に及び、さすがの山陽も大いに呆れ、偖も日野殿は氣の長い人かな、所詮往かずは濟むまじ、されどわしが往く限りは少し注文がある、お使の方を此方らへお通し申せ、わしが直き〴〵注文の箇條を申上げやうといへば、書生はやがて雜掌を案內し來ぬ、山陽輕く會釋して、先日より度々のお使御苦勞の至り、私のやうなものを其處まで御懇望に預る段有難う存じますれば、いかにも參殿仕りませう、併し參殿仕るに就ては一通りわたしの望が御座る、偖其望みと申すは、何分私は田舍者、上下着けて扇子をパチつかし、始終へイ〳〵ハイ〳〵で

立切り、自由な足を持ちながら歩行くこともできず、膝行とかいふて膝を疊に摺りつけ、スルリと向へすべり寄るときに、向ふ脛を剝いて痛いことがありても、へ、、と追從笑ひをして、顏をしかめることなどは決してできず。行儀よく坐りて足に痺れがきれるも敢て我慢し、欠伸も耐へ、咳も耐へ、問さへあればお辭儀ばかりして居るやうなことはなか〳〵できませねば、此儘の衣服で參殿し、そして今一つの望みと申すは、お下物の魚は江州の湖水で取れた新鮮なものでなければいやで御座ります、御酒は伊丹の劍菱、ホロリと苦味がありて喉を抉るやうなのでなければ飲みませぬ、これだけのことを御許し下されば參殿致さう、といへば雜掌大いに驚き呆れ、早々立歸りて事細かに大納言に復命すれば、大納言ニヨ〳〵笑ひながら、いかにも其望み通り爲すべしといはれた』

『斯くて愈、日野大納言の邸宅に夜宴の催さるゝ當日となりければ公卿方、儒者文人多く集り、各、行儀正しく坐しける、時に山陽は黑木綿の布子に五つ紋の黑木綿の羽織着て、長脇差を横へ、頭髮蓬々として月代伸び、年の頃

十六七の書生に、二升入の大瓢箪を昇かせ、悠々として門内へ這入らうとするを門番咎めて誰だといへば、誰でもなし日野殿が度々のお招きにより參つた者だ、と落つき拂つた言葉、山陽の姿の餘り異樣なるに門番なかなか承知せず、名前を聞ぬうちは此處通し難しと爭ふ、雜掌之を見て驚き此由を大納言に言上すれば、大納言自ら玄關まで出迎へ、よくこそと座に請すれば山陽は行儀正しく居並し儒者文人の眞中へ遠慮もなく無手と坐し、早や書生に昇かせし瓢箪より酒注ぎ出さんとする樣子に、大納言急に酒の用意をなさしめ誂へ通りの酒肴を出して饗應しける』

『言葉少き山陽も追々酒の廻るに隨ふて手を揮り目を昂け、和漢古今の談論大納言の質問に應じて、さながら響の物に應ずる如く大河の急流を走る如く滔々として淀みなく、嘸て縑紙出て、詩に文に或は畫に各其技藝を競べば、山陽筆をとりて無造作に書き下す詩は百言に餘る長篇、草稿もなく、深く考ふる容子もなく、活潑なる筆鋒もて、さらり〳〵と當夜の樣を述るに僅か絶句一首に痛くなる程首ひねる生文人は恰も明月の夜に螢の光なき

が如くなるぞあはれなる』

『あくる日三本木なる賴山陽の家へ例の雜掌入り來り昨日の御禮とて鷹紙に包みし金一封、取次の書生山陽の前へ持出せば公家方の風とて金千疋、賴久太郎殿へ、日野家と書し、其書きぶりは日野家の三字を太く大きく、右の方へ高く離し、賴久太郎殿への六字は左の方へ細く小さくしかも低く記したり、山陽之を見て大に怒り、無禮な仕樣と向ふへ投げ出し其儘突き返しける、日野大納言之を聞て大に赤面し、早々包みを改め宛名は高く大きく賴先生と記し、わが名は低く小さく日野資愛再拜と認め、無禮の罪を謝して再び金封を差出さしむれば山陽ニコ〳〵笑ふて日野公は公家に似合ぬ面白い人だ、話し相手になると獨言のやうに申しける』

『山陽の豪放磊落にして貴人高位にも膝を屈せざる是の如しと雖も父母に對しては極めて孝順にして其父春水の死せる時莊子を講じ居たれば其後身を終るまで莊子を讀まず、莊子を讀めば其情に耐へずと申しける』

『山陽母を慰めて孝養を盡さんものと終に母を奉じて京都の寓居に歸り、京

都の嵐山の花を觀て、大和の奈良より終に芳野の山深く、四十有餘の山陽が平生の嚴格なる樣には引替へ、さながら小兒の如く、母の供していと嬉しげなる容子、一目千本の櫻今を盛りと咲き亂れて、雪の如き樹の下に、携へし莚毛氈など布きならべ、母を程よき所に坐せしめ、おのれ其側に侍りて、割籠瓢の酒宴、花片の山風に閃めきて、ちら〳〵と盃に散り入る景色の、美しくもまた優しきに、母はホタ〳〵と喜び笑ひ、わらは少き頃より花を愛して、一度は芳野の櫻を見たしと願ひ居たりしに、今は望も遂げぬ久太郎そなたの志いと嬉しといへば、山陽が生涯現はれざりし喜びの色、此時ばかりは顏に溢るゝばかりにて、おッ母樣の其お言葉、たとへば私が太政太臣になつたよりも嬉しう御座りますといひしとか』(三宅青軒著賴山陽)

げに山陽の如きを其身正しく其心正しき人物と申すでありませう、

『明治五六年の頃、排佛毀釋の說大いに起り、外敎も亦漸く廣がりて白及を以て僧侶に迫るものあり。此時獨圓和尙、麻布の天眞寺にあり。一日門を出んとする時、忽ち五六人の壯士門口を擁していはく、我等獨圓和尙に面

會せんとす須く之を傳へよ。獨圓曰く獨圓とは老衲なり、果して何の用かあると。壯士等愕然として逡巡し、良久うして云ふ、和尙あるが故に、我輩の願を遂ぐること能はず、今日將に乞ふ所あらんと欲す。獨圓曰く何の大事ぞ。壯士云く我輩は耶蘇敎を奉ずるもの期する所は佛敎を撲滅するにあり、此を以て和尙の一命を乞はざるべからず。獨圓いはく事太だ容易なり、何ぞ直ちに斬らざる。壯士等大いに恐れ相顧みて手を下す能はずして去りぬ』(近世禪林言行錄)

是の如きを威武も屈する能はず、富貴も淫する能はざる心操といふでありませう。要は唯事に當りて惑はず疑はず懼かず怖れず、身心不二の法門に安住するのみであります

山居　絕海

山列屏風九疊開、泉鳴巖竇八音諧、茅茨敢疑漢金屋、軒砌聊誇堯土階、
瑞草似雲鋪滿地、琪花如雪照幽崖、空王住處堪依止、回首人間事々乖

第三章　宇宙と生物の歸一——依正不二論

前回の講義には身心不二即ち吾人の身體と精神とは一體であるといふ教理を略述致しましたが、今回は更に進んで依正不二といふ教理を説明致しませう。

依とは所依と熟字して一切の生物が依り住する所の世界をいひ、正とは正依と熟字して正しく依り住する所の生物其物を指すのであります。然れば依正とは世界と其中に住する生物といふことで、此世界なる宇宙と生物なる吾等一切の衆生と二つはないといふが依正不二の大旨であります。抑も吾人の住する宇宙は非常に宏大なるものでありまして天文學者の説によれば我地球より大陽までの最大距離は九千四百五十二萬四千哩と概算してあります。併しこれはまだ近い方で我大陽系中でも海王星の如き遠距離にある星は我地球よりの最大距離は二十九億一千三百六十四萬四千哩と概算して御座ります。併し此等は我大陽系中の惑星で、極めて近い距離であります。

之に反して恒星と稱する非常に大にして遠距離にある星は肉眼にても六千個計は見えると申しますが、此等恒星の最近のものでさへ海王星迄の距離の七千倍以上もあるとのことで、望遠鏡にて見えまする光りの弱い恒星は其光線が一秒時に三十萬零八千キロメートルを走りても三千五百年も費さねば地球迄到達せぬといふやうな遠い星であります。併し右の恒星よりも更に遠くにも無數の星はあるのであらうが吾人の視力が及ばないから唯無限に漠大なる宇宙と申すのであります。此悠遠宏大なる宇宙は大さに於て限りなくあるのみならず、時間に於ても無始無終に限りなく相續するのであります。佛教にては之を三千大千世界と申して居ります。

然れば宇宙は大きいに於て限りないのみかといふに小さいに於ても限りはないのである。何となれば無限大なる宇宙の中に無數の星が散在して居りますが、此等一々の星が皆一個の世界であり宇宙である。即ち我大陽系の如きは大なる宇宙の中の小宇宙で、大陽系なる宇宙の中に地球なる小宇宙があり、地球の中に亞細亞州なる小宇宙があり、亞細亞州の中に日本なる

小宇宙があり、日本の中に東京なる小宇宙があり、東京の中には日本橋區なる小宇宙があり、日本橋區の中に某の家なる小宇宙があり、某の家の中に何某なる小宇宙があり、何某なる小宇宙の中に更に寄生蟲なる小宇宙がある、されば吾人の腹中に寄生する小蟲の如きは數萬の卵を産みて吾人の腹中を大なる宇宙と思ふて生活しつゝある。コッホの報告によれば獨乙國ベルリンの下水には一立方センチメートルの小量の水に五千萬餘の黴菌が居ります。さすれば世界は大なるにも限りなく小なるにも限りなく、一切の物は皆一個の世界一個の宇宙といふて少しも差支はないのである。かく重重無盡に世界は重なり〳〵てあるから華嚴經にも

一切刹入一刹、以一法入一切法、以一衆生入一切衆生、以一切衆生入一衆生

といふて一切の世界が一の世界に入り、一法が一切法に入り、一切衆生が一衆生に入ると示してある。されば所依の世界といふも正依の生物といふも齊しく皆一個の宇宙であるから依正不二と申して宜しい。これは一應

の義であります。

次に前回の講義に身心不二と申して吾人の身心は同一物の兩方面であると申しましたが、身體と精神とは人類のみが有して居るのかといふに決して左樣ではない、下等動物にも身心の二つがあることは何人も疑はぬ所であります。然るに動物と植物とは全く差別する能はざるものといふが生物學者の定説でありますから動物に身心の二つがあるとすれば植物にも身心の二つがある筈である。また植物なる有機體と無機體なる空氣や水の如きものとも劃然差別する能はざるものといふが學者一般に承認する所であるから植物に身心の二つがあれば無機原素にも身心の二つがある筈である。若し無機原素に全々心がないとしたならば此等の原素より成立する有機物にも心のある筈はない、何となれば無より有を生ずることはできぬからであります。さすれば地球上の萬有は皆身心の二を具してしかも其心身は同一物の二方面である換言すれば一元であるといふことが知れます。是を以て地球それ自身も物質あり精神ある存在で、吾人の大陽も大陽系も乃至全宇

宙も物質あり精神ありて、當該物質と精神とは同一元である。故に依報なる宇宙も正報なる生物も齊しく生物にして一元に歸着し了るのである。これ依正不二の第二の意義であります。

以上は森羅萬象が皆一個有心の存在である、生物であるといふ推理のみであるから、これより少しく事實を陳べることに致さう。吾人の見る所に由れば人間と他の生物及び無生物と稱するものゝ差別は精神の有無によるに非ずして、精神的活動、即ち自發的活動の多少の程度によるのみである。換言せば人類及び高等動物は自發的活動が複雜で、所謂下等動物及無生物は自發的活動が簡單であるといふに過ぎぬのであります。されば猩々は能く家を作り臥床を設け衣服を好み能く笑ひ、類人猿は姦婬を罰し簡單なる言語及び歌謠を有し、象は放逐の刑を用ひ、馬は道を知り、人の智鈍を檢し數を知り、犬猫は能く良心の悔恨を表し、鼠は能く算し、鸚鵡は言語し、蜜蜂には君臣の別を立て分業して勞働し、蟻は奴隸を有し社會の秩序を守り謹勉勞作を以て名なりトゲウヲなる魚は一夫一婦の制を守りトクソウ

なる魚は水を含みて射擊し、ウツボカヅラ。モウセンゴケ。蠅地獄等の植物は蟲を捕へて之を喰ひ、ウマゴヤシ。タンポは雨を豫知し、キヤリナ、アカウリスなる植物は嵐を豫知し、間歇熱の黴菌は赤血球を捕へて之を貪食し、白血球は有害なる黴菌を捕へて之を食し、磁石は鐵を吸引し、琥珀は塵埃を吸ひ、電氣は陰陽相感じ、水は低きに行かんと欲し、空氣は眞空を充たさんと努め、石は堅く自體を保持しつゝあるを見る。是に由て之を觀れば天下一物として自發的活動なきものはない、此自發的活動の複雜にして自ら其活動を覺知するに至つた者が意識である。されば覆載間の萬有は皆自發的活動を營みつゝある生物である。故に依正の二は二にして二にわらず同一なる生物であるといふのであります。

更に一歩を進めて人類と宇宙との關係を考察しまするに宇宙には不可思議の智惠がある、

年毎に咲くや芳野の山櫻
　木をわりて見よ花のありかを

といふ歌がありますが、如何に櫻の木をわりて見ても花のありかは知れぬ。然れども年々歳々、朝日に匂ふ山櫻花の爛熳たるは實に不思議といふより外はない。況や櫻の實の小なるを如何に分拆解剖しても之れより根抵を生じ幹莖を生じ枝葉を發し美花を開くべきものを認むることはできぬ。然れども如何なる櫻の實でも錯らず過たず必ず根抵を生じ幹莖を生じ枝葉を生じ美花の開くの順序を正確に行ふて居る。なんと不可思議の靈智と稱すべきではありませぬか。また千八百二十七年にベーアといふ人が顯微鏡にて觀察の結果人間の卵を發見し、其の大きさは直徑〇、二ミリメイトル計であるといふて居ります。此顯微鏡で見るやうな卵細胞より人間の身體は發生するのでありますが、此卵細胞を如何に分拆解剖しても吾人の頭腦神經內臟諸器骨肉手足等は少しもない、然れども當該卵細胞が受精する時は忽ち分裂を始めて細胞の數を增加し、次第に積集して胚葉を生じ、それより分業して頭腦となり神經となり內臟諸器となり骨肉となり手足となる。而して此等の順序方法を悉く卵細胞の小なる水泡の如きものが記憶して居る

のを見れば實に不可思議といふべく、自然界の靈智に驚かざるを得ないのであります。而して吾人人類は宇宙自然の靈智を受けて生れ、宇宙自然の靈智に教へられて知識を開發しつゝあるのである。例せば吾人が眼球の構造を研究すれば寫眞器械、幻燈器械などは其製法を直ちに知ることができ、湯氣が鐵瓶の蓋を擧ぐる理法を研究すれば蒸氣滊鑵も製造せられ、木片が水上に浮ぶ理法を研究すれば大小の船舶も軍艦も蒸滊船も製作せらるゝのであります。されば マルコニイが無線電信の器械を製作したるも、古へガリレオが天文學上の發見なしたるも、近頃ベル氏が電話器を製出したるも皆宇宙自然の靈智に教へられたのであります。

また宇宙には自然に調和の德が備つてある、即ち大は大陽系の宏遠なるより小は一草一木の微に至るまで調和を失ふては成立することはできぬ。故に地球上にありても動植相援けて生存し、動物相互の間にも知らず識らず相助け相依りて生活しつゝあるを見る。殊に人間にありては個人は孤立獨存することなく互に有機的に相關聯して生活すること恰も手足の頭目に於

けるが如く、胃腸の骨肉に於けるが如くであります。是の如き宇宙自然の調和の德を受けて人間は生れまた宇宙自然の調和を感得して道德を行ふのであります。孔子が己れの欲せざる所人に施す勿れと敎へたるも、釋尊が一切衆生猶如赤子と說かれたるも齊しく調和親睦の德を發揮したのであります。故に進化論者の一派の人士が云ふ如く人間は本來利己主義の動物で生存競爭の結果、利己の爲めに利他の道德を行ふやうになつたといふは誤解であります。人間が本來純粹なる利己的動物で毫も利他心道德心はないとしたならば如何に生存競爭をしたとても絕無なる道德心が湧き出る筈はない、人間の本性に道德心があればこそ道德行爲を發したるなれ。さすれば吾人人間の智性は宇宙自然の靈智と感應し、吾人人間の道德は宇宙自然の道德と感應するのでありまして、天地と吾等と合一して天道即人道といふことになるこれを依正不二と申すのであります。永嘉大師の語にも

諸佛法身入我性、我性還與如來合

とありまして諸佛の法身とは天地の本性を申すので、宇宙自然の本性が我

性に入り、我性が還た如來即ち宇宙自然の本性と合一するといはれたのであります。

果して然れば宇宙は一大神靈とも稱すべく常に吾人に對して幽玄の大道を默示して居るのであります。澤水和尙の歌に

何事もいふべきことはなかりけり
問はで答ふる松風の音

とあり、古歌にも

峯の色溪のひゞきもみなながら
わが釋迦牟尼の聲とすがたと

と詠じたのである。こゝに至りては天地は一大神靈、否、一大如來となりて吾人は常に其懷ろに起居するのである。シエクスピヤの語にも

細流の中に書籍を見出し、岩石の中に敎訓を見出し、其他の活物の中に善を見出す

とあるも同一の消息を傳へたものでありませう。西洋の諺に

萬物は皆宇宙を寫す鏡なり

とあるが、寔に名言であります。天地間の物は皆悉く宇宙全體を縮寫して其内に藏めて居る、花にも、鳥にも、雪にも、月にも、山にも川にも皆悉く天地幽玄の眞趣は含まれてある。是を以て靈雲は桃花の開くを見て天地幽遠の旨に悟入し、釋尊は曉天の明星を見て天地幽玄の旨に悟入し、玄樓は朝日の昇るを見て天地幽遠の旨に悟入しました。ゲーテの語に

花は自然の繪文字なり

とある如く、桃紅李白、艶櫻素梅皆宇宙が其深奥幽邃なる旨を語る所の文字ならざるはない。法隷和尚も

森羅萬象自己家風

といはれて依正不二天人合一の妙境を示されました。修證義に

十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆佛事を作す

と說かれてあるも同一の敎であります。

上述の如く宇宙其物を直ちに佛と信じ神靈と信ずる宗敎を汎神的の宗敎といひ、之に反して宇宙の表に超然たる惟一の神があつて天地萬有を支配すると信ずる宗敎を超絶神的と申すのであります。

蓋し汎神敎は最高の宗敎であまりして超絶神敎は其下に位する宗敎である。前者は理性の發達したる學者的の宗敎にして後者は感情的なる無學者に適したる宗敎である。佛敎中の華嚴宗、天台宗、禪宗、眞言宗などは汎神主義の宗敎でありまして基督敎マホメット敎などは超絶神敎即ち惟一神敎であります。

惟一神敎は天地萬有を以て一神の造る所とし全智全能の神が之を統御すると信じますから、其論理を充分に主張すれば吾人が一切の行動は皆神意に出づるものとなり、吾人は善惡の行爲に對して責任なきものとなる。何となれば吾人にして神に背き神意に服せざることを得ると假定せば神は全能でないと謂はねばならぬ。若し神が全能であるとしたならば吾人が一切善惡の行爲は神の爲さしむる所となる。換言せば宿命論の窠窟に陷らねばならぬ。第二に惟一神敎にては兎角肉と靈とを峻別して吾人が死後に靈とな

りて天國に入ると信じて居る、これは近代の科學思想と衝突して、天國も消え、靈魂も消え失せて奇妙なるものとなつて居ります。第三に惟一神教にては人間を以て神に肖たるものとし人間を中心として他の萬物を以て人間生存の道具となし、人間の生活に必要なる準備として神が創造したやうに信じて居る。これ亦大なる迷想であります。之に反して佛教にては天地同根萬物一體と信じて居ります。王陽明も

大人者以天地萬物爲一體者也。其見天下猶一家……豈惟大人、雖小人之心亦莫不然、彼顧自小之耳。是故見孺子之入井而必有怵惕惻隱之心焉。是其仁之與孺子而爲一體也、孺子猶同類者也。見聞鳥獸之哀鳴觳觫而必有不忍之心焉。是其仁之與鳥獸而爲一體也。鳥獸猶有知覺者也、見草木之摧折而必有憫恤之心焉、是其仁之與草木而爲一體也。草木猶有生意者也、見瓦石之毀壞而必有顧惜之心焉、是其仁之與瓦石而爲一體也。是其一體之仁也。雖小人之心亦必有之、是乃根於天命之性而自然靈昭不昧者也。

と申して仁の上より萬有平等の理を說いて居ります。王陽明の所謂仁は佛敎に所謂慈悲で、大慈悲を具へたる佛眼より見れば一切生物は皆同胞である、是に於て乎、其恩が禽獸にまで及ぶのである。昔し阿育大王は人間幷に禽獸の爲めに路傍に井を穿ち樹木を植ゑ病院を建てよと勅命し、天桂和尙は小蟲を憐みて熱湯を地に捨つるを許さず、聖德太子は遊獵に代ふるに藥獵を以てせられた。これ皆佛の大悲を以て其心とするに外ならぬ。進化論の大學者ダアウインは『青年時代には盛に遊獵に耽たことがあるが、或時自分が散彈をもつて打つた一羽の鳥の翼を傷けられて樹林の中に落ちたことを知らずに過ぎて、その翌日まだ生きて居て飛ぶに飛はれず死ぬるに死ねず苦しんで居たのを發見して斷然其時から娛樂の爲めに銃獵することを廢したとのことである。』嗚呼、心あるものは皆斯の如くであるから世の遊獵などを得意とする紳士等も一片仁心があるなれば改悛してもらいたいものである。

白隱禪師が駿河國原宿の松蔭寺に居られた時、原宿の商人某は深く禪師に

歸依して生佛の如くに禪師を尊敬して種々供養をなし、禪師もをり〳〵其家に出入して居られたるに、某の娘が適々下男と不義して一子を產み落しました。そこで商人は元來正直一途の人であるから嚴しく其娘を譴責して不義の對手は誰なるかと詰問しました。時に娘の思ふには若し下男と不義したと言はゞ家名にも傷がつき可愛の我子も手下に置いて育つることもできまい。一層詐りて白隱和尙の子じやといふたなら、和尙は日頃父上の尊敬する人ゆゑ、父の怒りも解け家名にも傷がつかず、可愛の我子も育つることができやうと淺墓にも思案して、白隱和尙の子じやと申しました。すると商人は愈々怒りまして娘の手より其子を奪ひとり一目散に松蔭寺へ走り行きヅカ〳〵方丈へ踏込まして責僧、腥妨主、乞食坊主など、惡口を申して小兒を白隱禪師の前へ投げつけて還りました。此時禪師は少しも爭ふけしきもなく、「此子の父親が知れぬからわしの所へつれて來たであらう」と、やをら赤子を抱き上げれば憐れや母親の乳房を離れたる緑兒は紅葉のやうなる手にて白隱が胸のあたりをかきなでゝ泣き叫べば禪師は憐愍の涙

せきあへず飴を口に入れてねぶらすれば赤子は白隱が懷ろにありてスヤ〳〵ヤと眠る樣子に

あはれさよ夜半に捨子のなきやむは
母に添乳の夢や見つらん

といふ歌も思ひ出られていとゞ憐れを催され、それより毎日我子の如く慈みて大小便の掃除は勿論夜中にても泣き止まねば隣近所へ貰乳に出て赤子を育てゝ居りました。されば心なき人々は白隱が不義いたづらしてあの有樣は何事ぞと指し笑ふものもありましたれど白隱は一向心にもかけず。唯赤子を憐み育つるのみである。之に反して赤子を生み落したる母親は可愛の我子を奪ひとられ、男世帶の松蔭寺へ置いて來られたと聞いては流石に心配に耐へられず。我子は乳を離れて今頃は泣いては居らぬか、今日の寒さに冷へては居らぬか、白隱禪師は我子を如何にして御座らうぞと思はぬ日とてはありませぬ。ちやうど其冬のこと一日大雪が降りまして寒風は膚を刺すばかりの時、母親は今日も我子の身の上を案じて潸かに落涙しつゝ卍

字巴と降る雪を眺めて居りまするとと、遙かに前方よりホー〳〵といふて托鉢をして來る一人の出家がある、よく〳〵見れば痛ましや白隱禪師は赤子を懷ろに入れて此雪中を托鉢して來られました。そこで母親は此有樣を見て身もよもあられず、アー私しが惡るかつたと叫んで禪師の足下へ頓ぶが如く拜伏して其罪を謝し、父親にも實を告げましたるに商人も大いに驚き只管に詫入ました。時に禪師は「赤子の父親が知れたならそれにてよい」とて喜んで赤子を還され少しも咎めなかつたといふ。

かく白隱禪師は高德の智識でありましたから時の人が

駿河には過ぎたるものが二つあり
一に富士山二には白隱

といふたと申ます。

洵に禪師の如きは天地の公道を踐みて誤らず、佛の大悲を以て心としたる人にして依正不二の敎理を實現したのであります。

第四章　天道と人道の歸一——生佛不二論

前回の講義に於て諸佛の法身とは宇宙萬象の本性であるといふことを烏渡申しましたが、讀者は未だ佛といひ法身といふことを充分に御了解できまいと思ふ、依て今回は標題を改めて生佛不二と名けて、禪宗に所謂佛なるものを說明して見やうと思ふ。

生とは衆生の略字で、衆多の生物をいひ、佛とは佛陀の略語で、覺者と翻譯しまして悟つた人といふ意義であります。却說、禪宗に所謂佛には二つありまして第一は歷史的の佛、第二は實在的の佛である。

歷史的の佛とは昔し中印度に釋迦と名づくる種族がありまして迦毘羅城といふに都して其王を淨飯王と申し、其妃を摩耶と名づけまして其皇子に悉達太子といふが生れた。此太子が釋尊と御なりなされたのである。釋尊の年代には餘り多くの異說がありまして極めて古いのと極めて新しいのと比較すると千年も相違して居るから殆んど五里霧中に彷徨するやうでありま

す。併し近來西洋の學者が阿育王の勅令や、南方佛教の所傳などより推算したる所は衆聖點記と題したる文書の記錄と大差はないやうである。此記錄は釋尊入滅の歳の七月十五日自恣と申す宗儀を畢りて一つの點を下し、翌年も翌々年も同樣に點を下して年の數を記したものであります。それが支那へ傳はりましたのが衆聖點記で、齊の永明七年己巳の歳に九百七十五點となつたとしてある。依て之より逆算して見ると釋尊入滅の歳は西暦紀元前四百八十五年即ち支那では周の敬王三十五年、日本では懿德天皇二十六年に當ります。而して釋尊は八十歳にして御入滅であるから、四百八十五年より八十年前に逆算すると西暦紀元前五百六十四年となりましてこれが釋尊誕生の歳である。此歳は日本にては綏靖天皇の十八年に當り、支那にては周の靈王の八年で孔子の生れたより十三年前に當ります。されば釋尊の誕生は今より大約二千四百六十九年前であると申しても大なる牧悟はないと思ふ。右の悉達太子が二十九歳にして出家し給ひ、それより六年の御修行があつて三十五歳にして自ら一宗教を開創なされたのが佛教であり

す。

而して釋尊の說かれたる教理といふは單純なもので、所謂四聖諦の理であります。詳言せば人生には四苦八苦といふやうな苦みがある、此苦みの原因は人の煩惱妄情である、故に人の煩惱妄情を滅ぼせば苦みを免れて解脫安心の地に到ることができる。人の煩惱妄情を滅ぼすものは正智正行に外ならぬと示されて八正道を實踐するを要とせられました。八正道も要約すれば三學といふて一つには戒、即ち正しき行爲。二には定、即ち精神の平靜。三には慧、即ち正しき智慧であります。然れば正智を開發し精神を平靜にし以て正義に適ふ行ひをすれば則ち吾人の煩惱妄情を滅ぼして解脫安心の地に至れるといふが四諦の要旨であります。是を以て佛教の大旨は

諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教

とありまして精神を清淨にし正智を開發し、善を行ひ惡を止むるを以て要とするのである。昔し白樂天といふ大文豪が道林禪師に佛法の大意を問ふた時、禪師は諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教と答へられた。す

ると白樂天は右樣のことは三歳の童子も之を知ると云ひたるに、禪師は三歳の童子も之を知ると雖も八十の老翁も之を行ふと難しといはれた。是に於て白樂天も大いに感じて禪師に隨ふて敎へを受けたといふ話しがあります。此四句の偈の中にて最も重要なるは第三の自淨其意の一句で、吾人が自ら其心意を淨くし正智を開發して一切の事に當りて迷はず疑はず驚かず怖れず之を行ふのが何より大事のことであります。

釋尊の說法中にて次に緊要なることは無我と申すことである。無我といふは常住不變にして唯一自在なるものなしとの意で、之を擴充すれば種々の問題を解くことができる。例せば無我とは無靈魂といふことである。何となれば釋尊以前の宗敎家は人間に靈魂と稱する一物が身體中に存在して死後には體外に脫出して輪生輪廻すると說いたのである。然るに釋尊は靈魂の存在を否定し吾人の身體は四大五蘊といふ原素の集合に過ぎぬと示されまして靈魂に代ふるに業力說を以てせられたのである。されば釋尊の無我說は即ち無靈魂說でありまして、禪門に謂ふ所の身心不二論の濫觴である。

無靈魂說とは個體の死後に幽靈のやうな一物が殘ることはないといふ說で極めて俗耳には入り難いけれども釋尊以來今日に至る迄多くの大德碩學の信じたる所で科學の發達と共に益々其眞理なることが立證せらるゝのであります。然るに迷信多き外國人などは愚にもつかぬ降神術などを信じ、我國にてもこれに類したる妄執を脫せざる人のあるは歎ずべきの至りであります。

次に無我論は無神論と同一意に見ることができる、即ち釋尊以前には大自在天神と名づくる神がありまして天地萬象を創造したと信ずる人が澤山あつた、然るを釋尊は之に反對して萬物は皆因緣所生といふて遠い間接の原因と近い直接の原因とより合ふて生起したものと說かれ、所謂因果律にて萬有は生起したのであるから無始無終の存在であると敎へられた。無始無終とは如何なる意義かといふに因果律の明かに示す如く、天下一物として無より有を生ずることはできぬ、無より有を生ずることはできぬとすれば神と雖も空無より萬物を作ることはできぬ、即ち始めはないのである。さ

た天地間の一切のものは有を滅して空に歸せしむることはできぬ、これが即ち物質不滅の理である。故に天下何物も空無に歸する終りはないのであります。されば佛教の所說は今日日進の學術と少しも矛盾することはない。之に反して基督教にては萬有は神の所造と說きますから大いに困難を釀すのである。近頃は基督教の說き方も大いに進步して、神が萬有を作つたのであるから天地自然の法則は神の意志であると論じて居ります。果して然れば因果律の如き大法則は神の意志であること勿論である。而して神は其意志即ち因果律によりて働くのであるから無より有を生ずることはできぬ、換言せば神は萬有を創造することはできぬ、やはり萬有は無始無終の存在であるといはねばならぬ。

復次に無我なる語は無私の義にも用ゐられてありまして、世人の多く用ゐる無我とは此意である。這は私心私慾を絕ちて平等の一理に心を安住するのである。昔し小野蘭山といふ本草學者は博識碩學の譽れ高く時の將軍德川家齊公に召出されをしたが其召狀が江戸より達せし時、叡山に登りて藥

を採らんとする折でありましたから其儘にし遂に打忘れてしまいました。蘭山は平生交遊なく六疊の一間に獨坐して學問し夜間にも別に夜具を設けず、何時に寢るか門人も知る者がなかつたと申します。蘭山の孫に蕙畝といふ人があつて其妻と共に三年間も左右に侍して居りましたるに、或る日蘭山は蕙畝の妻を見て彼の女子は何れの人なるやと問ふたといふ。是の如く蘭山は一切世事に心を用ゐず其孫の妻すら記憶せざる程でありましたが學問には熱心で非常に强記でありました。されば或日堀田攝津守の邸に招かれし時、一の花筒を示されたるに蘭山しばらく打案じてこれは梅の樹の材なるが定めて大宰府の梅なるべしと申しましたが果して其通りであつた。依て如何にして出處を知れりやと問ひたるに、されば予少年のをり大宰府に詣でし時に梅の枯れたるを伐りてありしが其木の切口、及び紋理此品と能く似たりと申しました。實に蘭山の如きは胸中一點の私心私慾なく一に學問を樂む人といふのでありませう。また圓通和尙は或人の爲めに書物の跋文を草書にて認めましたが、餘り心に任せて書きましたから讀下し難き

所があるとて其人が書物を携へ來りて和尚に尋ねると、圓通はやがてうち返しうち返し見て、拙僧にも讀めぬ、拙僧の書は門人何某が能く讀む故、それに問へと申しましたいふ。如何にも無我な和尚であります。

また無我とは吾人の小なる假我を以て大なる絶對の眞我中に沒入するの意ともなります。釋尊の無我を說かれたのは畢竟眞我の何物たるを示し、假我と眞我の冥合を敎へられたのである。されば大論にも

於無我中示眞我

と龍樹菩薩がいはれたのであります。

以上は歷史的の佛即ち釋尊の敎へであります。釋尊は歷史的人物で、父母もあり、妻子もあり、親戚もあり、門弟もありまして通常の人間であります。されば釋尊は吾人の先覺といふべく古への偉人と稱すべきもので、其人間たる點に於ては毫も吾人と異る所はない。換言すれば釋尊は超人ではない吾人と同じく人類中の一個體である、吾人と別に異つた所はないといふが生佛不二の一應の意義であります。

第二に實在的の佛といふは前回の講義に開陳したる宇宙の神靈、即ち絶對其物であります。金剛經に

若以色見我以音聲求我此人行邪道不能見如來

とありまして眞に絶對の如來は大小の形や音聲のあるものではないと示されたのである。華嚴經に

如來不出世亦無有涅槃

と記してある通り絶對の佛は出生したり入滅したりするものでない。常恒一如である。また同經に

佛身充滿於法界

とあるから、實在的の佛は無限なる宇宙に遍在しつゝある。月坡和尚の歌に

染めねども己がいろ〳〵おのづから
松はみどりに雪は白妙

とある如く、松の綠りも雪の白妙も、芭蕉の雨も楊柳の風も皆佛の妙身で

ある。是を以て佛眼は照さゞる所なしといひ、緣に應じ感に赴いて徧ねからざるなしともいふのであります。また同し華嚴經に

如來眞身本無二、應物現形滿世間

と說かれて佛身は無限であるから二つ並ぶことはない即ち唯一である。同經に

佛身無去亦無來、

といひ、また

等眞法界無依處

と說かれまして佛の妙身は他の者に依りて存在するのでなく、自ら存在して居る第一原因とも稱すべきである。同經に

佛身無相離衆苦

と說いて佛身は淸淨であり、且つ

如來自在不可量

とあるから實在の佛は大自在のものである。約言せば實在的の佛は第一に

常恒、第二に遍在、第三に唯一、第四に自存、第五に淸淨、第六に自在であります。

然れば實在の佛は如何に其身を現しつゝあるかといふに、華嚴經に

佛於一切微塵中、示現無盡大神力

とありまして大は蒼穹に羅列せる天體の運行より小は微介幺虫の發生に至るまで實在の大神力によらざるはないのである。譬へば獅子は大象を搏つにも全力を用ひ、小兎を搏つにも全力を用ふるが如く、宇宙の大靈は地球面積の百四十萬倍も大なる面積を有する大陽を作るにも空中に飛揚する極めて小なる微塵を作るにも同一の力を用ふるのである。天下のもの一として宇宙全體の大神力にて構成せられざるものは一つもない。是を以て一草一木も空しく施されたるはなく皆悉く實在の妙用を現はさゞるはない。されば〻アガレット、フラアの語に

星辰遠きに過ぎんか、脚下の小石を拾ふて之より一切を學べ

といふてある。星辰の天に輝く所を見ば宇宙の威靈が自然に感せらるゝに

は相違ないが、若し星辰が遠きに過ぐるならば脚下より小石を拾ふて見よ此中にも宇宙の大なる威靈は現はれて居る。永嘉大師は

明月照松風吹永夜清宵何所爲

といはれて事々物々に無限の力の現はれたるを歌はれました。斯く考察する時は吾人は一切の物に對して敬虔の情を起さゞらんとするも得べからざるに至る。乃ち

何事のおはしますかはしらねども、
かたじけなさに涙こぼるゝ

といふ感情が油然と湧き出てくるのであります。

却説、此實在的の佛と釋尊との關係は如何といふに前回の講義に詳述した る如く實在には不可思議の靈智があり、また廣大なる道德がをる。而して一切の衆生は此實在の智德を受けて生れてあるが中にも釋尊の如きは最も善く智德を圓滿完了せられた人である。そこで實在の智德は極めて能く釋尊によりて實現せられてあるから釋尊は實在の權化であります。然るに吾

人一切の衆生も亦同じく實在の權化にして釋尊の敎によりて修行すれば早晩必ず智德を圓滿して釋尊の如き人格となり、實在に冥合するの安心を得るのである。こゝを生佛不二と申すのである。然れば則ち宇宙天眞の目的は即ち吾人の目的、吾人の目的は則ち宇宙天眞の目的、宇宙天眞の心を以て吾人の心とし、吾人の心を以て宇宙天眞の心とするが故に佛と吾と兩鏡の相對したる如く相照應する。

菩薩清凉の月は畢竟空に遊ぶ、衆生心水淨ければ菩提の影中に現す

といふも此旨に外ならぬ。陸象山は古書を讀みて四方上下を宇といふ往古來今を宙といふに至り忽然大悟して曰く、

宇宙內事、乃己分內事、己分內事、乃宇宙內事。

又曰く、宇宙便是吾心、吾心即是宇宙、東海有聖人出焉、此心同也、此理同也、西海有聖人出焉、此心同也、此理同也、南海有聖人出焉、此心同也、此理同也、千百世之上、有聖人出焉、此心同也、此理同也、千百世之下、有聖人出焉、此心同也、此理同也。

これまた同樣の旨趣を述べたものでありませう。俳人芭蕉翁が

それ天地は風雅なり、萬象も亦風雅なり、此風雅は佛祖の肝膽なり、造化に隨て四時を友とす、見る所花にあらずといふことなく、思ふ所月にあらずといふことなし、心月にあらざれば禽獸にひとしく、形花にあらざれば夷狄に類す、夷狄を出て、禽獸を離れて造化に歸れよ

古池や蛙飛込む水の音

といへるも、風流の眞味は造化の源に歸りて其絶へざる澧泉を掬するにあるをいふたので、要するに天地と吾と一體となりて生佛不二の妙境に遊ぶを眞の風流とも眞の大悟ともいふのである。

斯の如く風流に全身を沒入したる芭蕉の終焉には頗る吾人の參考とすべきものがある、依て左に芭蕉の傳を抄出して讀者の一粲に供へやう

『元祿の七年九月廿八日芭蕉翁は園女の亭にて山海の珍味を饗應せらる。然るに廿九日の夜より腹部に疼痛を感し泄瀉數行なりければ胃苓湯を服したれど更に其効なくして日重る毎に病益々重ければ隨從の門人惟然、支考、

治郎兵衛等相議して國手を迎へんとせしに芭蕉は大津なる木節はよく我平生の身體を心得たれば之を招くべし、且つ去來に語るべきことあれば之にも消息を遣はすべしと命じければ兩人直ちに狀を具して木節及び去來を招きける』。

『それより十月二日に至り惟然より去來への狀に

老師御事昨夜より泄痢の氣味にて俄に一變夜中二十餘度の通氣、是は園女亭にての菌の過食ゆゑと相考られ候一夜の中に掌を返すが如く今朝より尙又通痢度數三十餘度我等始め之道手を握るまでに候

とあり。十月三日の夜に去來木節相續きて到着すれば芭蕉は直ちに病床に招き落涙して相見るを喜べば去來も暫し嗚咽して聲さへ立つるを得ざりき』

『同月八日住吉大明神に代參を立て十人の連衆俳句を奉納して師翁の病氣平癒を祈りぬ。此日木節は去來に向ひて病頗る大切なれば我力屈かず願くば他醫の對診を乞はんと云ひしかば去來は翁に此事を勸めたりしに芭蕉のいふ、木節の言道理なれども如何なる神方ありて虎口龍鱗を醫すとも天業如何

かせん、我は木節が診治に安んじて他に求むる心なしと』

『此日支考、乙州、去來等相議して鴻名の宗匠必ず辭世あれば、いかで一句を賜はれかしと申しゝに、芭蕉曰く、昨日の發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世、わが生涯云捨てし句に一句として辭世ならぬはなし、若し我辭世如何にと問ふ人あらば此年頃云捨て置きし句いづれなりとも辭世なりと申したまはれかし、說法從來常示寂滅相、是は釋尊の辭世にして一代の佛敎此二句より外はなし云云と』

『十月九日丈草と去來を床近く招きて昨夜は眠られざりしまゝふと一句を案じたりとて呑舟に筆とらせて吟ずらく

旅にやみて夢は枯野をかけ廻る

且つ曰く是は辭世にもあらず、辭世にあらざるにもあらず、病中の吟なり、然れども生死の大事を前に置きながら如何に生涯好みし風流とはいひながら是も妄執の一ともいふべけんと。去來曰く左にあらず、一日に朝雲暮雨の間もおかず、山水野鳥の聲も捨て給はず、心身風雅ならざるなく、斯る池

魚の患に勞れ給ひながら、終焉のかぎりに其風神の名章を唱へ給ふ事、諸門葉のよろこび他門の聞え、末代の龜鑑なりと落涙かぎりなければ一座皆聲を呑んで慟哭しける。此日より殊に衰へて前日は下痢六十度なりしが此日は度數知れざる程なりき』

『十月十一日其角來る、其角は伊勢參宮より和州紀州を遍歷し浪華に入りて初めて師翁の病を聞き倉皇馳せて直ちに病床に芭蕉と對面し相見て言葉なく落涙し座に侍するものも皆涙搔暮れぬ』

『翌十月十二日强て沐浴を命じて不淨の身を淨め次郎兵衞に抱へられて正座し、其角、去來丈草を正面に、其他の門人を左右に置き惟然、支考をして遺言を筆記せしめ、伊賀への書狀は自ら認め、江戸、美濃、尾張等の諸門人に傳言を托し、之より先き路通が不興を蒙りて乖離したるを、我歿後必ず棄る勿れと去來に賴み、殘る方なく言ひ終りて合掌し、靜かに觀音經を念じて眠るが如く逝きぬ。これ實に元祿七年甲戌十月十二日申の刻なり』

『其夜遺骸を白木の長櫃に納めて病床に侍せし十一人のもの供して十三日已

の刻に大津の乙州が家に着し、十四日義仲寺の直愚上人を導師として、其境域に葬る』

『時しも小春の半ばにて靜かに天氣晴れ渡り、月清朗として湖水の面に輝きわたり、名にし負ふ粟津のまつに吹起るは無常の嵐とか思はれて、月はおもしろきもの露はあはれなるものといへど、折に觸れし何かあはれなるものならざらんや、矢橋の漣の寄するひゞきも愁人の爲めには胸に迫り泪を添ふ』

『會葬するもの三百有餘人、直愚上人引導の句に

雪月魂魄、風花精神、等閑一句、驚動人天、嗚呼、奇哉芭蕉、妙哉芭蕉
萬里白雲、一輪明月、五十一年一字不說（内田魯庵遺稿桃青傳）

末後の一句一字不說と聞いては芭蕉も地下に瞑すべきである。芭蕉の終焉は眞に萬世の龜鑑と申して宜しい。芭蕉が「造花に歸れ」の一言千斤の重みがある、これ生佛不二の妙境であります、故に修證義にも

諸佛とは釋迦牟尼佛なり、釋迦牟尼佛是れ即心是佛なり、過去現在未來の

諸佛共に佛となる時は必ず釋迦牟尼佛となるなり、是れ即心是佛なり、即心是佛といふは誰といふぞと審細に參究すべし

とあります。されば

佛とは誰か結ひけん白糸の
賤の苧手卷くりかへしみよ

別源

題可休亭

孤松三尺竹三竿、招我時々來倚欄、細雨隨風斜入座、輕煙籠日薄遠山、
沙田千畝牛馬瘦、野水一溪鷗鷺閑、自笑可休休未得、浮雲出岫幾時還

雲を迎へ水を送りて安居かな　螺蛤

第五章　天國と人世の歸一——淨穢不二論

累ね〳〵御話申したる如く吾人の宇宙は一種靈妙なる存在で、學術的の眼を以て之を見れば一大眞理の顯現にして、審美的の眼を以て之を觀れば一大美術にして道德的の眼を以て之を見れば最上善の表彰であります。さすれば此世界を以て穢土とか娑婆とか申して非常に忌むべく厭ふべく捨つべきものの如く考ふるは大なる妄想であります。また淨土とか天國とか極樂とか申して吾人の宇宙の外に黃金世界があると思ふは太甚しき妄執である。何となれば吾人の宇宙は無限に宏大であるから、此外に出でやうとしても出ることは出來ぬ。

且つや人生を以て苦痛であるとする厭世觀は古へより大宗敎家、大哲學者といはるゝ人々の意見にも見えて居りますが、吾人は之に首肯することはできぬ。何となれば人間の如く微妙に組織せられたる身體を有する高等動物は瑣細なる瘡痍にも少なからざる苦痛を感じ、身體の一部の損傷も延い

て生命を失ふに至り、外圍の刺戟も極めて强く感じ、些々たる病毒も其猛威を逞うするのみにあらず、精神上にも多くの欲望あるが爲めに却て失望多く、慚愧、悔恨の情に嚙まれ、失戀、妄想の煩悶あるは勿論である。然れども之れやがて吾人が幸福であり人生が快樂なる所以の要件なるを如何にせん。試に問はん、身體を斬らるゝも割かるゝも少しも苦痛を感せず、寒暑風雪にも毫も煩はざること頑石の如くならば吾人は果して幸福であらうか。身體の一部を斫り捨てても更に差支なく走り去る蜥蜴の如きものになつたなら吾人は果して愉快であらうか。コレラ病の微菌を澤山に喰ふても何の故障もない豚や、モルモットの如きものとなつたなら吾人は果して幸福であらうか。また精神上に於ても犬や猫の如く食ふては寢ね、起きては食ひ何の欲望もなく大平樂に生活したなら吾人は果して幸福であらうか。名譽の何たるを知らず、慚愧の何たるも心得ず、山林の間に飛走する禽獸の如くなつたなら吾人は果して幸福であらうか。單に草木の如くに生殖して男女性の區別もなく、親子、夫婦の愛情もなく　失戀も悔恨もなかつたなら

吾人は果して幸福であらうか。吾人は此等の問に對して否と答へざるを得ない。されば失戀悔恨の情を發する吾人にして始めて親子夫婦の親愛も可能となるのではあるまいか。失望もし落膽もする吾人にして始めて大望をも全うし目的をも達することが可能となるではあるまいか。不名譽を感じ慚愧の心ある吾人にして始めて名譽も光榮も享受することが可能となるではあるまいか。些少なる傷害や、刺戟に遇ふても直ちに苦痛を感ずる程の鋭敏なる身體にして始めて錦繡綾羅の細滑をも感じ、熊掌牛舌の滋味をも感ずることが可能となるではあるまいか。一言に約すれば苦痛ある所以は幸福ある所以の要件である、されば人生を單に苦痛とし苦痛の分量は幸福の分量に比して多いと思ふが如きは一種の癖見であります。また世人は人間萬事意の如くならざるを歎じて、人生を悲觀しますが、これこそ言語道斷の愚見である。何となれば宇宙には一定の秩序あり法則ありて吾人の意の如くならざればこそ吾人は安んじて生を樂むことができる。若し之に反して吾人の意の如く一切の事物が變

化するとしたならば如何であらう。甲なる人は外出せんが爲めに晴天を希ひ、乙なる人は植物の爲めに雨を望み、丙なる小兒は紙鳶を飛さんが爲めに風を求め、丁なる老人は風流の爲めに雪を降らせんとし、Aなる人は降りたる雪が砂糖であれかしと望み、Bなる人は降りたる雪が綿であれかしと願ひ、Cなる人は紅ゐの雪を見たしといひ、Dなる人は黑い雪が見たいといふ。此等の人が皆思ふ如くに事物が變化したら如何であらう。また甲なる人は吾人を惡みて死ねかしと願ひ、乙なる人は吾人を咀ふて病めかしと希ひ、丙なる人は吾人を罵りて災ひあれと思ふ。而して彼等の思ふ儘になりたらんには吾人は如何にして安全なるを得べきか。かく吾人が氣隨氣儘にならざる所、これ人生に秩序あり法則ある所以である。人生が吾人の意の如くなりたらんには雜亂こゝに生じ混淆顚倒こゝに始まりて收拾すべからざるに至るであらう。さすれば人生不如意は實に吾人が幸福の源である。畢竟人生は吾人が精神一つによりて同一のことも苦痛ともなり快樂ともなるのであります。例せば昔し有名なる塙保己一といふ盲目の大學者は

八月十五夜の明月を觀んとて門弟朋友を招きて觀月の宴を催しました。そこで人々多く集りまして月に對して或は吟じ或は詠じて歡樂を極めたが、主人なる塙保己一は盲目であるから一向に明月も見えませぬ。依て一句を案じて

花ならばさぐりても見ん今日の月

と吟じて盲目の悲しさには今夜の明月を見ることができぬ、花ならばさぐりても見んものをと慨きましたるに、保己一の妻は此有樣を見て涙せきあへずと吟じたといふ話しがある。是の如く天上の月は一輪であるが見る人の心次第にて歡樂の媒ともなり涙の種ともなるのである。人生とても其の通りで觀る人の心次第にて淨土ともなり穢土ともなる。譬へば西人の語に、鳥の見かたと蟲の見かたといふがある。鳥の見かたとは鳥が空中を飛びながら高き所に身を置きて下界を瞰下すのであるから、山も川も、人家も田園も、畫に描けるやうに見えて實に美しいのである。輕氣球に乘つた人の話しに

輕氣球に乘りて空中に昇る時は定めて恐ろしからうと多くの人は思ふけれども決して左樣でない輕氣球は少しも動かないで、地球が自ら下へ下へとくだり行くやうに思ふ、而して高き空中より下界を見れば千里一眸に集りて謂ふべからざる美觀であるといふ。斯の如く吾身を高き位地に置いて觀れば一切のものが皆美しく見える、これが鳥の見かたである。次に蟲の見かたといふは蟲が地上を這ひ廻りながら下より上を仰ぎ見るのであるから、先づ眼につくものは下駄の裏、足の底、椽の下、人間の尻の穴、鼻の孔などで下から見れば汚穢なるもののみである。これが蟲の見かたであります が、同一の世界、同一の人生を見て鳥の見かたと蟲の見かたでは斯の如く相違がある。然る所以は鳥は吾身を高き位置に置きて人世を見るからである。吾人の人生觀もこれと同じことで、思想の深遠なる道德の高い人は其人格が超然群を拔いて高い位地にあるから人生を見ても美しい樂しい所と思ふ、之と反して蟲の如き根性を有したる下等の人物は己れの汚れたる精神より人世を見ますから汚らはしき惡むべき所と思ふのである。古歌に

手を拍く魚は出てくる鳥さはぐ

下女は茶をくむ猿澤の池

とある如く奈良の猿澤の池に行きまして茶屋に休み、手を拍つときは魚は獣を與へると思ふて出て來り、烏は逐はれると思ふて逃げ、下女は呼ばれたと思ふて茶を汲んで出す。手を拍つは一つであるが見るものゝ心一つにて種々に差別するのであります。

是を以て釋尊の如き高德の人より見れば人間は皆平等、否、生物は皆平等で一切衆生悉く佛の子であるが、淺見薄智の吾人より見れば萬物悉く差別がありまして平等の方面は少しも見えない。是に於て憎愛の念競ひ起りて心の平和を保つことができぬのであります。

また世人は往々人生の無常を歎じて生老病死を苦にする人がありますが、これも道理なき妄執である。前々回の講義にも申した如く生老死は生命ある人生の活動である。此活動がなければ人生は死物となりて幸福の淵源は全く杜絶してしまう。さなくとも生のみありて死なしと假定したならば如

何であらう。微菌は分裂して增加繁殖するのであるが、一時間に一度分裂して一つの微菌が二つとなり、次の時間には四つとなり次の時間には八つとなるといふ割合にして算計して見ると三晝夜七十二時間には一つの微菌が七十二兆といふ夥しき數となり、五晝夜百二十時間には五大洋をも埋めてしまう程のものとなるとの話しである。また大口魚の如きは一度に百萬以上の卵を生みますから此等の魚は皆生れるのみで死なぬとしたなら、大口魚だけでも一年か二年に全地球を埋めてしまう。また生れるのみで死なぬとしたならば、動物を殺さんとしても殺すこともできず。活きながら食ふても腹中に生活して居り、人間は非常なる苦みを受けやう。且つ如何に苦しくとも自殺もできず、未來永劫苦悶せねばならぬ。さすれば人生は生老死の活動がありて始めて幸福となるのである。見よ、山には金銀珠玉あり、海には珊瑚玳瑁あり、田畑には米麥あり、林には奇石珍材あり、以て吾人の用に充つべく、地には石炭あり、石油あり、ガスあり、電氣あり、自然は無盡藏の寶庫を開いて吾人の採るに一任しつゝある。然るを吾人は

迷執多く愚癡蒙昧なるが故に自ら苦しみ自ら煩ふて人生を厭ふに至るのである。是を以て吾人は速かに正智を開發し迷執の雲を掃ふて安心を得るが何より急務で御座ります。古語にも無繩自縛と申して誰も外より吾人を繩にて縛するものはないのに自ら蠶の如くに其身を縛して苦しむのである。

或人が一日轉宅をしやうとすると其母親が方角を相て宜しくないとて非常に心痛をされました、そこで方角除けの守札を菩提寺より貰ふて其札を轉宅した家の門口に貼りましたら母親も安心し何事もなかつた。依て後に方角除けの守札を開いて中を檢すると

迷故三界城、悟故十方空、本來無東西、何處有南北

と四句の偈が記してありましたといふ。心が迷へば人世は一個の牢獄であるが悟りて見れば十方濶達なる花園であります。維摩經にも

依佛智惠見佛土清淨

とありまして佛の智見より見れば一切の所が皆淨土となり天國となるのである。修證義に

生死の中に佛あれば生死なし

とはこゝを示されたものである。さるを此理に達せざる者は徒らに客觀的なる天國や淨土を夢想しつゝある。

例せば回教徒の如きは天國の地面は小麥の粉にて作られ、又はサフランにて作られたりと信じ、天國には酒の河あり、牛乳の河あり、蜂蜜の河ありて流れ、河岸は麝香にて成り、河床は寶石にて成るなどゝ信じ、トウバの樹なるものありて其蔭に涼む時は清冽掬すべく、天國に生れたるものにして菓子を得んと欲すればトウバの樹枝は自然と垂れ下りて其果實は二つに割れ中より菓子を出して人に與へ、若し衣服を得んと欲せばトウバの樹枝はまた自然と垂れ下りて其果實の中より絹衣を出して人に與へ、岩し乘馬を得んと欲すれば同じくトウバの樹枝は垂れ下りて其果實より乘馬金鞍を出して人に與へると傳へてある。加之天國には明眸皓齒の美人が居て一人の男に七十名より三千名の婦人が其妻となると申してあります。

以上は天國の話しであるが、地獄に就ても昔し希臘人は黃泉といふ所は地

面の下にあつて暗黑の國なりと信じプルートーと名くる神が之を支配し、黃泉の周圍には哀の川、火の川、號泣の河ありて之を廻り、哀みの河にはケーロンと名づくる鬼が渡船場の渡守であるから死人には其口に渡錢を含ませてやらぬ時は此河が渡れぬと妄信し、三頭蛇尾の犬があつて亡者の逃げ出ぬやうに番をするなど信じて居つたのであります。

さりながら地獄といひ天國といひ皆古人が現世の有樣より想像したもので一言にいはゞ想像の產物であります。されば天國も地獄も其材料は現世にあるので、天國の酒の川も、牛乳の河も、蜜の河も、乃至樹木といひ、絹布といひ、乘馬といひ、婦人といひ、皆現世に存在する材料である。地獄に就ても火といひ、號泣といひ、犬といひ、渡船といひ一として現世にないものはありませぬ。是に由て之を觀れば人世は天國と地獄との本家で、天國と地獄とは人世の分店の如きものである。故に淨土といふも地獄といふも客觀的に存在するのではなく、單に吾人が精神上の快樂と苦痛とを具體的に喩へたのみであります。是を以て佛經に極樂淨土を形容して

有寶樹、砗磲爲本、紫金爲莖、白銀爲枝、瑠璃爲條、水精爲葉、珊瑚爲花、碼碯爲實、此諸寶樹行々相値、莖々相望、枝々相準、葉々相向、華華相順、實々相當、榮色光耀、不可勝視、清風時發、出五音聲、微妙宮商、自然相和

といふが如き、また經に八寒八熱の地獄を說くが如き、皆精神の苦樂を具體的に說明して凡愚をして了解し易からしめたのである。

されば各國人の天國に關する思想を窺ふに熱帶の人民たる印度人アラビヤ人等は天國を以て清冷なる池や、樹蔭などに富める處となし、亞米利加の印度人は天國は遊獵に適したる處と思ふが如く各々勝手に自己に都合よき所を想像して天國といふて居る。グリインランド人は天國には臙脂腑なしと聞きて天國に生るゝことを拒絕したといふ話しがある。以て思ひ半ばに過ぎるでありませう。

支那唐朝の僧に元曉といふ人がありまして海に航して道を名山に訪ひ、四方行脚の時、一夜塚間に露宿して非常に渴しまして、水を覓むると幸ひに

水精のやうな善い水のあるを見出し、甘露を飲む心地で喜んで飲み畢つて眠に就きましたが、翌朝起き出て見れば何ぞ計らん、昨夜甘露の如く思ふて飲んだ水は髑髏の中に溜りたる汚水であつた。元曉は之を見て急に不快の思をなし將に吐んとしたが、沈思良々久うして大いに悟りて

心生則種々法生、心滅則髑髏不二

と申して心一つにて清淨ともなり不淨ともなる、心が生ずれば種々の物が生じ、心が滅すれば髑髏もかはつたことはないと安心したのであります。

圓覺經にも

心清淨故一身清淨、一身清淨故一世界清淨、乃至、盡虛空遍裏三世一切清淨不動

と示してある。古歌に

心こそ心まよはす心なれ
心に心、心許すな

とある通りであります。彌勒發問經に安養淨土に生るべき人は下の十念を

爲すべしと記してある。其十念とは「一には一切の衆生に於て慈心を生ず」とあります。此慈心と申すは父親が其子を慈む如くするをいふのである。例せばフレデリック大王が或日呼び鈴を鳴して侍童を呼びましたるに一向返事をしない、そこで侍童の室に入りて見るに童子はスヤ〳〵と睡りて居りました。且つ童子の懷中より白い紙が出かゝつてあるから大王は取り上げて見れば童子の母より彼れへ宛たる書翰で、童子が毎月少額の月俸を割いて母に送金するので、母より謝禮の手紙である大王は年はもゆかぬ童子が殊勝にも孝行を盡す志に感じて金貨一個を出して手紙の中に入れ、もとの如く童子の懷ろに入れて自身の室に還りて、今度は强く呼び鈴を鳴しましたから侍童は大いに驚き眼を擦りつゝ大王の前に伺候しました。其の時大王は侍童に向て汝は眠りしよな、汝の懷ろより出でゝあるは何物ぞといへば、童子は始めて心附きこれは母の手紙で御坐りますといひつゝ取り出すに、金貨一個中より落ちたり、大王は之を見て汗は何ぞと問へば童子は赤面致しまして、陛下小臣はか樣のも

のを盗みたる覺えは御坐りませぬ、這は小臣が睡れる間に何人か小臣を罪に陷れんとて潛かに入れたるのでも御坐りませうとて涙を落せば、大王は否とよ童子果報は寢て待て といふから其方が寢ねたるうちに其方の孝心に感じて天より金貨を下し給ふたのであるぞ、此後ともに母を大切に孝行を盡せと有難き御言を賜はりました。かくフレデリック大王の如く臣下を視ること慈父の其子に於けるが如くするを一切衆生に於て慈心を生ずといふのである

[二]には一切衆生に於て其行を毀らず といふは假令他人が惡い行をしやうとも之を誹毀して咎責せないのである。アナスと名づくるマホメットの僕は二十五年間マホメットに仕へたるが如何なる失行ありとも嚴責せられたることはなかつたといふ。また耶蘇は一日に七度罪を犯して七度悔い改めば之を許さんやとの問ひに答へて、七度を七十倍せよと言ひたるが如きは如何にも彼が寛大なるを見るべく、また釋尊は惡人を呼んで惡人といはず、唯狂人癡人といふて惡行は其人の過失に外ならざる旨を示された。是の如

くするを一切衆生に於て其行を毀らずと申すのであります。

[三]には一切衆生に於て悲心を生ず といふは母親が我子を愛するやうに一切の生物を愛するのである。支那の王孫賈といふ人の母は其子に向ふて

汝朝出而晚來則吾倚門而望、汝暮出而不還吾倚閭而望

といひ、紀貫之は其子の死したる時に其母に代りて

世の中に思ひあれども子をこふる
思ひにまさる思ひなきかな

と詠じ、千代女は其子が死したる後、蜻蛉をつりたるを思ひ出し

蜻蛉つり今日は何處迄行たやら

と歎きました。右の如く一切衆生に親愛の情を以て接するのが一切衆生に於て悲心を生ずといふのであります。

[四]には護法の心を發して身命を惜まず といふは敎法の爲めには命をも身をも献げる決心を申すのである。昔し弘安四年に大元二十萬の敵が筑紫の海を壓して來寇しました時、北條時宗は軍裝を整へ佛光國師祖元和尚の所へ

來りて最後の問答を爲さんとて、時宗先づ、「大事到來す」といはれました。

げにこれは國家危急存亡の秋、また時宗が一身の上にも生死の一大事が面前に到來したのである。時に和尚は、「如何が向前せん」と一拶せられたるに時宗は全身に力を入れて大喝一聲し、天地も碎けよとばかり喝破した。此時、時宗は身も思はず家も思はず命も思はず勇猛精進、單に邦家の爲めに斃れて後止むといふ決心一つである。そこで和尚も大いに其大決心を賞せられ「眞の獅子兒なり能く獅子吼す」といはれ、時宗の從者へも「慕直に進前して回顧する勿れ」と戒められた。斯の如き大決心があつたから元寇の大難をも平げて邦家の光榮を發揚したのであります。實に時宗の如きは護法護國の心を發して身命を惜まざる人であります。

「第五に忍辱の中に於て決定の心を生ず」とは何事にも堪忍を旨とするを申すのである。

『矢部駿河守定謙は水野若狹守と親く交りしが或日若狹守が定謙にいへるは足下才氣には餘りあれど只忍の一字不足なるべし、若し良吏とならんと思

はゞ宜しく古人に倣ふて日毎に忍の字を百字づゝ寫さるべしと、定謙其言に從ひ一二日忍の字百字づつ寫しゝが、自ら思ふに日々に百字を書するよりは之を扁額にして掲げ朝夕に視て誡めとするこそ簡便なれとて其事を若狹守に語りしに、若狹守のいへるは足下忍の字に不足なることは果して吾見る所の如くなり毎日百字を書するは乃ち忍の字の義なるに之を扁額に掲げんとするは不忍の甚しきなりと誡めけるが他日町奉行となりて嚴責を受け遂に謫所に死せしは忍に足らざるがゆゑなること誠に若狹守が先見の如くなりしとぞ』(小宮山氏德川太平記)

『大鹽平八郎も亦堪忍の足らぬ人なり、矢部駿河守曰く平八郎を叛逆人といへども駿河が案にては叛逆とは存せず、平八郎は所謂肝癪持の甚しきものなり、某嘗て平八郎を招き共に食を喫せし折節、金頭(かながしら)と云る大魚を炙りて出せり、時に平八郎憂國の談に及ぶ時、忠憤の餘り金頭の首より尾までワリ〳〵嚙碎きて食ひたり、翌日に至り家宰、某を諫めて曰く、昨夜の客は狂人なりゆめ〳〵高貴の御方へ近くべきにあらず爾來奥通り差留給へといへり云云』。平八郎も亦忍の一字に不足なる爲め身を亡ぼしたのである。

「第六に深心清淨にして利養に染まず」とは例せば『本莊因幡守宗資は德川綱吉公の外戚にて桂昌院尼公の兄なれば當時威權並ぶものなかりしが恭讓謹厚にして毎日朝食の後には夫人に命じて煎茶三碗を進めしめ夫人に戒めて昔しを忘れて天に背く勿れといひ、居間には三百と題せる額を掲げたり。或人其意を問へるに宗資答へて吾むかし京師にありし時、少給の奉公にて家貧かりけるが、たま〳〵遠方より來客あり、されど錢なくして饗膳を設くること叶はず、然るに隣室に志ある人ありて錢三百文を與へられたり、其恩今に忘れ難きなり。今は吾大祿を賜はることは實に無量の洪恩なり、依てかゝる額を掲げて戒めとすと語れり。また宗資の領地八千石上州にあり、元祿中領地割替ありて勘定奉行萩原近江守の計ひにて八千石の替地へ二萬石餘の處を渡したるに宗資悅ばずして水帳を差戻して云ばるは我は一位尼公の御爪の端にて先祖にもなき大名となりしことゆゑ、公用とあらば所領の中如何ほども差上べし。然るに今本高より内高多き所を渡さるゝは自ら顧みて恐懼に堪へずとて固く辭して受けざりき』、また我高祖大師が將軍時

賴の寄附せられたる田地を受け給はず、紫衣を陛下より賜はりしも之を辭し給ひしが如き、また風外和尚が名山大刹には野狐が住むとて高松藩の招待に應せざりしが如きは皆深心清淨にして利養に染まぬのである。

「七には一切種智心を發す」といふは一切のことを研究して其理を推知し、事に當りて惑はざるをいふのである

「八には一切衆生に於て尊重の心を發す」といふは例せば禹王は人より善言を聞けば何人にても起て拜したるが如き、また釋尊が貴賤上下の區別なく、善男子善女人と呼びて敬愛せられたるが如きを申すのである。

「九には諸の談話に於て散亂の心を生せず」とは何事を談話しましても眞面目に事實を語りて、猥りに心の散るやうな戯れ言を發せざるをいふのである。

「十には常に念じて佛を觀す」とは常に吾人の心を平かにし氣を輕くし意を安くして宇宙平等の本體と合一せしめ、眞如の月を心水に映せしむるのであります。

右十念の中に於て一念にても能く實行することができたなら吾人は安養の

淨土に此身此儘遊びつゝあるのである、況や十念を備ふるをや、前にも申したる如く物外和尚の句に

極樂も此通りなり盆の月

とありますが、此世ながらの極樂であります。因に或農學士が作りたりといふ十事の心得座右銘なるものがありますから、少しく訂正を加へて讀書の參考に供へます。

一分の善は九分の惡に勝つ
二分の借は八分の貸より怖るべし
三分の堪忍に七分の得あり
四分〳〵しては何事も成らず
五分〳〵の智慧を十分に使へ
六分の正直に擔保いらず
七分の暮しに不足なし
八分の腹に醫者いらず

九分にて足れば間違なし
十分の働きに貧乏追ひつかず

これは吾人が現身にて天國に入るべき心得の一つであります。

電

一機迅疾更無過、斗轉星移事已除、驟雨破山怒雷折、長空驀逐紫金蛇　虎關

拳頭擊碎頑虛空、脚底踏翻兜率宮、不道不官君已逝、鵑花長在夏山紅　奥宮慥齋

道既無形體、心何有拘泥、達人能明寺、渾順天地勢　横井小楠

第六章　社會と個人との歸一——自他不二論

前回に於て天國といひ淨土といふも人世を離れて別にあるのではないと申して置きましたが、果して人世の外に天國も極樂もないとすれば、吾人は正善に安住して地上に天國を建設することに努めねばならぬ、而して正善に安住して道德を實踐するには自他不二といふことを充分に理解するを要します。

自他不二とは自己と他人とは同一存在の分身であるとの意で、譬へば一個の下等動物が二個に分裂したやうなもので二個共にそれ〴〵一個の動物の分身である。之と同じく人類は自己と他人と分離して居るけれども元來一個の大なる「我」の分身に外ならぬのであります。

此道理を明白せんには先づ吾人の身心に就て審かに其狀態を觀察しなければならぬ。元來身心は同一存在であるから分離して考へることはできませ

ぬが、便利の爲に身心を二つに別けて二方面から觀察することに致さう。

先づ吾人の身體は如何にして出來たかと申すに前回も講述したる如く母體中の一個の卵細胞が受精して分裂を始め二個の細胞となりて連結し、更に分裂して四個の細胞となり八個の細胞となりて連結團合し、遂に胚葉を生じ、それより分業作用によりて內臟、神經、骨肉、皮膚、五官、手足等を生じ、遂に一個の完全なる人體となりて母體と分離して獨立するのである。故に子の身體は父母の身體の分離獨立したるもの、即ち父母の種子が新たに成長して獨立したものであるから子體は親體の再現再生したるものなること勿論である。

斯く人間は母體の卵細胞より生ずることは千八百廿七年ベーアが顯微鏡にて卵細胞を檢案してより益々明かとなつたのである。古へにありては生物が皆其母體の種子より生ずることを知らずして偶然に湧き出ると思ふて居りました。されば「アリストートル」も其動物史に「腐敗は物を產す」と申して蟲類の多くは腐草敗土より生ずると考へ、虱蚤の如きは塵埃や腐肉より化生

し、泥土よりは鰻などを化生するやうに考へた。我國にても螢は腐草より化生し鰌魚は蕎麥の腐敗より生じ、蛆は腐肉より生ずるなど申して居りました。併しこれは皆誤解で、生物は一として其種子より生せぬものはない、十七世紀の末に佛國の醫師にレジといふ人は既に動物は其同類より生ずることを論じました。然れば則ち吾人の生れたのは父母の種子より生じたので父母は亦其父母の種子より生じたるや疑ひない。乃至人間は人間の祖先たる父母の種子より生じたるもの、換言せば同一祖先の分身したもので、人類は一個の「我」が分離獨立し、再現再生して今日の多く多數の存在となつて居るのである。

更に溯りて考ふるに人間の如き高等動物が突然地球上に發生して其種子を殘すといふはあり得べからざることである。這は必ず人類に似たる他の高等動物の變種として生じ、それより人類の繁殖となつたに相違ない。故に進化學者は人間は類人猿の變種であると主張して居ります。此理を明瞭にする爲めに連續律のことを少しく御話致さう。

連續律と申すは事物の生成には連續せる過程があつて毫も飛び越えることはないといふ法則であります。譬へば一と一と加へて二となり二に一を加へて三となり三に一を加へて四となり、乃至九に一を加へて十となる。而して一より十まで一位でも飛び越えては十の數は成立しない、必ず一二三四乃至九十と連續累加して十となる。また一錢の資産の人が百萬圓の富豪となるには一錢二錢三錢と次第に連續累上して百萬圓に至るので百萬圓より一錢迄の間の位には一位でも缺けたるなく飛び越えて上りたる所はないのである。之と同じく東京より西京へ行かんとすれば吾人は東西二京の中間に横はる無數の點を連續して通過せねばならぬ、一點にても通過せずに飛び越えて行くことはできぬ。また音樂師が樂器を鳴らすとすれば始めは細微なる音聲を生じ、それより次第に振動數を增して人耳に達するので突然吾人の聞き得べき音響を發するのではない。吾人が聽き得ざる無數の小音響が連續累加して吾人の耳に入るに至るのである。されば吾人の聞き得べき音響は一秒時に三三乃至六九六〇の振動數に局ると物理學者はいふて居

ります。草木の生長に徴して見ましても種子より直ちに花を生ずることはできぬ、必らず根を生じ芽を生じ莖を生じ幹を生じ枝を生じ葉を生じて連續發達して後に華を生ずるのである。之と等しく大海も小滴の水の連續集合して生成したるもの、大山も小塊の土の連續集合して生成したるものに外ならぬ。地球それ自身も亦突然今日の狀態に在りて化生したのではない幾億萬年の古へより連續變化して今日の如く人畜を生ずるに至つたのである。

果して然れば人間の祖先の如き高等動物が突然地球上に化生したとは如何にしても考ひられぬ。依て人間の祖先は人間に最も近き動物の變種として生れたと考ふる外はない、而して人間に近き動物はまた他の動物の變種として生れたるものにして次第に連續して其祖先に溯れば遂に下等動物の變種より生じたるものとなり、遂には單細胞動物となり、原始生物となり、畢竟は無機物より生じ來りたるものとなる。而して今日地質學者の發見したる多くの化石は皆此連續進化の理を立證するに傾いて居る。されば地球

上の生物は譬へば一株の大樹の如くで一切の無機物は其根抵となり下等動物は其幹莖をなし、高等動物は其枝條を形成し、人間は其花實を結びつゝあるのである。今一株の樹に於て其根と其花とを比較すれば全々別異のもので同一樹の部分とは見られぬ程である然れども事實は全く根も花も同一木の部分にして不可離の關係ある如く、人類と無機物と比較する時は全々別異のものにして同一生物の部分とは見られぬ程であるが、事實に於ては全く無機物も人間も同一生物の部分で不可離の關係を有するものであります。かく考察すれば、僧肇のいひたる如く

天地同根萬物一體

となる。是に於てまた自他の論ずべきはない。これ自他不二の一應の意義であります。

次に吾人の心に就て觀察しましても、吾人が現在の心狀態は祖先以來幾十萬年遺傳し來りたる結果で、吾人が一切の智識は祖先以來代々の人々が經驗したる所を集めたるに過きぬのである。是を以て電信電話等電力の智識

に於てはフランクリン。ヴオルタ。ガルバニ。ホイートストン。スタインヘル。モルス。ベル等多くの名家が苦辛して經驗したる智識を傳へ、汽車汽船等の蒸氣力の運用に於てはワツト。フィツチ。ラムセイ。シミングトン。フルトン等の諸士に負ふ所あり、法律に於ては我國の聖德太子は勿論。英佛獨の國民を始め古への羅馬人の智識は大いに吾人に影響し、美術に於ては見ぬ古への希臘人を始め支那の名工、歐洲の大美術家は皆吾人に貢献する所あり、文字に於ては支那の蒼頡(?)や古へのフィニシャ人はいふ迄もなく、活版術を發明したる諸家、假字を作れる諸大家は吾人の大恩人であり、文學に於ては古今東西の大文豪に負ふ所あり、醫術に於ては希臘のヒポクラテス、支那の神農の如き太古の人まで吾人に其智識を傳授して居り、宗教に於ては太古の印度人、猶太人を始め基督釋尊等の如き偉人の賜であります。一言に要約すれば吾人が智識と道德の寶庫は人間の祖先已來共同して積集し來りたる遺産である。

果して然れば吾人自身の心狀態といふも畢竟は他人の心狀態を離れて成立

することはできぬ。吾人の智識は他人の智識、吾人の道德は他人の道德、吾人の心情は他人の心情より得來りたのであります。これ自他不二の第二の意義である。

更に吾人が平生の生活上の事項に就て觀察するに吾人は一本の筆、一個の麭包を得るにも他人の助けを借らねばならぬ。吾人の衣服を製する布を吳服といひ、吾人の用ふる小間物を高麗物といふが如き、古へより三韓、支那の人々と有無相通じて共同生活を營みたる痕跡を存し、今日にては舶來品は一日も缺くべからざる要具となり、一個の指環をはめ、一個の石鹸を用ひ、一個の菓子を食ふても西洋の幾百人の勞働に成る品を用ふるのである。さすれば吾人が日用生活上より觀察しても自他の區別を明確にし自身は他人と相關せずといふことはできぬ。即ち自身の利益は他人の利益、他人の幸福は自身の幸福となるのである。故に吾人は一人にて遊ぶより多人にて遊ぶを樂み、一人にて美味を食せんよりは夫婦親子一家團欒して食卓に就くを樂みとし、自己一家のみ樂みを極むるよりは多くの親戚同胞と之を

與にするの樂み多きを悅ぶのである。これ人間自然の性情である。されば修證義にも

愚人謂はぐば利他を先きとせば自らが利省れぬべしと、爾にはあらざるなり、利行は一法なり、普く自他を利するなり

と示してあります。

凡そ人間は個人的方面の性情と社會的方面の性情と二つ具備して居ります。例せば飲食の慾、自利の慾、瞋恚の情、嫉妬の情の如き兎角排他の傾向を具へて居る。此點に關しては人間も禽獸も毫も差別はない。此外に人間には社會的性情といふて先づ夫婦親子相和して、孝順と稱する家庭的道德を生じ、次には一社會の秩序を重んじて其君長に忠節を盡し、規律を守るといふ道德を行ふやうになり、次には一國家を形成して邦家の爲めに一身を犧牲にするといふ愛國的道德を發揮し、次には四海四胞の爲めに信義を守り公德を重んじ、博愛慈悲を以て衆に望むといふ高大なる道德心を發するに至るのである。

然るに東西洋共に自己中心說なる偏見がありまして兎角自己のみを中心として社會を第二位に置き自己にのみ都合よき方法を執らんとするは大いなる誤りで、人間の個人的方面にのみ重きを置く所の謬見である。また或一派の進化學者は人間と動物とを比較して人間が其個人的なる性質に於て下等動物と異らざるを見て、人間も動物と同じく、利己一片のものである。人間の戀愛も犬猫の交尾も同一である。人間に道德心があるといふは詐りで、畢竟は生存競爭の手段たるに過ぎぬと論ずる人がありますが、吾人の意見は左樣でない。抑も道德心の萠芽は母子の愛より肇まりますので、生物が無性生殖と申して男女の別がなくて繁殖する間は夫婦の愛情も母子の恩愛もありませぬ。例せば下等動物が分裂して繁殖したり、草木が一個の花の中に雌雄兩蕊を備へたりして繁殖する間は夫婦の愛情もないのである。また多くの魚族などのやうに男性と女性がありましても別々に卵細胞と、精蟲細胞を分泌して自然のなりゆきに任せるやうでは母子の恩愛は成立しない。然れども動物が次第に進歩すると男女性の交尾によりて生殖するや

うになりまして、茲に始めて漠然たる夫妻の關係を生ずる。然れども多くの動物は交尾の爲めにのみ一定の時期に集りて生殖し、平生は全く孤立の有樣である、これ犬猫等に見る所であるが、此等犬猫にありても母子の恩愛は充分に發達して居ります。這は其產み落したる子を養はざれば生長する能はず、隨て自種を滅ぼすに至るゆゑ、母子の愛を本能上備へて居るのである。鷄の場合も之と同じく孵化したる雛を養ふ必要より母子の愛は生じたに相違ない。而して鷄や犬猫には母子の愛は發達してゐれども父子の愛は少しも認められぬ。人間の野蠻なるものにありても之と同じく母子の關係のみありて父子の關係なきものは澤山ある。これより一歩進むと母親が其子を養ふに全力を用ひる爲め父親は其妻を扶持する必要を生じます。是に於て始めて夫婦といふ緊密なる關係を生じて父子の恩愛も夫婦の愛情も成立する、これは類人猿及び人間に見る所の現象である。かく夫婦親子の關係が成立するときは親は子の爲めに献身的に働き、子は親の爲めに孝養を盡すといふ美德を發揮するのである、それより社會を形成するに至り

て社會的性情を具備すること明かであります。されば今日の吾人は國家社會を形成して先天的に社會的性情を備へたるものであるから古への野蠻時代の民と同一筆法を以て論ずることはできぬ、況や下等動物と一律に論ずるをや。

然ればとて近頃のハイカラの青年男女が唱ふる戀愛神聖論など齒の浮くやうな主張に道理があるではない。何となれば色情を離れたる戀愛はないので、色情は男女生殖の天賦の性能である。然れども色情其物が戀愛ではない、色情を根抵として其上に社會的性情が加つた一種複雜の情である、而して戀愛の如きは個人的性情の分量が多く社會的性情の分量は少いので極めて幼稚なる人間の心情であるから神聖などいふべきものでない。

以上人間の備へたる二種の性情中に就て何れが高等にして何れが下等であるかといへば謂ふ迄もなく社會的性情が高等であります。而して個人的性情のみにして社會的性情なからんか吾人の世界は一の親愛なく、一の同情なく、個々各々孤立して自己の都合のみを計り、團結盟合の力がないから

全世界は恰も大砂漠の如くで少しも趣味もなく、風景もなく、磊々たり碌碌たる個人の頑石のみとなり、殺風景沒趣味を極めたるものとなる。此の如き世界には文明といひ、道德といひ、人道と稱する美華を咲かすることは全く不可能である。之に反して社會的性情は人世を親和し、團結し、和氣藹々たらしめ、同情同感の泉を湧かしめ、文明の花を咲かしめ、人心を濕澤にし、人生を美化して自然に黃金世界たらしむるのであります。而して此善美なる社會的性情を涵養するには自他不二なる道理を體得せねばならぬのである。

自他は果して不二であるとすれば自己の利益は他人の利益となり、他人の利益は自己の利益となる、これを自利々他の不二と申すのであります。然れば其利益とは如何なることかといふに資財の利益もあり、精神上の無形の利益もありますが、肝要なのは精神上即ち智德の上の利益である。何となれば前回より屢々申す如く四海一家同胞兄弟であるから、設へば外國から我國へ多くの金錢資財を送つて來たとしても、這は一家の中にて甲の室

にありたる資財を乙の室に移したと同じことで一家全體の資產には少しも增加はない、また日本より外國へ許多の資產を寄贈したとしても同樣なる理で世界全體の上より見れば少しも資財の增加はない。さりとて金銀を以て他人を扶助するのが無益であるといふではない、至極結構のことではあるが、之を以て他人に智德を賦與するに比すれば少しく劣て居る。何となれば外人が一の大切なる智識を日本人に與へたとすれば外人の智識は元の儘で少しも減せずして日本人の智識には增加を生ずる。故に世界全體の上より見ても精神上の資產に增加を生ずる。之と同じく日本人が或る一の大切なる道德上の敎訓を外國人に與へたとすれば日本人の道德は元の儘で少しも減せずして而も外國人の道德には增加を生じます。是を以て佛敎にては單純なる資財を人に與ふるよりは法を以て人に與ふるを重しとするのである。されば修證義にも

菩提心を發すといふは己れ未だ度らざる前に一切衆生を渡さんと發願し營むなり、設ひ在家にもあれ、設ひ出家にもあれ、或は天上にもあれ、

或は人間にもあれ、苦にありといふとも、樂にありといふとも、早く自未得度先得他の心を發すべし

と示されて、自身には未だ充分精神上の慰安を得て生死の海を渡らしめ、涅槃の彼岸に到らせ願くば他人を一日も早く救ふて生死の海を渡らずとも

んと心掛けよといふのであります。故に佛敎の理想とする所は自己一人智

德の向上を期するのでなく他人をして普く智德を圓滿させやうと期するのである

然るを世人は動もすれば私利のみを營みて自利に殉するは大なる心得違ひであります。昔し歷山大王は兵を用ふる神の如く、敵として敗らざるなく、城として拔かざるはなかつた、然れども彼が目的は自己の厭くなき領地を得んとする慾望を滿足するにあつた。故に遂には其近臣さへ彼を信賴するものなく、憐れにも三十三歲の壯齡にて非業の最後を遂げました。我國の豐臣秀吉とても其通りで、猥りに大望ばかり企て朝鮮八道を馬蹄にかけ、大明をも乘りとるといきまいたけれども、朝鮮さへとれず、剩さへ其子秀

賴に至りて滅亡してしまいました。其他成吉汗といひ、羅馬のシイザアといひ、一人も永久の功業を樹てた人はない。殊にナポレオン第一世の如きはセントヘレナの孤島に流されてアラスヤ

今我人を離れて獨りヘレナの島守となりたれば唯一人も我爲めに死なんとするものなし、キリストは然らず其世を去りて以來二千年に垂んとすれども猶ほ彼が爲めに死んことを願ふもの幾百萬あるを知らず。

とて長大息を洩しまして、愈々死する時には人事不省の中に、其妻ジョセヒン、軍隊、佛蘭士などゝ叫んで死んだと申します。何と憐れではありませぬか。これ皆自利をのみ先として利他を省みざるの致す所である。歷山大王。第一世ナポレオン。豐臣秀吉。シイザアなど世界に有名なる大英雄でさへ斯の如くである、況や世の平凡の人物が私利私慾を先とするをや。

『佐竹義宣の臣に車丹波守といふ勇將あり、義宣領地を削られて秋田へ移されしとき丹波守之を憤り、其黨馬場和泉、大久保兵藏などいふものをかたらひ、兵を擧げて水戸城を奪はんとせしを藤田能登守欺きて之を擒にし、

竟に磔罪に行はれたり。丹波守が子に善七郎といふ者ありけるが、深く此事を遺憾に思ひ、父の仇なれば何とぞ家康公を一太刀なりとも恨まんと心がけ、いかなる便によりしか庭作るものとなりて、江戸城の庭内に入こみ、竊に伺ひけるに、たゞ〳〵公の庭さきへ出られしを、善七郎見すまして天の與へと悦びつゝ、手に持し木鋏をとり直し公の顔を目がけて打つけしに、狙ひはづれて公の前三尺ばかりの處に立たり、近習の輩之を見て大に駭き、すは狼籍なる奴かな、引下して打て捨んと罵り騒ぎしを、公、制して、汝等何を申すぞ、彼のもの何の野心ありて我に害を加ふべき、力を入れて樹の枝を剪らんとし誤りて鋏を落ししは、全く一時の過ちといふものなり、今天下草創のときにして人々危ぶむ心をいだく折なれば、若し一人の辜なきを殺さんには人心必ず離るべし、汝等決して彼を罪すること勿れ、彼もさこそ驚きつらん酒飲せて休息せしめよとありて、内に入られしゆゑ近侍の輩も此上はとて事なくて止ぬ』

『善七郎つく〳〵按ずるに公の聰明にして我害心をさしはさむことを悟り給

はざることはあるまじ、正しく我をそれと思ひて一度はゆるし給ひしならん、さもあらばわれ不倶戴天の本文あり、いかにもして本意を達せんものと千々に心を碎き庭さきへ忍び入り立石の陰に身をひそめて公の厠へ入らん所を待合せたり、案の如く亥の刻ばかりに寢所より燭臺きらめきて家康公厠へ入られしを善七郎爰ぞと思ひしが、燈火の殊に明るく、扈從の人多かりければ、さしも大剛のものながら少し心をくれし、今度仕損しなば一大事とためらひける内に公は厠へ入られて、やがて小姓方を呼び、今宵庭のほとりに虫の聲の絶てせざるは心得ず、燭火をあげて見よとあるに小姓の方々、庭へ飛び下り、こゝかしこ、尋ね廻れば善七郎今は遁る術なく、責て一太刀なりともと厠をさして躍り出るを、有合ふ人々、さてこそ曲者ぞさんなれと一齊に駈集りて手とり足とりして終に善七郎をからめとりて引すゑたり』

『家康公見て小姓衆を以て其名を尋ねられるに善七郎今は包むによしなくして、有のまゝに申立、片時も早く死を賜はるべしと申けるに、公其孝勇な

ることを感じ、賤き者となりて天下の將軍をねらふこと豫讓が趙襄子をねらひしに遙にまされり、襄子が奸勇なるすら尙ほ豫讓を助けたり、況や我をや、若吾孝子を殺さば天下に孝を絶つといふべし、汝必ず命を全うして武名を起すべし、但し我を以て父の仇と思へる上は假令吾に仕へよといふとも、よも肯ふまじ、汝が舊主なれば佐竹がもとに勤仕すべしと、いと忝き命ありけるに、善七郎更にうはがはす、我父の仇と共に同じ天を戴きて何れの所にか武名を立つべきや、若し死を許し給ふとも我自刄して死すべしと申けるに、公大いに氣色をかへて、今四海の內、誰が我命を拒むものぞ、汝若し我活命の意をくじき死地につくことを好まば、汝が九族を盡して悉く市に切らんとありければ、善七郎振ひ恐れ父の仇を報ゆることを得ざるのみならず、又母をして戮につかしめば、何の不孝か是にしかん、此上は命に背き奉らじ、但しまのあたり害し奉らんと計りし身にて活命の恩を蒙り、人間の交りをなすこと、顏厚しと雖も、爲すに忍びざる所なり、是より我は人界を辭し乞兒癩徒の群に入て、天命を終るべしと領掌しけれ

ば、公益々其志を憐みて有司に命せられ乞丐の徒の首領として飢寒を免るゝことを得せしめられたり、是より車善七と改めて今に連綿たり』と德川大平記に記してあります。

家康が智仁兼備の大將たること此一事にても知るべく、自利々他の圓滿は古今の名君賢將の努めたる所であります。

虎關

防意

凡人平居順善婉軟、一旦擺脫、放縱其心、或瞋、或怨、或餓、或狂、共不防意之爲也。人心如水、疏流塞止能隨干制矣。消微之時坏土能遏、至于橫溢、崩石猶潰、況心水之宕激也不豫設堤防、卒逢于死海者必也。所謂防之謂者、節甘嗜於口、適寒溫於身、及喜怒愛樂、凡百動心之者、皆防而不親、調適支體、恬淡精神、萬慮不涉、一性自醇、此時百患消散、性命善美、勿藥而有喜者、是之謂矣

第七章　理性と道徳との歸一——悲智不二論

前回の講義に於て自他不二の理を詳論して自利々他圓滿の道德を行ふのが人たる者の正道なる由を陳べましたが、さて其道德を實踐するに就て何物よりも緊要なるは慈悲と智慧とであります。依て今回は慈悲と智慧の不二なる趣を縷述しませう。

慈悲は前にも申した如く父母が其子を愛する如き温かなる情で、

かくばかり偽り多き世の中に
子の可愛さは誠なりけり

とある如く、中心より出る誠の情である。田子方といふ人は一日老馬の野に立つを見て御者に其所由を問ふと、御者の申すには彼馬は老い朽ちて役にたちませぬゆゑ農家へ賣り渡したとのこと、そこで田子方は大いに歎いて开は我過ちであつた、壯んなるうちは馬車をひかせ老いたりとて農家へ賣

るは不仁の太甚しきであるとて、其馬を買ひ戻して生涯大切に飼ふてやつたといふことである。是の如きは萬物の靈たる者のなさけで御座ります。慈悲は譬へば水の如く下へ下へとくだりまして如何に下々の者でも慈愛の情をかけるから向下的のものである

之に反して智慧は火の如く上へ上へと昇りまして如何に高い道理をも知り極めんとするものであります。されば智慧は向上的のものである。然れども眞理は圓の圓きが如きものでありますから登り昇りて止まざれば何時しか下り來り、また下り下りて止まざれば何時しか上るのである。かくして向上と向下とは一圓相の眞理の上には同じものとなる。これが悲智不二の一應の意義である。

却説吾人が眞に慈悲心を發するには正しき智惠即ち理性を要します。若し正しき智惠なくして慈悲のみあつたならば其慈悲たるや姑息の愛となり、宋襄の仁となります。然らば如何にして正智を開くかとならば、三種の迷ひを離るれば正智を開發することができる、三種の迷ひとは第一に世相の

迷第二に自我の迷、第三に因果の迷であります。第一の世相の迷ひとは世間の假相に執著して人世を以て汚れたる所、厭ふべき所と思ふ迷ひで、これは淨穢不二といふ問題の下に詳かに開陳して置きましたから今日は重ねて申しますまい。第二の自我の迷ひと申すは自己といふ個體のみを認めて我と思ひ、私利私慾を逞うする迷ひで、これは自他不二といふ問題の下に委細に申上て置きましたから、殘るは第三の因果の迷ひのみであります。因果の迷ひといふは世間に善人にても貧苦艱難の憂きめに逢ひ、惡人にても富貴榮達の幸福に浴するを見て、天道是か非かの歎を發し、神もなく佛もなく、善に善の果もなく、惡に惡の報もなく、浮世は强いが勝ちて、强力これ權利であると思ひ、道德的秩序の上に疑惑を懷くのであります。先づ善因善果、惡因惡果の理を理解するには、凡そ因果的事項に道德の判斷を下して善惡を以て論ずべき事項と、善惡を以て論ずべからざる事項のあるを知らねばならぬ。依て因果的事項を大約して三種に區別して論じませう第一類は物理的因果と申して物體に熱を加ふるを因として必ず其膨脹する

の果を生ずる如き、水力を因として水車を運轉するの果を生ずるが如き、空中の電氣を因として雷鳴の果を生ずるが如き、病毒侵入を因として疫疾の果を生ずるが如き、經濟の巧なるを因として富裕の果を生ずる如き、衛生を重んずるを因として健康の果を生ずるが如きは物理上然るべき理法である。これ等は道德上善惡の判斷を下すべき事項ではない。第二類は精神的因果で精神錯亂を因として幻覺の果を生じ、推理の誤錯を因として過誤の果を生ずるがごときで是亦道德上善惡の判斷を下すべき事項ではないのである。第三類は道德的因果で善因善果、惡因惡果とはこゝに適用する語であります。例せば吾人が他人の窮窘を救ひ、慈善事業に金品を喜捨するが如き、自ら其善行たるを意識して之を行ふ時始めて善といはるゝので、自ら其善たるを知りて之を行ふ時は其結果として直接に精神の平和、良心の滿足を得て天を怨みず人を咎めざる安慰を得る。これを善果といふのである。例せば昔し希臘の大賢人ソクラテスは無實の罪によりて死刑に處せられましたが、少しも驚かず怖れず從容として毒を仰いで死しました。ま

たジオン、フッスは宗教改革を唱へたる爲め羅馬法王の命にて燔殺されまし
たが猛火炎々たる中に從容として讃美歌を歌ふて死じました、甲州惠林
寺の快川和尚も武田家の滅ぼされた時に織田信長は和尚が勝頼に徒黨した
と思ふて一山の大衆を山門の上に逐ひ上げて下から火をつけましたが、快
川は自若として、「心頭を滅却すれば火も亦涼し」といふて圓寂しました。こ
れ即ち精神の平和、良心の滿足、天を怨みず人を咎めざる所で、君子の善
を樂しむ所以は實にこゝにあるのであります。加之、善人の行爲は間接の
結果として長へに天下後世の利益となる。例せば釋尊や基督の行ひが萬世
の下まで吾人の利益とり、楠公や、ワシントンの行働が長へに天下蒼生の
利益となるやうなものである。且つそれ善人は萬代の師表となり、其思想
は永く後世に傳はり、其歴史的人格は後世子孫の、爲めに敬愛せらるゝの好
報を得るのである。これ善因善果の欺くべからざる所である。
之に反して惡人は自ら其惡たるを意識して邪惡の行を爲すが故に精神の不
快、良心の不安、天を恐れ人を疑ふの惡果を生じ、間接には其行爲が長へ

に天下後世に害毒を及ぼし、其歴史的人格は永く人の唾棄する所となり、
惡聲汚名を蒙るのである。これを惡因惡果と申すのである。
然るに世人の多くは因果の關係を混同して善人なれば必ず家も富み身體も
健康に、位も貴くあらねばならぬと思ふは一種の謬見である。設令善人な
りとも衛生を重んぜざれば病氣もし、國家の爲めに盡力せねば位階も上ら
ず、經濟が下手なれば貧乏もする。これ因果上當然のことである。若し善
人でさへあれば經濟は如何樣にありとも富を致し、不養生を盡しても健全
であるとしたなら、それこそ因果も何もないのである。されば釋尊の如き
聖人も病氣であれば病苦に沈吟し、孔子の如き善人も貧困であれば止むを
得ず四方を流浪する、因果歴然として如何ともすべからず。これが善因善
果惡因惡果の理であります。
併し斯く申しても讀者に尙ほ疑ひがあらうと思ふから二三の例を引いて御
話しませう。玆に或る愚人がありまして其父の頭上に蠅のとまるを見て之
を追ひ拂ひましたが、追ふても追ふても蠅はくる、そこで大いなる斧を執

りて此畜生と叫びもあへず蠅を打たんとして父の頭を打ち割りました。此場合に於て愚人は少しも悪い心はないのに其結果は親を殺すといふ悪果を生じた。故に善因悪果であると思ふ人もありませう。然れども左樣ではない、何となれば善悪の行爲とは其行爲者が自ら善たり悪たることを明白に意識して居らねば善悪の判斷は下されないのである。而して此愚人は蠅を追ふに斧を用ふる程の痴漢なれば善の何たるも意識しては居らぬ、即ち彼の行爲は善ではない、又悪でもないのである。即ち道徳的に判斷する價値のない行爲である。而して親の死亡したるは斧で其頭を打割たるが原因であるから物理的因果であります。

また例せば慈善家が貧人に物品を施す爲めに貧民の怠惰を奬勵するの結果を生じたと假定すると、世人は之を以て善因悪果と論じますが、吾人の見る所は左樣でない、何となれば慈善家は直接に精神の平和、良心の滿足、天を怨みず人を咎めざる安慰を得る故に善因より善果を得、且つ其人格も天下の敬愛する所となるであらう。而して貧人は其の恩に狎れて悪心を生

じ怠惰にして他人に寄食せんとするのであるから貧人の側より見て悪因悪果であるといはねばならぬ。

また例せば人あり其母に藥を侑めたるに其藥は却て毒となりて其母は死したりとせん。此場合にも亦決して善因悪果ではない、何となれば元より毒と知りて母に侑めたのではないから中心に不安を懷くべき筈なく、世人の爲めに擯斥せらるゝ憂もなく、其行ひが長く後世に害を貼すことはない。また此人が良藥ならんと思ふたのが却て毒藥となつたのであるから、這は推理の誤りで吾人の所謂精神的因果で、道徳的判斷を下すべき因果の事項ではない。且つ毒を呑めば其人の死するはこれ亦物理的因果で道徳上の制裁によりて然るのではない。

右の如く考察する時は善因善果悪因悪果のことたる其明白なるや天日を仰ぎ視るが如くで、毫も疑を介むべき所はないのであります。されば修證義にも

一

大凡因果の道理歴然として私なし、造悪の者は墮ち、修善の者は陞る、

毫釐も忒はざるなり、若し因果亡して虚しからんが如きは諸佛の出世あるべからず、祖師の西來あるべからず

と示されて、善因善果、惡因惡果、歴然として毫釐も差忒することはない、若し此理法が虚説だとしたならば佛が法を説くとも何の益もなく、達磨大師も印度から支那へ來て教法を傳へぬであらうといはれたのである。同書にまた

今の世に因果を知らず、業報を明めず、三世を知らず、善惡を辨へざる邪見の黨侶には群すべからず

と戒めてあるから、これより少しく三時業報のことを御話しませう。

三時業報とは原因より結果を生ずる上に於て遲速の差あることを申すので、先づ物理的因果の上よりいふと、一個の石を高い棚の上に長く載せて置いたのが何十年も經て後に落ちたとすれば石を棚に載せた結果が遲く現れたので、また同じ石を人の面に投げつけて血を流したるが如きは投石の結果が忽ち現れたのであるから、これは速かなのである。かくして道德的因果

の上にも其善惡業の報いが速かにある場合と遲くある場合とある、これを三時に分けたのが三時業で、修證義に

一者順現報受、二者順次生受、三者順後次受これを三時といふ

とある。第一順現報受とは善惡業の報いが現在にあるので、例せば東鄕大將が戰効を樹て直ちに世界の稱賛を得たやうなのである。第二は順次生受で、これは現在には其報いが知れずとも我子孫の代に其報いが來る、例せば父親に功のあつたのか知れないで其子の代に始めて世に知れ渡り叙勳などせらるゝをいふ。第三には順後次受で本人の死後遙かに後世に至りて其人の性格や事業が世人に認められるをいふ、例せば基督が彼の時代には叛逆人として磔殺せられたるも後世には神の如く崇拜せらるゝが如きである。これが三時業の大要であります。ラスキンの語に

道德と背德との各行爲及び衝動は如何なる人にありても直ちに其顔面音聲及び神經力に影響す

とありますが、吾人の一切の行爲は皆直ちに吾人の身體精神に影響する。さ

れば德者の容貌は自から温かに、强盜の顏色は自らもの凄く、漂蕩兒の面貌は自然と馬鹿らしく、黴毒患者の音聲は嗄れ、衞生家の音聲は囈唸たるが如くである。且つや貧富の差によりて同一人にても容貌に變化を生じ、職業の別によりて人の風采にも變更を來すが如きは注意すべき事項である。而して此等の精神身體は直ちに子孫に遺傳して永久に後世に遺るのである から、吾人は自ら戒め自ら謹まねばならぬ。

こゝに注意を要するは舊來佛敎を說くものが三世因果と稱して前生に殺生したから今生に短命であるとか、今生に大食をすると來生に豚に生るゝとか、今生に酒を好んだから來生に酒蟲に生るゝとか、今生の白犬は來生に人間に生るゝなど申して說明を加へたのであるが、餘り信を置くに足るべき說でない、此等は單に和漢古今の妖怪談を根據として荒唐の說を主張するのみであります。昔し德川の將軍綱吉公の時因果に關する馬鹿〳〵しい迷信がありました。

『抑も此事の起原は將軍家先きに世子德松君の早世せられし以來百方子を求

めらるれども驗なし、然るに知足院隆光がいへるは、凡そ人の子に乏しきは、皆前生の世に多く生類を殺しし報いなれば、若し子を求め給はんとならば、宜しく殺生を禁ぜらるべし、且將軍の御生年は戌に當り給へり、戌は即ち、犬なれば、殊更に犬を愛し給ふべしとなりしゆゑ、將軍之を信じて法令を設け、貞享三年七月十九日の達令には市中に於て大八車又は牛車にて屢々犬をひき疵づくるよし、等閑なるしかた、不屆たるにより、車丁を處置したれど、今より宰領なりとも付添はせ、車引かゝざるやうにすべし、又先きにも令したれど、今以て無主の犬來ると雖も食をも與へざるよし、心得誤りと見えたり、いづれも生類憐の志を肝要にすべし、とあり、同年四月廿一日には飼犬の毛色を帳記し、若し等閑にする者あらば支配の方まで訴ふべしと令じ、四月十日には小石川御殿番保泉市右衞門が奴は犬を斬りたるを以て八丈嶋に流され、市右衞門は俸祿を收めらる、また元祿二年十月四日評定所目安讀坂井伯立は評定所の犬、咬合をなししを等閑にし置きし內、其犬死したりとて閉門を命せらる、同四年二月廿八日には鬪犬あらば

速に水にても洒ぎ引分べしと令し、同五年正月廿日狗子道路に徘徊し麁略のさまに見ゆれば、母犬をつけ往來の妨けとならざるやうなし置べき旨、しば〳〵令せらるゝを違犯し、大犬とともに麁略にする由、吏人を巡察せしめ、背くものあらば咎めらるべしと命ず、同七年五月三日市中にて、犬分水と桶并に柄杓に記し、番人に對の羽織を著せ、犬の字の紋をつけ差置くを禁せらる、また無主の犬を養ふ爲め中野村に犬小屋を作る墻内十六萬坪なり、其内の犬十萬頭に及べり、同九年五月十八日町々より犬を犬小屋に納むるより犬金上納を命せらる、同十五年十月十三日伯樂橋本權之助犬を疵つけしとて切腹を命せらる、犬小屋にて犬を飼ふ爲め勘定奉行萩原近江守八州の代官に下知して高百石に付、一石の犬扶持を課し、江戸町へは一町に黒米五年六升を課す、元祿八年十一月廿五日本鄉弓町富坂上の辻番十人組の内、八兵衛なるもの犬を捨てたる爲め死罪に處せらる、貞享四年四月九日武州寺尾田代塲西村のもの十人、病馬を捨てし爲め遠島に處せらる、同三十日門上の鳩に礫を投げたる小吏あり父子共に追放せらる、元祿

八年十月十六日大坂定番松平縫殿頭隊下の與力同心等鳥銃にて禽獸を打ち、又鳥を商賣せしとて切腹を命せらるゝもの十一人、其子は遠流に處せらる、秋田淡路守季久の嫡子采女季品幼年にして一日吹矢にて戯れに燕を吹きしに是に當りて燕は隣家に落ちて死しけり、此時秋田の家臣多々越甚太夫、燕を殺したるは臣が所行なりと申立て主人に代りて千住口にて死罪に行はる、また番町の旗本伴藤九郎の家宰、長谷川杢兵衛の子杢太郎十二歳にて塀に燕の止り居るを見て何心なく吹矢にて吹きしに翼に中り隣家に落ちて死したり、之が爲めに杢太郎は召捕はれ引廻しの上、品川にて斬罪梟首に行はれ、杢兵衛は三宅嶋へ流され、主人藤九郎は三年の閉門を命せらる、此外犬及び鳥獸を麁略にして刑せらるゝもの枚擧に遑あらず』(德川太平記)何と迷信の害は怖るべきものではありませぬか、將軍家に子のないのは生理上の原因より來ること何人も知る所である。然るを前生に殺生した報いなど迷信して禽獸を大切にするは善けれども其爲めに幾多の人命を害し萬民に累を及ぼすとは如何にも本末を顚倒した處置といはねばならぬ。

斯の如き馬鹿〳〵しき迷執を除いて正智を開くのが禪門の敎である。慈悲は元より結構の心掛げで綱吉公の生物を憐れむ慈悲心は決して惡しくはないが、されど其慈悲が正智と相應せぬから却て無慈悲となつたのである。故に眞の慈悲心は正智より生じ、正智はまた慈悲より生するので、これを悲智不二と申すのであります。因みに因果の空しからざるを證する爲めにモンテスキユーの話をしませう。

『モンテスキユーは佛國ボルドー府の人にて、法律學の大家なり、其女同胞にてマルセーユに嫁ぎしものありしかば、折り〳〵其許に音信れけり。或日モンテスキユーは常の如く其同胞を訪ひけるが、折しも夏のことにて、舟涼みの盛りなるにぞ、モンテスキユーも其夕に小舟を儲ひて納涼に赴きたり。清風徐ろに吹きて畫の熱さを洗ひ、海は穩かにして水波を揚げず、空は澄み渡りて纖翳を止めず、夕日はなやかにさして水に漂ひ、唐紅を溜ふやうにて、得もいはれぬ景色なりければ、モンテスキユーはいと樂しく思ひ、梶取を近く召して、共に景色をめでけり。此梶取は尙ほ十七八歳計り

なるが、言語應對も並々ならず、色白く、きたなげなくて、顏のみ少し日にやけ、殊にあはれに見えけり、モンテスキユーは世の常の梶取にも似ぬを怪みて、其實を問ひければ、此少年對ふるやう、「其實は梶取に候はず、嘗て學校にも通ひしことありしが、今は商家に雇はれ居りし、祭日又は日曜の夕などには些少の金を得んとて、かゝる賤しき業をも務め候なり」といふ。此語を聞きてモンテスキユーは益々怪み、「御身の行、いと奇特なり、これには定めし、いはれのあることにて候はん」——「噫、主よ、此いはれをいふは、いと易けれど、又いたく悲しく侍り。某の父はロベルと呼ひ、當府の正良なる商人にてありけるが、一日交易の爲めに商品を船に積み込み、出帆したりけるに、運つたなく海上にてマロッコの海賊に出遭ひ、商品は船と共に奪はれ、其身もテツアンに伴はれぬ、渠は吾父を奴隷として、一千二百圓を贈りなば還さんと申し越しけるが、父出帆の時に家財殘らず船に積みしことなれば、家には餘りしものとてはなく、母、姉、某と一家三人にて夜晝働き、吾父を贖はばやと思へど、如何に儉約すればとて、衣食も

せねばならず、二人は手弱き女にしあれば、其稼とても、はか〳〵しからず、某は商家に使はるれど、それとても僅かの給金のみなれば……主よ、祭日又は日躍の夕などには、吾朋輩は晴衣など着て樂しく、遊ぶなるに、某のみは獨り機取となり侍り」と涙ぐみて語りける。モンテスキューはこれを聞いて感情うたた胸に逼りしが、強て其情を抑へて、少しも面に現はさず、言葉すくなに其心がけを褒め、尙ほ少年に其言葉を續かしめて、其父及び海賊の住所姓名まで、殘りなく問ひけるに、少年はもとモンテスキューをば知らざれど、其間ひ慰めらるゝがまゝに、包み隱す所なく、皆打ち明けて語りぬ。モンテスキューは一々聞きて其孝心と境遇とを取合せて、いとゞ哀れをそへまさる。此長き物語にて覺えず夜もいたう更けたれば、船を回さしめて別れぬ。少年は後にて獨り思ふやう、「今宵伴ひし客は如何なる人か知らねども慥かに並々の人とは見えず、余は永く今宵のことは忘れじ」と。とかくして六週間を過ぎし後、或夜少年は家に還りて母、姉と、もろともに、麁末なる食事をなしつゝ、前夜のことども言ひ出で、言語の

莊かなりし樣などを語りける、時しも俄かに門の戸を打明けて入り來るものあり、皆々驚きて之を眄れば、暗き燈に影うつれり……これなん明け暮れ歎きける父にぞある。ロベルは奴隷を免れたるが上に十分の旅費をも渡されて歸りぬ。夢耶、幻耶、親子四人はいみじう嬉しく、醉へる心地して覺えず數日を過ぎたりけるが、ロベルの言へるに、「さてもさても、余を救ひしものは誰ならん」——「噫父上よ、前夜或る客に伴して舟凉みせしが、父上を救ひしは論なく此客ならん、兒は折り〳〵母上に此客のことを語り侍りき。噫、何時か再び此恩人に出遇ひて、吾等四人の喜びを表はし、其海山の恩を謝することを得てしがな。」ロベルは思ひがけなくも知らぬ人に救はれて家に歸り、昔しの朋友などを音信れ、其信切の補助によりて商業をも始めけるが、思ひしより繁昌しければ、後には大なる富を得て、一家安穩に暮したり。されど少年が恩人を求めんとの心は、片時も止むことなく、彼方此方を探し求めけるが或日曜の朝に繁華なる町を通ひける際、不意に其恩人に出遇ぬ。少年は直ちに其足下にひれ伏して叫びけるやう、「噫、

吾恩人よ」、これぞ少年が僅かに言ひ得たる詞にぞある。其喜びに逼りしまま、其謝辭をは中々に、言ひ出すことも出來ざりき。其人は何故に斯くは恩人など丶呼ぶかと問ひけるに、少年、「こは如何に、それを知り給はぬことはあらじ。其を忘れ給へるか。某が父を贖ひ還し、親子安穩に暮すを得させつる御恩は」……「吾友よ、如何に御身は、かゝる事を余がしたると思ひたるぞ、世には慈悲深き人も多きが、かゝる人は決して其惠に誇りて、名を求むることなどをば好まねば、御身の父を救ひしも、かゝる人にやあらん」、と少年を勞はり起し、堅く握れる手をば放し、群衆を推し分けて忽ち見えずなりにけり。其後少年は再び此恩人に出遇ふことなかりしかば、其誰なりしかは世に知られざりき。モンテスキユーは當時ボルドー府の公會議長を勤めしが、後廿四年の間、拮据して萬法精理てふ書を著はし、其名世界に聽きければ、其歿せる後、書き殘しし筆跡は、紙の端にても、人々之を金璧に比べたり。或人其手帳を得たるが、其中に、一千五百圓を英人のメン氏に送るとのみ記し、其理由をば載せざりければ、不審に思ひ、態

々當時カジックスにて銀行頭取をしゝメン氏に問合せたりしに、其人返書に、「此金はボルドー府公會議長モンテスキユー君の命により、テツアンの海賊の手より奴隷となれるマルセイユの一商人を購ひたり」とありければ、人々始めて此恩人のモンテスキユーなりしことを知りたり。ワルクナイエル氏親しく此話をロベルの親族より聞き傳へしと云ふ。（赤沼金三郎氏哲學論叢）

さすれば吾人の行ひは善惡共に隱さうとて隱しおほすことはできませぬ。何時しか世に知れ、人に傳はるもので、古へより一人も凶惡にして後世まで人に其凶惡を知られざる者なく、正善にして最後まで其正善を知られざる者はない。善因善果、惡因惡果とはこのことであります。故に吾人は速かに因果の迷ひを除いて天地自然の公道は正善にあることを確信して正智を以て眼とし、慈悲を以て足として世を渡らねばならぬのであります。

第八章　理想と實行との歸一——修證不二論

修とは修行とか修養とか申すこと、證とは修行の結果として得たる大悟とか證得とか申すことである。即ち修因證果と熟字して、修は平生吾人の工夫錬磨を積むこと、證は吾人の工夫錬磨の効によりて明確に道理を明らめ精神の安住を得るのであります。譬へば修行は學生が學校にて毎日學問する如きもの、證得は學校を卒業する如きものである。また譬へば修行は食物を咀嚼するが如く、證得は食物が身體を養ふが如くである。然るに禪門に所謂、修證は修の始めなく證の終りなしと申して證得をし安心をしたから、それにて修養は終りになるといふのでない。譬へば小學校を卒業したから、それにて學問は終つたとはいはれぬ、更に中學に進み、高等學校に入り、大學に進み入りて研究し、大學を卒業しても、それにて學問が卒つたのではない、更に終身拮据勉勵して益々學問の堂奥に入るやうなものである。さ

れば學問には無限の進趣がある。これと同時に小學の卒業も、中學の卒業も、高等學校及び大學の卒業も一段一段の證得であり安心である、否、毎日毎日一事を學べは一事を得るのであるから、修業あり證得がある。されば學ぶのが其儘其所得なので、修行と證得とは別にあるではない。今日今日の勤めが修行なり證得なりである。前の譬喩にて言へば食物を咀嚼する間に食物は體内に吸收せられ、吸收せられたる食物は身體となりて更に食物を消化するが如くであります。これを修證不二といふのである。

さすれば人間の一生は大なる石造の高樓を築きつゝある如くで、毎日毎日一個若しく數個の石を積み上げて行く、然れば吾人が築きつゝある家は如何なる法則に從ふて築かねばならぬか、また如何なる目的に使用するやうに作らねばならぬか、これ大なる疑問である。思ふに世界幾億の人類は皆それ〴〵力を盡して此大厦の建築に從事して居るのであるが、さればとて實際に建築の目的を意識して努力して居る人は少いのである。大凡生物の進歩發達に三段の階級があるやうに思はるゝ。第一は無意識的時代、第二

は意識的時代、第三は目的を意識する時代である。

土瓦石芥の類より草木及び下等なる動物にありては全く眠れるが如く無意識の狀態にありて、自個の存在を殆んど知らずに居る。之に反して高等の動物は意識を發動して自己の存在を知り、單に機械的、反射的に活動するのみでなく、意志の働きによりて自ら思ふ如く活動しつゝあるを見る。然れども彼等は單に生活せんが爲めに生活するのみで何等かの目的ありて生活するを知らぬのである。人間にありても單に自身の生活の爲め、子孫の生活の爲めに努力して日もまた足らず、生活の爲めに生活して毫も何等の目的ありて生活するとは知らざる人がある。それより更に一段の進歩をすれば人間生活の目的を意識して生活するやうになる。これが生物進歩の三階段であります。

次に人間にも同樣なる三階段の進歩發達がある。即ち人間が母の體內にて細胞である頃より漸次に發達生長して體外に生れ出で、嬰孩にして裸襁にある間は夢の如く眠れる如く一向に無意識的である。然れども次第に生長

するに從て自身を認識して他人との區別を知り、自己の意志に任せて活動せんとするやうになる、これ一段の進歩であります。然れども此意識的生活の時期を通過して目的を認知し、其目的に合するやうに生活するものは少いのである。

譬へば河の水が自然に低き方へ低き方へと流れて東西に曲折するけれども遂には必ず大海に注ぐ如く、生物も生存競爭をしつゝ幾百萬年の長日月を通じて進歩したる結果或一定の目的に向つて進みつゝあるが、河水が其流るゝ目的を知らざるが如くに生物も其目的を理解せざるものが多いのである。而して生物は如何に生活すべきか、如何に生物の生活すべき舞臺は作られてあるか、如何にして活動は可能であるかといふ問題を吾人に敎へるものは百科の學問でありまして、如何なる目的を以て生活し、如何なる活動をしたならば其目的に添ふであらうかといふ問題を吾人に示すのが哲學や宗敎であります。

然り而して我佛敎に說く所は人生の目的は智德の向上にあると申すので、

前回の講義に詳述したる悲智の二つであります。人生の目的が智德の向上にあるといふは決して空論や、空想を逞うした次第ではないので、地球發達の歷史に徵して明かなる事實である。何となれば我地球が幾十億萬年の長い春秋を閱して漸く原始生物の生活に適する狀態となりてより今日人間全盛の時期に至るまで、生物進化の階段は一歩一歩、智德の二つに於て進歩をなし、人間の出現してより今日の文明に至る迄大約二十五萬年の歷史も等しく智德向上の歷史に外ならぬのである。さすれば吾人の將來も亦智德の向上を一貫の主義とせねばならぬ、これを今日流行の語にて申せば智德の向上を理想として毎日毎日之が實現に努力するのである。而して一の理想を實現すれば、また其上の理想を形成して之を實現し、當該理想を實現すれば更に其上の理想を形成して愈々益々無限に進歩し無限に向上するを努めるのである。この理想を實現せんとするの努力は即ち修行で、理想を實現したのは證得である。故に修の始めなく證の終りなしで、限りなく智德の向上を期するのであります。

是に於て乎、四弘誓願にも、

衆生無邊誓願度　煩惱無盡誓願斷
法門無量誓願學　佛道無上誓願成

とありまして、衆生は無邊無數に多いけれども誓ふて濟度したい、煩惱の迷執は盡くることなく澤山あれども誓ふて斷じ盡したい、敎法は量りなく多くあれども誓ふて學び畢りたい、佛道は無上甚深であるけれども誓ふて成就したいと願ふのであります。此四句を要約すれば第二句の煩惱無盡誓願斷と第三句の法門無量誓願學とは正智を得んとする希望で、第一句の衆生無邊誓願度と第四句の佛道無上誓願成は慈悲を行はんとする希望である。されば此四大願とは智德を圓滿にせんとの大希望に外ならぬ。

かくして毎日毎日の修行が最も肝要なる務めであるから、修證義にも

我等が行持に依りて諸佛の行持見成し、諸佛の大道通達するなり、然あれば則ち一日の行持是れ諸佛の種子なり、諸佛の行持なり

と示されまして一日一時一刹那の修行も非常に大切なる安心解脫の素地で

あり、佛祖の行持である。故に禪の宗旨は一も奇特玄妙といふて不可思議なる出來事や、俗耳を悅ばすやうな一種奇妙なることを敎へるのではない。昔し黃蘗希運禪師が天臺山に遊びました時、一人の雲水僧が同伴となりましたが、妙に其雲水の眼が輝いて居る。暫くして二人共に大なる谷川の邊に來りました、然るにこの谷川は水勢急にして水は溢るゝばかりに流れて居る。且つ渡るべき橋もないから黃蘗も暫時躊躇しつゝあると、件の雲水はいざ渡りませうとて裳をかかげて水上を行くこと陸地を蹈むが如く、中流より後ろを顧みて早く渡り給へと黃蘗にいへば、黃蘗は大いに憤りまして、おのれ、羅漢なりと知らば早く汝が脚を打ち折りてくれんものをと申しました。是に於て羅漢は黃蘗を讃歎して眞に是れ大乘の法器なり、我及ぶ所にあらずといふて何處ともなく消え失せたといふ話しがある。這は謂ふ迄もなく歷史的事實として見られぬ話しであるが、禪の要は神通變幻にあらざることを諷したものであります。

然るに兎角宗敎といへば何か一種超絕的な、不可思議變幻のことがなくて

は物足らぬやうに思ふのが幼稚なる人の常である。這は小兒野蠻人に於て見る所の現象で、小兒が變幻の事を好み、奇妙なる話しをすると耳を欹てゝ聽きますが、野蠻人及び無智なる人士は兎角此弊を免れぬ。ロングフェローが詩中に滑稽な話しがある。

或る山寺にアンチンとチモシイといふ二人の雲水僧がありまして夏日行乞に出て多く麥や米を貰ふて背に負ふて寺へ歸る途中、荷物は重し汗は流れる非常に困難したるが、アンチンは元來お心よしの僧で少しも惡意はない人物であるから正直に荷を負ふて先きへ行く、チモシイは道樂坊主で酒も飲み賭博もする魚も食ふ、オマケに全身豚のやうに肥えた大入道でありまして後から荷物を負ふて苦しげに歩みつゝ、何か善い方便を回らして此重荷を寺へ送らうと思案して參りました。良々久しくして二人は一の林の所に來ると一頭の驢馬が木に繫いである、チモシイはこれ幸と荷物をおろして驢馬に載せ、アンチンの荷物もおろさせて之を積み、此馬を寺へひいて行くやうにとアンチンに申しますから、アンチンは何の分別もなく、驢馬

をひいて寺へ還りました。然るにチモシイは驢馬の手綱を解きて已が頸に纒ひ一方の端を樹に繋いで其蔭で午睡して居りました。すると驢馬の主人たる次郎は山より薪を伐りて出て來て見れば驢馬は何時の間にやら大入道となつて居る。そこで呆然自失、如何したことかと見てゐるに、チモシイはやはら身を起し、空涙を流して申しますには次郎さん私は隣村の山寺に住むチモシイといふ雲水で御座りますが、餘り多く魚を食ふたり酒を飲んだりした爲めに現身に驢馬と化して、御前の家に買はれて行き、それよりといふものは夏となく冬となく追ひ使はれ草と藁ばかり食ふて苦役をした。それで漸く罪も滅びて再び元の出家の體に立ちかへつた。どうぞ一旦驢馬となり主人となりて御前さんと主從の緣を結んだものだから、今晩は御前さんの家に泊めてくだされといへば、次郎は氣の毒に思ひ、貴僧と知らばあのやうに使ふではなかつたものを、知らぬことゝはいへ、可愛さうに甘いものも食べさせず、定めて辛いことであつたらう。そのかはり今晩は少し御馳走を致さう程に堪忍してたまはれといふ。チモシイはこゝぞとつけ

入り、然らば主人の御心に從ひ今晩は充分酒肴を頂戴致しますとて、二人つれだちて次郎の家に戻りまして次郎は早速其妻や下男に命じて酒肴の用意を十二分に致しチモシイをもてなせば、チモシイは長鯨の百川を吸ふが如くといふ古人の形容の如く、杯を左手に持ち右手に箸をとりて飲みては食ひ食ひては飲み、息をもつかず飲食すれば次郎は大いに心配して其樣に飲食して再び驢馬になつてはならぬ、靜かに召し上れといふに、チモシイは長の年月草と藁のみ食したれば空腹にて致し方なし、假令再び驢馬にならうとも飲める丈け飲み食へる丈は食はせ給へとて、熾んに飲食し、醉眼朦朧となりて治郎が妻に戯れ言さへいへば治郎は一方ならず心痛して、辛くも其夜はチモシイを臥床に睡らせました。翌朝に至りてチモシイは大きに厄介になりしとて治郎の家を立出て悠々と山寺へ歸りまして、方丈に面會し、昨日アンチンのひき來れる驢馬は隣村の治郎が菩提の爲めに寄附するとのことで御座ると申上れば、方丈は殊勝のことなり、されど山寺にて驢馬は不用なれば市に賣りて金にせよとて、馬市場に出しました。治

郎は驢馬を失ひましたから市場に出て善き馬を買はんと彼處此處を見廻すに、チモシイと全く同じなる驢馬のあれば、非常に駭きまして、折角、出家にかへつたばかりに餘り多く飲食して再び驢馬になりましたものと思ひ、馬の耳に口を寄せて、チモシイ、御坊は私の言ふことを聞かず餘り多く食ふたから又も驢馬になりなされた。併し私が買ふて大切にしてやるから安心しなさいと細語けば、驢馬は耳の中に風の入りたるに心地悪しと思ひけん、ブル〳〵と耳を振れば、治郎はチモシイ、御坊は知らぬ顔しても、それはいけぬ、私は御前の毛色を善く知り居るとて其驢馬を買ふて歸り、チモシイと名けて一生大切に飼ふて置いたといふ。

這は幼稚なる人民が阿呆らしき迷信を懷けるを笑ふた物語でありますが、今日文明と稱する國々にも以上の物語と大差なき迷信は多く行はれつゝある。我國に於ても兎角小供らしい奇談怪説を好んで宗教に附加し、又病的なる信仰の蔓延するは好ましからざることである。宗教は其樣に變幻奇怪なるものではない、眞面目のことで、吾人の毎日毎日の勤めが宗教である。毎

日の務めが修行である。されば百丈は

日日是好日

とて一年三百六十五日一日として悪しき日はなく、皆佛法修行をなすべき好日であると示され。涅槃經には

如來の法中には吉日令辰を選擇することなし

と示されてある。故に栽松道者は松を植ゑて修行し、六祖大師は米を搗きつゝ御修行なされたのであります。カアライルの語に

最も高きに達する道途は最も低き所に横はる

とある如く吾人が平生の卑近なる義務の中に高尚幽玄なる道は存在して居るのである。王陽明も

饑來喫飯倦來眠、　只此修行玄更玄、
說與世人渾不信、　卻從身外覓神仙、

といふて喫茶喫飯の平生の修行が玄中更に玄なるを知らずして神仙の道を他に求むるを戒めた。基督も

神の國は顯はれて來るものにあらず、此に見よ彼に見よと人の言ふべきものにあらず、夫れ神の國は爾等の裏にあり

と申して神の國は吾人の裏にあるを示した。また大祖國師は

茶に逢ふては茶を喫し、飯に逢ふては飯を喫す

といはれて日用喫茶喫飯の外に六づかしい悟りがあるではないと示されました。洵に其通りで茶に逢ふては任運に茶を喫し、飯に逢ふては無分別に飯を喫することができれば最早大安心を得たのである。然るに吾人には容易に茶に逢ふて任運に茶を喫することができず、飯に逢ふて任運に飯を喫することができぬ。茶に遇ふては種々の妄想を起し、飯に遇ふてはさまざまの下劣なる慾望を起して心中常に波瀾を生ずるのである。悟りといふも證果といふも畢竟は一心其物にある。誌公の語に

即心即佛を解せざれば驢に騎りて驢を覓むるに似たり

とある。西洋の或精神病患者は身體の感覺を全く失ふたる爲め、自己の身體は久しき以前に死して消滅したりと信じた。而して醫師が患者の腕を壓

す時は患者は駭いて、腕があつたとて喜び、看護婦が其頭を壓せば、我頭があつたとて喜び、鏡を見すれば非常に其頭首の存在を見て打喜び、炭酸浴に入れて全身を刺戟したるに全身が復活したとて喜んだといふ話しがある。即心即佛を解せざる人も亦此精神病患者の如くであります。

要するに禪の要は當位即妙で、柳暗花明、艶櫻素梅、物に當り事に應じて其天眞の妙を掬するにあり。俳人芭蕉の大悟せしといふ古池眞傳なるものは小築庵春湖の上梓したるもの、元より史的事實としては見難からんも、禪の妙味を知るに於て一助たるに足らんと思へば、こゝに引證して讀者の爲めに指注することゝせん

常州鹿島根本寺佛頂長老、博覽大悟の知識なり、桃青翁舊交の師なりと始めに記してある、芭蕉と佛頂和尚との關係は和尚が江戸深川の臨川寺、長慶寺などへ在住の時、芭蕉と玄機を談じたるものゝ由、臨川寺は本は臨川庵とて芭蕉の住庵なるを佛頂和尚が上京する度毎に之に宿して芭蕉と禪を談じたるが、天和年中、芭蕉を開基とし佛頂和尚を開山として臨川寺と

したりといふ。芭蕉に鹿島紀行あり、曾良と共に根本寺に至りて佛頂和尚に見えたる時、

月はやし梢は雨をもちながら
寺に寐てまこと顔なる月見かな
雨に寐て竹おきかへる月見かな　曾良
をり〳〵にかはらぬ空の月かけも
ちゞのながめは雪のまに〳〵　佛頂和尚

の詠あり、何れにしても芭蕉は佛頂に參して玄機を味ひたるに相違はない。それより次の文に

近來江戸深川長慶寺へ移轉せられたるに桃青を訪はんとて六祖五兵衛を供して芭蕉庵に至る

とある。六祖五兵衛は佛頂和尚の僮僕にて六祖と渾名し、一丁字をも解せざれども佛頂に參して徹底したる奇人にて芭蕉が悟道の友なる由、次に

六祖先づ庵に入りて、如何なるか是れ閑庭草木中の佛法、桃青答て曰く

葉々大底者大、小底者小

六祖先づ問ふて如何是閑庭草木中佛法といふた、佛法とは道のことで、つまりは吾人が安住の地であります。されば閑庭草木中の佛法とは寂々寥々たる芭蕉庵の草木の中に居て翁が安住する處は那邊ぞと問ふたのである。其時蕉翁は葉々大底者大小底者小と答へた、木の葉の大いなるは大きく、小なるは小さいとの意で、草木の中にも、岩石の中にも安住の地はある。古人が石頭大底者大小底者小といはれた如く、青々たる大小の木の葉の中にも、大石小石の碌々たる中にも眞如の佛は見え、安心の地はある。一昔し唐の代に有名なる學者の李翺が藥山禪師に問ふ、「如何是道」と、佛法といふも道といふも同じであります。藥山此時指を以て天を指し、また水瓶を指していふ、「會すや」、會すやとは理解したかとの意である。李翺云く「不會」、わかりませぬ。藥山便ち、「雲は青天にあり水は瓶にあり」と申されました。夫より長老内にり、近日何の有る所ぞ。桃青答へて曰く、雨過洗青苔、それより佛頂長老が庵に入りまして問ふ、近日何の有る處ぞ、近頃は何か

變つたことでもあるか、平生安住の地は如何と一拶せられた。芭蕉は何處までも目前の境を以て答へ、昨夜の雨が庭中の塵を洗ひ去りて青苔も一層の青さを增して閑雅の趣を添へましたと答へた。此頃は芭蕉も餘程修養を積んで造詣する所が深くあつたに相違ない。

又問ふ如何なるか是青苔未生以前の佛法とある時、池邊の蛙、一躍して水底に入る音に應じて、蛙飛込む水の音と答ふ。

佛頂和尙は再問して、雨過洗青苔といふ目前閑雅の境になりきつた所はよいが、更に青苔未だ生せず、草木國土も未だ生せざる所、如何に安住の地を求めんかと深刻なる問ひである。大概の人は此問ひには答へられぬのであるが、流石は蕉翁、蛙の水に飛込むを其儘に何の造作もなく、蛙飛込む水の音と例の俳諧句調にて、すら〳〵と答へたるは實地に蹈着したる漢である。

佛頂長老、珍重珍重と唱へて持玉ふ所の如意を桃青に授與す

佛頂も是に於て贊歎しまして珍重珍重といはれ、蕉翁の悟道の證として如

意を授けられた。如意とは笏に類したる法器であります。

長老席上に紙毫をとりて、本分無相、我是什麼物、若不會、爲汝等諸人、下一句子、看看、一心法界、法界一心、と書して諸風子に示し給へば、其時始めて法界と一心の水音に耳ひらけて、實に桃青翁の省悟を各、隨喜しけるとなり

因みに佛頂長老其席上にて筆をとり紙を伸べて記したる文句に、本分無相、我是什麼物とある、本分とは前に謂ふ所の道とか、佛法とかあるのと同じで、道といひ、眞理といふ元來一定の相狀のあるものではない、我といふも畢竟は何物であるか、若し會せされば、若し了解ができぬならば、汝等諸人の爲めに一句を下して見せやう。見よ。一心法界、法界一心で、法界といふも宇宙といふも同じである、宇宙は即ち一心、一心は即ち宇宙、と記された。そこで芭蕉の門弟衆も師翁のいふたる蛙飛込む水の音の一句に一心法界の旨を道破せられたるを知り各、其省悟を喜びました。

このとき杉風謹で桃青翁を賀して、我師風雅に參禪の功を積で、今に水

音大悟の一句に佛頂長老證明付法の如意を授け給へば、今は天下に宗匠たるべしとて賀儀をのぶ

杉風は芭蕉の弟子であります、時に杉風の中すには我師蕉翁は風雅を弄ぶ中に參禪して今は水音の一句に佛頂長老の印可もあれば、これより天下の宗匠たるべしとて喜び祝ひましたのである。

嵐雪が云ふ、水音に俳骨ことゞく連續すといへども、未だ冠の五字をきかず、師是を定めたまへ。翁のいふ、我もこの點を思へり、しばらく諸子の高論を聞て、而後に定めんと欲す、二三子試にこの冠五をいへ、きかん

時に嵐雪の云ふには水音の一句は俳諧の下の句にて完全に出來たれども未だ冠の五字が不足して居る。願くは師翁之を定め給へといふた。依て芭蕉は諸子の高論を聞て後に自ら定めんとて、先づ二三子の技倆を試みんとしたのである。

各〻首をかたぶけて錬思す。やゝあつて、杉風、「宵闇や」の五文字を出す。

嵐雪は「淋しさに」と伺ふ、其角ひとり「山吹や」と色即是空々即是色の曲をつくして其姿を調へんとす。翁つくゞくと見て云ふ、吾子等が冠五各〻一理を含んで平生の句にまされりといふべし。就中其角が「山吹の」はなやかさ、ちから有て好し。さりながら、かゝる七五の冠たてんは觀相見樣の理を離れて、只此庭のこのまゝに、我は「古池や」とおき侍らんとあるに各〻あつと感じ入る。

各〻首を傾けて考へたるが

宵闇や蛙飛込む水の音　杉風
淋しさに蛙飛込む水の音　嵐雪
山吹や蛙飛込む水の音　其角

とつけたるに、蕉翁は二三子の句を讃め、殊に其角の「山吹や」の一句、花やかにして力ありといひたるが、我は只此庭の儘をとて、古池や蛙飛込む水の音と定めたれば一同アッとばかり感じ入つたとのことであります。

古池や蛙飛び込む水の音、妙なるかな。爰に俳諧の眼ひらけて天地を動

かし、鬼神を感せしめぬべし。是こそ敷島の道ともいふべく、佛をつくる功德にもたくらぶべけれ。人丸の陀羅尼、西行の讃佛來も、わづかに十七字の中にこめて向上の一路に遊び、眞如法性の光をはなたれて遠く天下の俗誹を破る。今時の俳人を正風の眞路に導かんこと此翁なり。嗚呼、天地風雅也、萬象風雅也

これは記者の文にて蛇足の嫌ひがあります。何は兎もあれ芭蕉正風の俳諧には天地を洗ひ清むるの力があるやうに思はるゝ。天目中峰和尚の句に

印破虛空千丈月、洗清天地一林霜

とあるが、此間の消息は禪者が胸中の風月である。

箔ぬりの佛も人の案山子哉　環溪
世の中は三分五厘梅の花　物外

第九章　心操身行

第二回より第八回まで七回の講義に於て、身心不二、依正不二等の七個の不二を陳べまして、禪の一元論を明かにし、其一元論より必然的に起るべき人生觀、及び其倫理主義の大要をも略述致しましたから、今回は心操身行と題して、修證義の文によりて吾人が日用の心得方を御話し申しませう。先づ第一に肝要なる心得は、懺悔滅罪である。懺悔滅罪とは一言にいへば改過遷善、即ち吾人の過失を悔いて之を改め再び同一の過失に陷らぬやうにして善に遷るのである。世間には多く惡人と稱する人物があり、罪惡も澤山ありますが、這は皆人の狂愚なるより犯す所の過失に外ならぬ。假りに人間を三種に分類するならば第一に良民即ち普通人民、第二に惡人即ち半愚半狂人、第三に眞正狂人である。されば惡人とは狂愚なる人物、罪惡とは其過失であります。而して吾人は惡人の如く多くの罪科を犯さずとするも往々過失に陷り罪を作ることがある。如何なる人にても絶對的に罪の

ない人はない、何か少しは心に罪を犯して居る。誰しも表面には善人を粧ふて居るが其裏面の心内にたち入りて詳細に穿鑿すれば必ず罪過を見出しませう。古への戀歌に

なき名ぞと人にはいひてありぬべし
心の問ばいかゞ答へん

とありますが、戀愛のみではない、罪過に就ても吾人の良心が問ふたならば吾人は絶對的に罪はないなど公言することはできぬ。是を以て世間の體面を粧ひ虚榮心に蔽はれて中心より其過失を悔いざる間は道に入ることはできぬ。之に反して虚榮を捨て世間の體面に頓著せず、中心より其過失を悔い、淨裸々、赤條々となつた所が眞の懺悔滅罪である。併し滅罪といふて一旦犯したる罪の結果が一時に消滅するといふではない。吾人が改過遷善すれば罪の根本を切斷し、清淨純白の精神となるから、人格が一變してしまう。且つ罪過は狂愚より起るのであるから、一朝正智見を開いて狂愚の迷雲を一掃すれば、恰も晴天に雨の降ることなきが如く罪障は全くなく

なるのである。これを衆罪は草露の如く慧日能く消除すといふのであります。

這は人間の本性が善であるからのことで、若し本性から惡であつたならば罪の根本を斷ずることができぬ、從ひ而して罪過の止むべき期とてはない。これ大なる謬見である。然れども世人は動もすれば罪惡を以て自然の行爲とし、人世といへば罪惡がなくては其眞相を得たものでないやうに思ふて居る。予が嘗て上州伊賀保の鑛泉に浴したる時、伊賀保温泉の本湯なるものを見たるに極めて透明なる水精の如き湯であつた、依て之を飲用するも人體に少しも害はない、然るに此本湯が流れて多くの旅館に設けたる浴室に至る迄には近傍より多くの汚れたる濁水と混じて到底飲用に適せざるものとなる。されば予は僅かに一週間にして伊賀保を去りたるも手拭は紅色に染まりました。それより磯部温泉に行きたるに一人の老婆ありて同じく伊賀保より磯部に來り、予の手拭の染りたるを見て大いに羨み、老婆の手拭と交換せんことを予に請ひました。予は其何の故なるやを問ひたるに老

婆は伊賀保に浴したる者が染りたる手拭を持たざれば耻かしき由を喋々しました。是を以て予は伊賀保の本湯を説明し手拭の染まる如き濁水は伊賀保鑛泉の本色にあらずといひ、諄々として説明を加へたるも遂に老婆をして信せしむることができなかつた。思ふに世の人生を以て罪惡の舞臺とする人士は此老婆の如くで、其末流のみを見て其本源を究めず、人間の過失のみを見て其本性の善なるを見ず、罪過あらざれば人生にあらず、凶逆ならずんば人世の實を表する能はずと思ふは癡の太甚しきである。人心は善であればこそ改過遷善も可能なれ。人心は本來惡であるとすれば惡人が悔い改めて善人となることは不可能であります。ロウヴエルの語にも『人心の誠なることは草の綠なるが如く空の蒼きが如し』とあります。既に懺悔滅罪をしたならば、次に受戒入位といふ心得がある。これは先賢の戒めたる道德的規律を守るので、其道德的規律を實行するときは自然と先聖と同位に住するをいふ。併し吾人の所謂道德の實踐は單に道德を道德として行ふのみではない。例せば孝順は善いことなれば之を行へとのみ敎ふるのではな

い、何となれば汗は善いことを善いから行へといふので善いことは何故に善いかとの説明にはならぬ。そこで孝順は何故善いかとなれば一家の和親は之によりて保たれ、これ徹りせば社會の單位たる家族を破壞するに至る、故に孝順は行はねばならぬ。右樣に説明すると假定しませう。然れば忠義は何故に行はねばならぬか。これも忠義は善いことだから行はねばならぬといふては善いことを善いから行へと敎へるので、忠義は何故に善いかとの説明にならぬ。そこで孝順が社會の單位を成立させるやうに、忠義は社會其物の秩序を堅固にする。若し忠義なかりせば君臣の秩序紊亂して社會は成立しない。故に忠義は行はねばならぬ。右の如く説明すると假定しませう。然れば愛國は如何、公德は如何、信義は如何、禮讓は如何、仁惠は如何、慈善は如何と穿鑿する時は畢竟人類の社會的性情を發達せしめ、社會の完全になるやうにするが善である。右の如く説明すると假定しませう。然れば更らに問はん、社會たる「大我」を完全にするは何故に善きかと。こゝに至りて始めて吾人は倫理學を離れて宗敎信仰に入るのである。倫理學は善と

し道德として吾人の履踐する所のものが何故に善きかとの說明を與ふるもので、それ以上には論究する必要はない。然れども宗敎は更に一步を進めて深く侵入せねばならぬ。例せば倫理上にて自己を實現するが善であるとすれば、宗敎上にては自己を實現するは何故に善きかと問ひ、倫理上最大多數の最大幸福を計るが善だとすれば宗敎上にては最大多數の最大幸福を計るは何故に善いかと問ふて、更に其の上に根據を求めるのである。故に倫理學は道德上の主義を求めて之を確立し、宗敎は其道德主義の根據を求めて之を確定せんとするのである。然れば宗敎にては倫理主義の根據を何處に置くかとなれば基督敎にては神の命令とし、佛敎にて佛心とする。我禪門にては宇宙其物の靈德とするので、自己を實現し、社會を完成するは天地の公道に契ひ宇宙の靈德と合し、乾坤開闢の目的と合するのであると信じます。是に於て吾人の倫理は一定の根據を得て非常に强力のものとなります。何となれば倫理上の主義を理解したるのみにては悟性の上に依賴して居るから之を實行するに力が弱い、然るに其主義が佛や神の思召に契

ふと信仰する時は悟性の上に感情が加はりますから、大いに力を得るのであります。

こゝに注意を要するは宗敎と道德とは元來別物にて古へは相互に乖戾して居りましたのが次第に聯結し接近して文明的宗敎に至りて始めて二者の並行を生じたのである、是によりて之れを推せば將來の宗敎は愈々益々倫理的となりて終には合く同一となり、宗敎は倫理と化し了るであらうとの說がありますが、吾人は大いに異議があります。何となれば道德と宗敎とが古代は乖離して居つたといふが既に誤解である。例せば昔しゼルマンの或種族、及び南洋の土蠻中には親を殺すの迷信があり、印度やアラビヤには子を殺すの迷信がありました。これは今日より見れば非常に背德であります、其當時にありては決して道德と矛盾して居たのではない、ヤハリ宗敎と道德とは一致して行はれたのである。而して古へは宗敎と道德とが乖離して居つたやうに見えるのは今日吾人の進步したる道德主義より判斷するからのことで、下等なる宗敎信仰には下等なる道德心が相應し、高等な

る宗教信仰には高等なる道德心が相應して、二者は古今に亘りて並行し來つたので、換言すれば宗教は常に道德の根據を與へつゝ今日に臻つたものであります。

加旃、倫理にして宗教を根柢とせざる時は其主義は浮雲の如くにして、學者の說明によりて始終動搖せらるゝを免れぬ。之に反して宗教を根柢とせる道德は其力强く、其基深くして牢として拔くことはできぬ。マホメットが「假設、日輪を我右手に入れ、月輪を我左手に入れて、之を與ふるが故に汝の說を改めよ、若し應せざれば汝を殺さんといふものあるとも予は我說を變せず」といひ、ソクラテスが「假令、如何なる罪科に處せらるゝも決して從來の主義と生活とを變更する能はず何となれば心中一點の耻る所なく更に侮い改むるの要なければなり」といひたるが如き、また天桂和尙が世人の毀譽を心に介せず

まゝよやれすめばこそわれなにはへに
よしといふともあしといふとも

と詠じ、佐久間象山が

謗者任汝謗嗤者任汝嗤天公本知我不覓他人知

といひたるが如きは自信の堅きこと金剛の如くであります。

次には發願利生と申すことを心得ねばならぬ、發願利生とは如何にもして社會の利福となることを爲んと希望するのである。これに四種の要目があります。第一は布施といふて人に物を施與して其報酬を貪らざる心掛けである。昔し圓覺寺に誠拙和尙といふがありましたが、此人は宇和島の生れで宇和島藩主伊達公が佛海寺の靈印和尙を訪ふて種々なる物語のありました時、誠拙は雛僧にて和尙に近侍して居た、すると藩主が誠拙に肩を打てといはるゝので誠拙は遠慮なく藩主の肩を撲ちました、其折伊達公は誠拙を願みて予は此度江戸表へ出府致すにより其方に善き法衣を買ふてとらする、其かはり能く肩を打てといはれた。

かくて、藩主は無恙江戸へ出府し再び宇和島へ還られて佛海寺に參詣せられ、靈印和尙と對話の時に公は再び誠拙に命じて肩を打てといはれる、依

て誠拙は肩を撲ちながら、殿様先日御約束の法衣は如何でありますといふに、公はつい忘れて買はなかつたとの仰せ。小僧は大いに怒りまして、此野郎、武士に似合ぬ二言の奴めとて殿様の頭をポカリと撲ちました。靈印和尚は驚天して小僧を制し藩公に無禮を謝し只管に御手打にでもならぬやうと心痛をしました。すると藩公は打笑はれ、これは予がわるかつた、今此宇和島にて予が頭に拳を加へる者は此小僧一人である　隨分可愛がつて育て遣はせ、中々に見處ある人物じやと御讃めの語を頂戴した。果せる哉、誠拙和尚は後に有名なる知識となりまして圓覺寺へ出世なされた。而して圓覺寺の樓門が頽破に及びまして其修繕の寄附を募りたるに、江戸深川の豪商に白木屋某なる人がありまして、金百兩を態々圓覺寺へ持參して喜捨を申出た。其時誠拙和尚は爐邊に坐して粥を煮つゝありましたが、右百兩の金を受領しても餘り謝禮もいはれないので、某も少しく不平を懷いて、折角、江戸から百兩の金を持參して寄附致すのに老師は一言の謝辭も賜はらぬは何故ぞと申しますると和尚は粥鍋の蓋をとりて某に打つけ、汝が功

徳を積むに老僧が禮をいふに及ばうぞといはれた。これは極端なる例でありますが、慈善もこれに對する報酬を得んとするやうでは商賣主義で眞の慈善ではない。スピノッァの語にも

幸福は徳の報酬にあらず徳其物なり

とある如く道徳は其報酬として幸福を得る故に價値があるのではない、道徳其物が價値があるのであります。故に布施とは今日流行の語にて申せば献身である。誠忠の軍人が國家の爲めに戰ふ時には一點私心を介せず、戰後に報酬を得るを目的として戰はざると同じである。されば日露戰役中我軍の大勝利を得たるも布施を實行したからである。之を我國の天皇の行ひに徴すれば龜山天皇が元寇の時に朕が身を以て國難に代らんとて勅願文を大廟に奉られ給ひしが如きは献身の實例であります。第二には愛語と申して親愛の語を他人にかけるのである。修證義に

向ひて愛語を說くは面を喜ばしめ、心を樂しくす、向はずして愛語を說くは肝に銘し魂に銘す、愛語能く廻天の力あることを學ぶべし

とありまして、他人に向ひて親愛の辭をかくれば其の人は顏を怡ばしめ心を樂しくし、また其の人に向はずして、それとなく親愛の語を以てすれば心肝に銘して其情を樂ましむるものであります。久世大和守重之が或年其邸宅の火災に罹りました時に新井君美は之を弔らはんとて來り會したるが、其日は貴賤群をなして喧噪中なりしも、重之は君美の側に進みて、貴殿も此程火災にて、さこそ心憂からん、兼て著述の書などはいかゞなりしやと親しく問ふに、君美は、幸にして藏書をば燒き侍らずと答へました。重之は貴殿の著はせる書は後世の寶なるに燒かざるこそ天下の幸なれと申されました。君美は正德中には大小の政事に參與したれば老中を始め之を快しとせず、享保の初めには誰ありて詞さへかくる人なきに重之の斯く懇切なるには君美も深く感歎したと申します、また重之は阿部豐後守正喬と同職の間は協和せざりしが、豐後守免職の日、直に其邸に往き、今日までも何事となく會議して互によしあしをも糺しけるに貴殿は早く職を辭し吾はあとに留りて賴み少なく思ふ由誠を面に現はして申したれば豐後守も心解け

ていと辱けなしとて謝しましたといふ。これは愛語を以て人に接する好例でありませう。また今上天皇陛下は旅順開城の時に乃木大將に命じてステッセルは敵ながら天晴の者故、軍人の名譽を以て取扱ひ遣はせよとの勅語を賜はりました。敵將も此仁愛なる御諚には深く感泣したと申します。

第三には利行と申して自他の利益になるやうに致すのである。『元文中日本橋に谷十兵衛といへる浪士にて手跡を敎授する者あり、生計稍々裕にして金貸を營業とせり、然るに火の番組頭伴六左衛門と云ものに貸附し分返償久しく滯りしかば十兵衛之を怨りて已に公訴せんといふ時に六左衛門已むを得ず、さらば利子の滯りを計算して元金に結び、金高を增て證文を書改め、來年に到らば皆償せんとのことにて、一旦示談調ひたり、然るに六左衛門は頗る奸智に富める者にて　其前に實印遺失を屆出て、別に改印を製し、翌年に到り、かねて巧みしことて返償を怠りければ、十兵衛怒りて遂に町奉行役に訴出たり、乃ち六左衛門を評定所へ召出したるに、六左衛門答へて某は金子借受しと曾て覺えこれなし、願くは十兵衛と對審せんといふに

ぞ、然らばとて十兵衛を呼び出しゝに、十兵衛證據として彼證文を差出けるに、六左衛門熟覽して、是は某が實印にはまぎれなけれども、去年七月中遺失したれば、其節御目付へ届出、直に實印を改刻したり、此證文は八月とあれば、某が遺失せしを拾ひとりて證文を僞作せしものと思はるれば、嚴重に御僉議ありたしと申立ける故、十兵衛に謀判の疑ひかゝり再三糺問の末、遂に其罪に陷り小塚原にて梟首に行はれ、其子重三郎は職を奪はれて追放せられたり、重三郎は今年廿一歳の少年にて深く六左衛門の處置を惡み必ず彼を討果して父の怨恨を霽さんと決心し、晨昏に苦心焦慮して六左衛門の擧動を探りしに、六左衛門は家重公の供奉の列に加はり小菅といふ處の邊に出居るを聞き、備前國光の刀を竹杖の中に仕込み、人夫の中に打混じ、小菅御殿の邊に紛れ入りしは元文二年十一月廿五日の曉なり、六左衛門は御供揃の場へ赴かんとて彌五郎橋といふに來りし時、向の竹林に隱れ居し重三郎飛で出、名のりをかけ、父の仇、逃さじと仕込杖拔くより早く切付たるに、六左衛門も拔合せたれども、數年思ひを籠めし孝子の一

刀、あはやといふ間に打込れ、六左衛門は竟に兩段となりて倒れたり、重三郎は多年の本望を達し、止めを刺して退かんとするに、忽ちに竹林の蔭より一人の侍立あらはれ、いかに重三郎、汝がはたらき見届けたり、我は六左衛門が同役高木金左衛門といふものなり、汝は此場に於て打捨べきものなれど、我年比六左衛門が人となりをも心得居れば、此處はひそかに汝に差圖することあり、六左衛門が死骸は、あれなる荒俵に入れ、汝これを荷ふて彼が妻子のもとに送り届け、六左衛門は小菅にて急症にかゝり、遂に歿せし由届出しめ、世間へも披露すれば家督も相違なく、妻子の流浪する憂ひもなく、汝も後難を免るべしといふに、重三郎は其指揮の如くしければ、家督は其子六三郎に下され、重三郎も父の遺業を毀ぎて終身安逸に送りしとぞ』斯く惡事は自他の害となれども利行は同時に自他の利となります、故に修證義に

愚人思はくは利他を先とせば自らの利省れぬべしと、爾にはあらざるなり、利行は一法なり普く自他を利するなり

と示されたのである。昔し仁德天皇は百姓の富みを以て皇室の富みとし給ひ、民の富むは則ち朕の富めるなりと仰せられ

高きやに登りて見れば煙たつ
民のかまどもにぎはへにけり

と詠ぜられましたのは利行を心とせられたのであります。

第四に同事とは同じ事をするにて、他人が喜べば吾も共に喜び、他人が哀めば吾れも共に哀しみ、他人が災害に罹れば吾も災害に罹つたやうに感じて之を救ひ、他人が立身出世すれば吾も立身出世したやうに思ふて共に喜ぶのである。されば同事とは今日の語で申すと同情といふ語となる。同情は心の花で、之なかりせば人生は冷々淡々實に殺風景となり了るのである。同情ある所には春風の如き温き親みがあり、春海の如き洋々たる樂みがあります。古へより聖賢の士は皆同情に篤い人であつた。釋尊の如きは一切の生物に同情を垂れ給ひて殺生戒を説かれたのである、昔し醍醐天皇は寒夜に袞龍の御衣を脱がせ給ふて人民の寒さを自ら感じ給ひたるが如きは同

情深き御美德と申すのである。以上略述したる布施、愛語、利行、同事は佛敎信者の努めて行ふべき大切なる條項であると同時に御歷代の天皇の行ひ給ふたる仁惠の思召である。御歷代の天皇は何れも御盛德の御方ばかりではありますが、中にも龜山天皇、仁德天皇、醍醐天皇、今上皇帝の如きは殊に勝れたる英主にて御はします。而して布施、愛語、利行、同事は此四柱の天皇の心とし給ふた所で御座ります。

是に由て之を觀れば禪の修行は只管に世間に遠かりて寂靜飄逸、枯木寒灰の如くにして人情の外に超然たるを好しとするのではない。世事人情にも通じ、人の哀みには哀み、人の喜びには喜ぶを宜しとする。されど哀みて傷らず、喜びて紊れず、常に情の中正を失はざるが肝要なのである。白隱和尙に參したる御察といへる老婆は晩年に及びて其孫娘を失ひて哀傷しけるに隣家の老人來りて諭すらく、嫗、何ぞ哭するの太甚しきや、人これを聞かば、みな謂はん、嫗、かつて白隱和尙に參して見性し、而も今や孫を哭すること甚しきは何ぞやと、少しく之を省せよ。時に御察老人を睨し罵

つて曰く、禿奴何をか知らん。嫗が涕涙悲泣するは孫の爲めには香華灯燭よりもまさるものぞ』と。以て嫗が哭泣しつゝ尙ほ凜乎たる本心を失はざるを見るでありませう。

次には行持報恩と申すことを心掛けねばならぬ。これは吾人が平生父母の恩を忘れず、祖先の恩を忘れず、君主の恩を忘れず、先聖の恩を忘れず、朋友親戚の恩を忘れず、內外國人の恩を忘れず、國土の恩を忘れず、草木風水の恩を忘れず、天地の鴻恩を忘れぬやうにして、報恩の行を營むのでありませす。中に就て敎主釋尊及び歷代祖師の恩德は高大であるから報謝を等閑にしてはならぬ。されば修證義にも

今の見佛聞法は佛祖面々の行持より來れる慈恩なり、佛祖若し單傳せずば奈何にしてか今日に至らん、一句の恩尙ほ報謝すべし、一法の恩尙ほ報謝すべし、況や正法眼藏無上大法の大恩これを報謝せざらんや

と示してありまして、今日吾人が佛を見、法を聞き、心操を調へ、身行を全うするを得るは一に佛祖たる先賢の遺德である。一句一偈を學びたる恩

も報謝の念を忘れてはならぬ、況や安心立命の大本たる無上大法を傳へられたる鴻恩をや。

然れば如何にして古聖先賢の慈恩に報答するかといふに、古聖先賢の遺訓を遵奉し、古聖先賢の心を以て心とするのである、然れば吾人が日用の行持は自己が佛祖と一樣なる本性を具へて居るとの信念を要する、さなくして、佛祖と吾人とは全く霄壤の別で、如何に吾人が自力にて勉勵しても努力しても無効であるといふ如き、懦弱なる根性を起さず、充分自力を信じ、自信を强くして大いに勇猛精進の心を奮ひ起さねばならぬ、譬へて申せば昔し曾呂利新左衞門が大閤殿下へ言上した話の如くで、或時一人の男が深山に迷ひ入りたるに天狗の爲めに捕へられて將に喰はれんとした。其時彼は一計を案じて天狗に向ていふやう、天狗樣、天狗樣、私を喰ふことを少少御待くだされ、私は此期に臨みて命を惜む次第では御座りませぬが、あなたに喰はれてしまへば浮世の見納でありますから、天狗樣の神力を拜見して冥途への土產に致したう存じます。天狗は之を聞いてカラ〳〵と打笑ひ、

何かと思へばいと容易い望みじやわい。天狗の神力見せ遣はす、いざ何事なりとも望めと大言を吐きつゝ大天狗が其高い鼻を一層高く致しました。

然らば天狗様、あなたの身體を少し大きくすることができますかといふに、天狗はできるとも〳〵とて、ハッといふて大象の如く大きくなりまして、そら見ろと申しました、そこで、最早それぎりですか、も少し大きくはなれませぬかといへば、天狗、何、大きくなれるともとて、小山程になつて、そら見ろと自慢しました。然らば最早それぎり大きくはなれますまい、といふに、天狗も厄鬼となりまして雲をも突くべき大入道となつた。然れば今度は、天狗様、あなたの身體を小さくすることができますかといふと、天狗は小さくなれぬものかとて、人間程の大さになりました。最早それぎりでせう、其上小さくはなれますまいといふに、天狗は否小さくなれるぞとて、小童程の大さになつた。最早それぎりでせうといふに、天狗は怒りて、何くそとて、人形程の大さになつた。これは〳〵小さくなりました、併し、天狗様、最早それぎり小さくはよもなれますまいと揶揄するに、天狗益々

厄鬼となりて、神力を盡して小さくなれば忽ち豆粒程の天狗となりました、そこで右の男は天狗を撮んで掌に戴せ、これは小さいといひながら天狗を口中に投げ込みて嚙み潰して殺しました。上の譬にて知らるゝ如く神力廣大の天狗も其分齊を忘れて小さくなれば人間の口にて嚙み殺さるゝ。吾人も其通りで自己に佛性あるを忘れて徒らに自暴自棄し、凡夫じやの、劣機じやのと稱して自ら卑しくする時は禽獸にも及ばなくなる。然れども自ら分齊を守り、自信を強くし自己に信頼し、深く自心に宇宙の聖靈たる智德の二を具へたるを信じ、宇宙の目的を以て吾目的とし、天地の心と吾人の心とは兩鏡の相對するが如くならしめ、以て向上の一路に進むのが報恩の行である。惟ふに人生の目的は其圓滿なる活動にあるので、圓滿なる活動とは合理的活動で、即ち智德の圓滿なる狀態に進むをいふのである。而して活動なくんば存在はなく、活動あつて初めて其存在は認めらるゝ、されば實在は宇宙活動の根本にして同時に其終局である。吾人の智德的活動は此大恩に報謝する所以のものであります。